911.302
E36h
(t)
00314289

911.302
E 36 h
(t)

×
複写

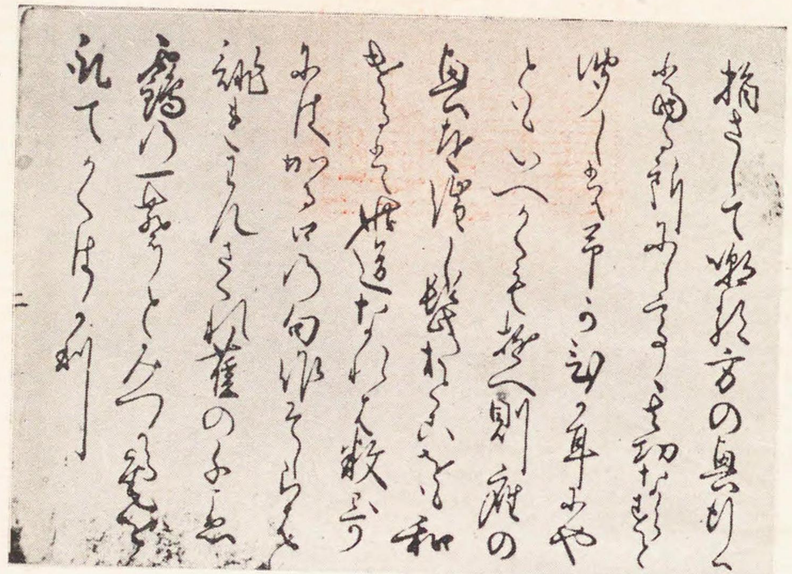
エト8R－132

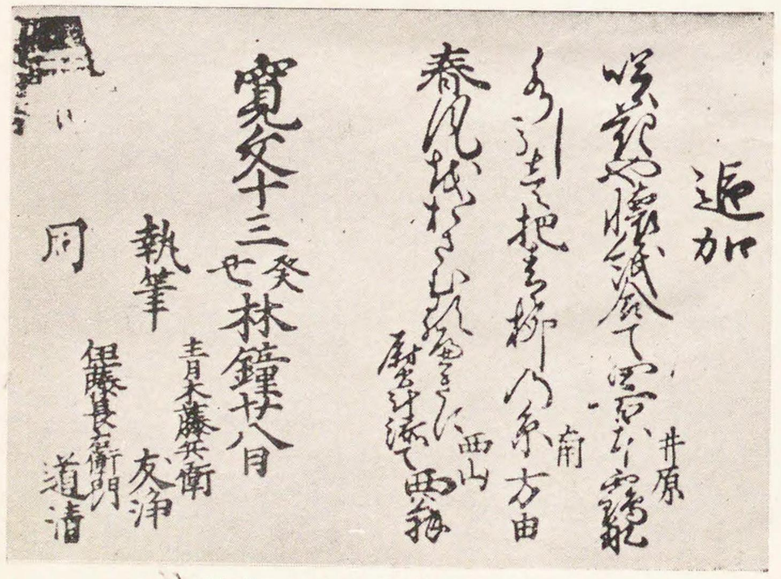
穎原退藏著

俳諧史の研究

改訂版

星野書店刊





追加

寛文十三癸丑年八月

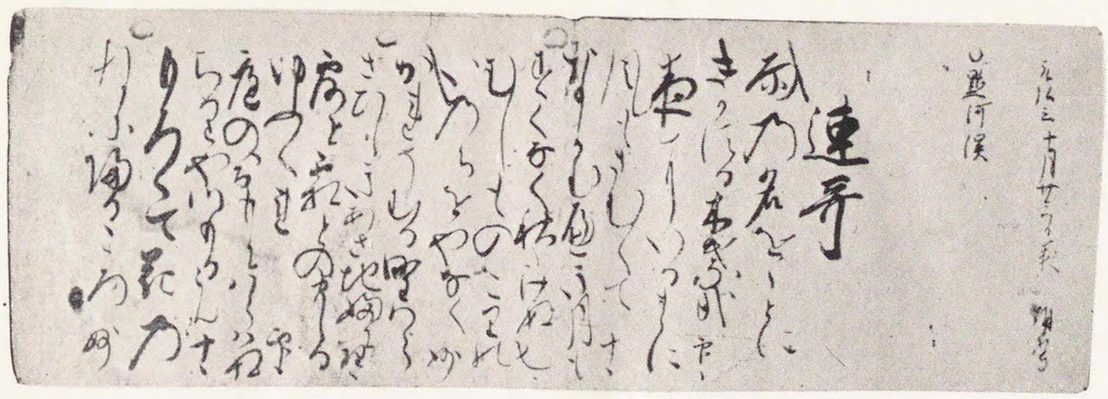
執筆　青木藤兵衛友泊

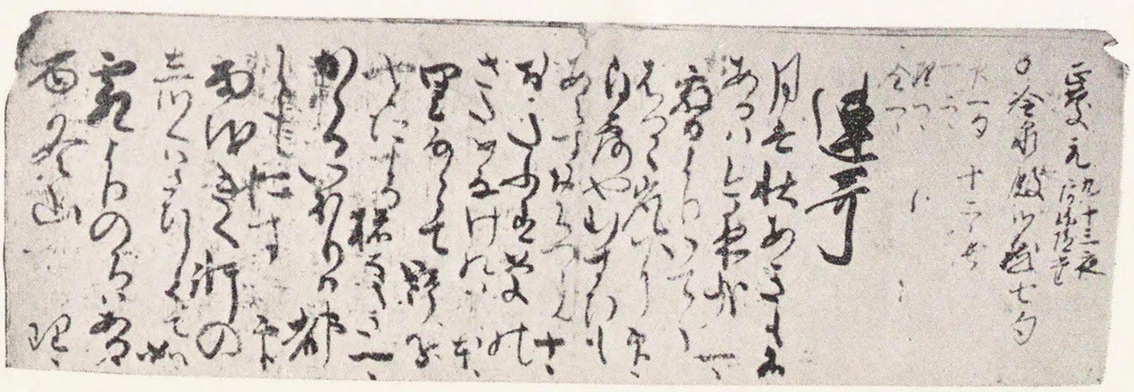
同　佐藤長右衛門道清

911.302
E36h
(5)

国立国会
29.1.-8
図書館

314230





現存最古の長連歌懐紙

改訂版序

この書を世に出してから早くも十五年の歳月が流れた。その間著者の研究は遲々として進んで居ないにしても、補訂すべきことは一二に止まらない。中にはすつかり書き改めねばならないものもある。又他にすぐれた研究が出た爲に、すでに存在意義を失つたものもあるだらう。今書肆の需によつて版を重ねようとする事は、著者にとつて勿論喜ばしくないのではない。しかし十五年前の舊著をそのまゝに出すといふ事は、まことに本意とし難いのである。さればとて紙型によつての印刷に、根本的な改刪を加へることは出來ない。象嵌といふ姑息な方法による補訂しか許されない實狀である。それにしても再版には再版の意義が無ければならぬのだから、書肆と相談の結果大體

次のやうな取捨補訂を施し、最小限度にでも面目を新たにすることに努めた。

「犬筑波考」はその後著者の編著になる『校本犬筑波集』（昭和十三年刊）に收められて重複することになり、「芭蕉雜考」中の「貝おほひの一寫本」はすでに『貝おほひ』の原本による複製まで出て居り、「芭蕉翁十六篇について」と「俳諧十六篇の作者」とは、同書が芭蕉の作でない事が全く明かにされ、「誤傳された芭蕉の句」は著者編の『芭蕉俳句集』（岩波文庫改訂版）並に近く刊行豫定の著者編『新校芭蕉俳句全集』に全部收められるわけであり、「七部集の書目」はそれが柳居の選定になる事が證せられて居る。以上の理由でそれらの項目はすべて今度の再版本に省く事にした。又「芭蕉の逸話」と「松葉集」の二項目も、あまりに片々たるものだから、ついでに削除した。「宗因一座の芭蕉連句」はその後芭蕉の全集類に採錄されて居るが、なほ一般に知られて居ないやうでもあるから、あへて殘しておく事にした。それから「雜俳前史」と「上方の高點附句集」の二項は、別に『雜俳川柳史』として收める豫定であるから、これも省かねばならなかつた。

かうして初版本に比べると多くの項目を減じたわけであるが、それだけ今日に於ける學問の進歩に應じ得たことになる。同時に增補すべき點はもとよりそれ以上に多いのであるが、これは新たに原稿を作り版を組まねばならないので、削除のやうに簡單には行かない。これをもし著者の滿足する程度にやらうとすれば、書肆としては實は舊紙型を用ひて再版する意味がなくなる

のである。それでも例へば「西鶴の俳歴」の如きは、その後加ふべき資料もかなり多くなつて居る。どうしてもそのまゝにしては置けないので、年譜だけは全部新たに組みかへる事とし、本文の方は誤を正す程度に止めた。隨つてこれはもし本文と年譜と牴觸する箇所があれば、年譜の記載に從はねばならぬ。また「西山宗因」の如きも增補すべき箇所が非常に多く、實を言へば結局初めから書直す外はない事になる。ただ著者の研究の徑路を示すものとして、なほ保存價値はあらうかと思つたので、年譜の方で――年譜は特に增補すべき資料が多いのであるが、――一二誤を正した外は姑くそのまゝにした。「俳諧論戰史」についても若干の新資料があるので、これは終に追補記としてなるべく簡略に記述した。

本書がここに版を重ねるに當り、いさゝか面目を新たにした點について、以上でほゞこれを述べた。部分的な小さな補訂は煩はしいから一々記さない。とにかく著者としては、十五年後の重版がそれだけの意義をもつやうに努めたつもりではあるが、重版が許可されると書肆の方では出版を急ぐし、匆々の間ぜひとも補訂せねばならぬ點の見落しもなほ多からう。それにしても今日の出版情勢に於て、この程度までも補訂が出來た事は、むしろ滿足とせねばならないであらう。なほ重版に際し著者に個人的な感懷の言葉が許されるならば、述べたい事はいろ〳〵に多い。まづ第一にこのさゝやかな著が初めて世に公けにされる事になつた折、著者に寄せられた藤井・吉澤・新村三先生の御溫情に對して、又あらためて感銘の意を表せずに居れない。しか

も序文に溢美の言を賜はつて著者を激勵された藤井先生は、すでに白玉樓中の人となつて、この新版を捧げるに由がない。せめてはかうして分け入つた俳諧史研究の道に、貧しい力ながらも若干の貢献をし、亡き先生の盛意に報いたいと思ふだけである。又この書を成す間に、多くの人々から與へられた好意便益も忘れられない。それらの人々の中にはすでに物故したものも少からず、又閲覧した書籍で戦災に亡びたものも多いらしい。人も物も亡びるのは自然であるが、發見し創造する人間の精神が、いかに小さな事實からでも極めて大きな産出力をもつ事を思へば、それらの人と物とが、この小著の中になほ生きて居る事を信ずるのである。

昭和二十二年七月

著者識

序

世に俳書と稱するものは全體どれ位あるであらう。元よりその多くは片々たる小冊子なるも、その數に至つては蓋し意想外であらう。しかも大部分は拙劣な句集や取るにも足らぬ俳論等の愚書凡書である。賴山陽は世南といふ俳人の著した撰集に不作可集と命名した。それは世南の謙辭をそのまゝ採つて名づけたのではあるが、實際この作らざるも可なるものが、殆ど俳書の七八分だと言つてもよからう。されば俳諧の歴史的研究に從ふ者は一往あらゆる俳書に目を通さなければならない。殊に俳書の外題はその内容を提示したものが少なくて、わる氣取の風流めかした名をつけてあるから、書名に因つて取捨選擇をなすことすら許されない。何が何にあるやら見當もつかず、盲さがしに隅から隅まで見た上で判定せねばならぬから、その煩勞は一通り

序

既刊連歌俳諧史の視るべきものに、遠く佐々醒雪博士の「連俳小史」あり、近く福井久藏氏の「連歌の史的研究」あり、而して今また頴原文學士の「俳諧史の研究」を加へんとす。幸なるかな。

學士夙に俳諧の史的研究に志し、先づ東京高等師範學校に學びて佐々博士に提撕せられ、後京都帝國大學國語國文學科に入りて藤井紫影博士に誘掖せられつゝ、博覽博搜、苟も俳諧に關するものにして究盡せざるはなく、齡不惑に及ばずして識業既に世の認むる所となる。この書その識とその業とを擧げて撰述大成せるもの、斯道に益あらむこと蓋し尠少ならざるべきを信ずるなり。

でなく、しかもこの煩勞を償ふに足る程の獲物は容易に惠まれないのである。さりとは俳諧史の研究もまた厄介ならずや。

頴原君は多年矻々としてこの厄介なる勞作に沒頭せられ、倦まず撓まず多數の愚書凡書を涉獵し、沙を披いて金を採り、砆を棄てゝ玉を擇び、洗煉雕琢苦心經營の末に成つたのが即ち本書である。收むる所の論考、いづれも新說創見に富み、とりぐ〳〵有益であるが、就中犬筑波考、俳諧論戰史、宗因年譜、西鶴の俳歷、芭蕉雜考、雜俳前史の如きはその尤なるもので、俳諧史に貢獻する所多大なるは更めて言ふまでもなからう。

昭和八年三月

藤井紫影

自敍

過去十年間に亙つて、雜誌新聞等に發表した論考の中から、俳諧に關するもの若干篇を擇び、これに多少の補訂を加へて一册子とした。もとより一貫した俳諧史と稱すべきものではないが、論題はほゞ各時代の重要な事項に觸れ、かつその排列には自ら順序あり脈絡あるやうに意を用ひた。但し今出版の都合上、先づ蕉風時代までのものをこゝに收め、他は續篇に讓るの止むなきに至つた。

本書の發刊に際し、藤井先生・吉澤先生からは序文として溢美の言葉を賜はり、また新村先生には題簽の揮毫を忝うした。恩師三先生のこの御溫情は、著者の深く感銘して忘れ得ぬ所である。なほ本書の成るまでに、諸家から與へられた好意に對して、厚く感謝の意を表する。

昭和八年三月下浣

潁原退藏識

序

梅とさく
花か
この書
この年の學園の春を
まづかをるべく

昭和八年三月

吉澤義則

俳諧史の研究　目次

俳諧の季についての史的考察……一

俳諧論戰史……三三

一　序　說……三三

二　「毛吹草」と「郡山」・「氷室守」……三九

三　「正章千句」と「茶杓竹」と「蠅打」……五一

四　「花千句」と「肩入奉公」……五六

五　貞門對談林の論戰……五九

六　「京羽二重」と「永代記」……七九

七　歌仙點取……九一

目次

八 「猿物語」……一一三
九 「花見車」と「鳴絃之書」……一一七
一〇 蕉門の論戰……一二〇
一一 享保以後の論戰……一二六
維舟と立圃との確執……一三三
西山宗因の連歌……一四六
西山宗因……一七一
西山宗因年譜……一三九
西鶴の俳歷……一五七
西鶴年譜……一八八

芭蕉雜考……三三七
宗因一座の芭蕉連句……三三七
「田舍の句合」の延寶版……三四八
鼾の圖……三五三
芭蕉翁行脚掟……三五四
去來私考……三六五
去來の芭蕉入門……三六五
菊の杖……三七四
可南女……三八〇
農夫爲有……三八九
現存最古の長連歌……四〇七

序文……文學博士　藤井紫影
同……文學博士　吉澤義則
題簽……文學博士　新村出

俳諧の季についての史的考察

俳諧に於て季といふものが、此の藝術を構成する上の最も重要な一要素となつてゐる事は、こゝに更めて言ふまでもない。特に發句には必ず季の詞を持たなければならぬといふのが古來からの約束で、季をもたない所謂雜の發句といふものは、極めて特殊の場合――例へば名所の句とか祝賀の句とかいふやうな場合の外は、殆んどよまれぬ事になつてゐる。俳諧にかゝる特殊の形式がどうして生ずるやうになつたか。それは種々の立場からこれを考察する事が出來るであらう。或は俳句が世界最小の詩形であるといふ點から、或は我が國の風土的關係から、或は和歌や物語と共通な物の哀れの論から、さま〳〵の解釋と說明とがすでに試みられてゐる。さうしてそれは恐らく、さういつた種々の事がらが湊合されて、こゝに季といふ一の傳統的形式を生むに至つたのではあらう。しかしそれが既に一の傳統的形式である以上、これが發達變遷の過程を知るべく、何よりもまづ史的考察が必要でなければならぬ。その考察の結果は、ま

た純文藝の理論と相まつて、更にこの傳統的形式の本質的價値の問題にまで進まなければならない。現に俳壇に於ては、季題無用論も夙くから叫ばれてゐる。しかもさうした論者の中に、却て俳諧藝術に對する眞摯ささへ認められる。だが私はこゝでその問題にまで觸れようといふのではない。たゞ俳諧に季の詞若しくは季題といふ一の形式を生ずるやうになつた過程を、我が國の太古の文藝にまで溯つて、そこから次第にながめて行つて見ようと思ふのである。

文學の最初の發生はもとより詩であらう。そしてそれが抒情詩であるか、敍事詩であるか、それははつきり分らない。しかし少くとも我が國の文學史上、最も古いものとして傳へられてゐるものは抒情詩であつた。即ち記、紀の中に傳へられてゐるうたである。勿論それはまだ五言七言などの形が十分定つて居ない頃の事であり、且つ今日傳はつてゐる形が、そのまゝ素盞嗚尊や神武天皇時代にうたはれて居たとは思はれない。今日の形は、恐らく語部などの傳誦時代にきまつたものであらう。しかし歌はれてゐる內容はほゞ太古のものと同一にちがひない。で是等の歌謠の內容には、季題的のものゝ萌芽でも見出し得るであらうかどうか。原始人の自然に對する感情については、專門の學者が多くの例證をあげて說明してくれてゐる。彼等はむしろ自然を恐れ且つ尊んだ。所謂風雅の對象として、自然の風物を眺める餘裕を持つことは出來なかつた。記紀の歌謠時代は、勿論さうした原始時代より遙かに進んでは居た。しかしまだ四季の風物を歌にするといふことはなかつたのである。尤もそれは自然を全くよんでゐないといふのではない。例へば伊勢の海の大石に這ひまつはるしたゞみといふ小さな貝や、久米の子等の垣本に生えたかみらとかはじかみとかいふ小さな植物などまで歌つてはゐる。しかし是等はすべて比喩として――即ちしたゞみは賊軍を包圍攻擊する皇軍の狀に、又かみらやはじかみは皇軍をなやました賊軍に比しで言つたのであつて、自然物そのものを詠んだのではなかつた。隨つて記紀の歌謠中には、まだ純然たる敍景といふものを見出されないのである。應神天皇が近江の菟道野に幸され、葛野といふ所を望まれて、

ちばの葛野を見れば、もゝちたる家庭も見ゆ、國のほも見ゆ

と歌はれた。これなどは全く葛野を見渡した景色そのものをよまれた御歌のやうに思はれるが實はさうではない。もゝちたる家庭、即ち富裕な民家と、國のほ、即ち豐饒な土地とを喜ばれた御歌である。景色の詠嘆ではなくて、民が富み土地が肥えてゐることを喜ぶ、いはゞ功利的

感情のあらはれである。又履仲天皇が御弟の謀叛により、難をさけて埴生坂といふ所から難波の皇居を望まれた時、

埴生坂我が立ち見れば、かぎろひのもゆる家むら、つまがいへのあたり

とよまれた。これも一見敍景の御歌のやうであるが、實はその燃ゆる火を御覽になつて、后の御身上を思ふ御心が主となつてゐる。以上の例によつても判る通り、記紀の歌謠時代における我が國民は、まだ自然の風物を客觀的にうたふといふ事はなかつたのである。隨つてそこに季題的の要素も亦、全く見出すことは出來ない。

次に我が國民のもつ文學は、いふまでもなく萬葉集である。萬葉集中の歌には、仁德天皇の后の御歌のやうな、記紀の歌と同時代のものも多少はあるが、まづ大體奈良朝時代の文學を代表するものである。この時代になると、我が國民の自然に對する眼は、もう大きくそして深く開いて行つてゐる。勿論すぐれた敍景の詩も數多く持つやうになつた。卽ち當時の歌人は文學表現の對象として、自然の美しさを十分に觀賞し得る迄になつてゐたのである。中にも山邊赤人・高市黑人などは、特に自然詩人としてのすぐれた天分と才能とを持つてゐた。例へば誰でも知つてゐる

田子の浦ゆ打出でゝ見れば、ま白にぞ富士の高ねに、雪はふりける

だとか

和歌の浦に汐滿ち來れば、潟をなみ芦邊をさして、たづ鳴き渡る

ぬば玉の夜のふけ行けば、ひさぎ生ふる淸き河原に、千鳥しばなく

などゝいふ歌になると、そこにはもはや對人間もしくは對社會的の感情は、全く見られないので、只自然のみが純客觀的にうたはれてゐる。かうして自然がそのまゝに詠歌の對象になつて來ると、自ら歌人の心は四季の特殊な風物に力强く引きつけられるであらう。彼等は萌え初めた柔かな若葉の色が、靑葉から紅葉に、紅葉から一片の朽葉と變つてゆくさまにも、注意深い眼を向けずにはをれなかつた。わけても寒い陰鬱な冬を過した後に待ち得た暖い春の風物と、さうしてさはやかな色と光とに滿たされた秋の自然とは、彼等の心に豐かな詩興を齎した。例へば赤人が三諸の神南備山に登つてよんだ長歌の一節にしても、

明日香の古き都は山高く河遠白し、春の日は山し見がほし、秋の夜は河し

さやけし、朝雲にたづはみだれ、夕霧にかはづはさわぐ

と、朝夕の風物に對して先づ春秋の眺めをのべてゐる。又かの名高い額田王は春山萬花之艶と秋山千葉之彩とを比べて、春の花よりも秋の紅葉を愛すると歌つた。かうして春秋の優劣を比較するやうな歌さへも、既にあらはれたのである。だがかやうに四季の風物を對照して考へる事は、我が國の風土氣候上自然に發生すべき思想で、已に古事記にも春山霞男と秋山下氷男とが妻を爭つた傳說が見えてゐる。これはいふ迄もなく春と秋とを人格化して對照させたのではあるが、しかもこの傳說時代にはやはり自然が人間と結びつけられねば語られなかつた。春秋の自然そのものが、人々に愛され歌はれるやうになつたのは、萬葉時代から以後のことであつた。さうして春秋の優劣比較論が爾來しば〳〵我が國文藝上の好題目として繰返されてゐることは、こゝに說くまでもない事である。

かうして萬葉の歌人には、戀や離別やと共に四季の風物が、彼等の歌の好題目となつて來た。梅や鶯や霞や陽炎や、藤の花、桃の花などが盛んによまれた。夏になると郭公、橘、夏草、撫子、百合――この百合はどういふわけか古今集以後には歌はれないやうになつたものだが――それから秋は天の河、秋風、紅葉、萩の花、鹿の聲、蜩やこほろぎの鳴く音、少女が汲む井のもとに咲いたかたこの花までもよまれた。冬は卷向の小松に降る白雪、ゆ笹の上に置く霜などが歌はれてゐる。かうした四季の風物を題材とした歌を、今萬葉集中から一々選び出して見たら、かなり多くの數に上るであらう。だから萬葉の編纂者はすでに雜歌、相聞、挽歌等の部目と共に、春夏秋冬、即ち四季の部目を立てゝ分類してゐる位であつた。しかもこゝに注意すべき事は、その四季の分類は單に春歌、秋歌といふ風に分けられてゐるのではなくて、春雜歌とか夏相聞とかいふ如く、雜歌や相聞と結びついて一部目となつてゐるのである。これは一面かやうに自然を詠ずる歌が、だん〳〵多くはなつたものゝ、萬葉時代全部の傾向から見ると、なほ自然をそのまゝ歌の對象とする事は比較的少かつたといふ事實を、有力に物語つてゐるものであらう。即ち萬葉時代の歌人には、やはり自然から人間をすつかり切離して考へることは出來なかつた。花の色にも鳥の聲にも、先づ彼等は人を偲び妻を思ふ情を寄せずには居れなかつた。それは和歌が抒情詩たる性質上勿論當然なことで、後世になつてからでも、歌集の大部分――特に優れた歌を多く持つて居る部分は、四季の部ではなくて、戀や雜の部である。

だがとにかく萬葉に四季の部目を設けながら、なほこれを獨立した部目と認めなかつた事は、少くとも當時所謂季の觀念が、文藝上特に重視されるまでになつてゐなかつたからだと見なければなるまい。卽ち俳諧の發句のやうな、季を中心とした文藝觀などは、勿論存在すべき筈がない。のみならず當時の歌は、まだ四季の風物に對して特殊の聯想的感情をもつといふ事はなかつた。例へば鹿の聲や虫の音をきいても、後世の歌人俳人のやうに、必ずしも物悲しい若しくは佗びた感じなどを起さなかつた。

此のごろの秋の朝明に、霧がくり妻呼ぶ鹿の、聲のさやけさ

と、曉の鹿の聲の朗さを愛してゐる。或は又

陰草の生ひたる宿の夕影に、鳴くこほろぎはきけどあかぬかも

と、最も淋しさを誘ふやうな情景の間にあつてすら、只虫の音を飽かず聞きたいとだけ歌つてゐる。卽ち是等の歌人はある特殊の風物から、直ちに特殊の境地や感情を聯想したり誘發されることはなかつた。彼等の感情はあらゆる風物に對してまだ自由であつた。だから萬葉の歌について考察した結果は、かういへるであらう。そこにはもはや四季の風物を題材としてゐる點に、季の觀念は十分に認められねばならぬ。しかし傳統的形式としての季、卽ちある特殊の四季の風物現象が、文藝の重要な一要素として特定的な地位を持つといふやうな傾向は、まだ全くこれを認めることは出來ないと。

萬葉以後古今集が出るまでの間、約百年間は漢詩漢文の全盛時代であつた。和歌は所謂色ごのみの家に埋木の人知れぬ事となつて、朝廷の儀式・賀宴等晴れの場合には、すべて詩文の唱和應酬のみが行はれた。すでに奈良朝時代に懷風藻の編があり、平安朝になると凌雲集・文華秀麗集・經國集など敕撰の詩文集を初め、個人々々の家集も多くあらはれた。これらの集に載せられた作品について季題的の特色をしらべて見ると、懷風藻や凌雲集には、まだ自然の情景のみをよんだ作は殆んど見當らない。春日侍宴・秋夜山池・七夕等の題詠はかなりあるが「玉殿風光暮、金墀春色深」とか、「菊風披夕霧、桂月照蘭洲」などと言つても、それはやがて聖代に逢つた喜びをのべ、後期の悠かなのを歎ずる情などがいつも主となつて居るのである。又作品を分類してゐる點から見ても、例へば文華秀麗集には遊覽・宴集・贈答・詠史以下約十部目に分けてゐるが、四季の部目はたてゝない。經國集は缺けた部分があつて全體の面目を知るこ

とが出來ないが、その殘存してゐる所だけから見ると、樂府とか賦とかといふ體裁によつて分類してゐるらしい。大分遲れて出た本朝麗藻・本朝無題詩・和漢朗詠集等に至つて、始めて四季の分類もあり、純客觀的の自然詩も多く見られるのであるが、これ等はすでに和歌が再び勢力を得た後の編纂であるから、漢詩文としての特殊な季題的傾向の發達と見る事は出來ない。隨つて平安朝初期における我が國の漢詩文が、季題觀念を深くして行つた點は、多く認められないと思ふ。しかし何にもせよ當時の人々の愛讀したものは文選とか、白氏文集とかいふものであつたから、田園詩人たる陶淵明の作や、白居易の遊覽節序の吟などから、自然觀賞の態度の上に受けた影響は決して少くなかつた。殊に自然の風物に對する特殊の感じ方――例へば秋風に對して故鄕の山川を憶ひ、擣衣の響に閨怨の情を感ずる如き、さうした心の動きは支那人の詩文から學んで來た所が、極めて多かつたであらう。隨つて我が國人の詩文集に於ても、かかる特殊の季感が漸く固定して行く傾向は明らかに認められるのである。

遣唐使の廢止と共に、國民の自覺は再び和歌の隆盛をもたらしめた。卽ち延喜の帝の朝に、敕撰集の初めとして、古今和歌集があらはれる事になつた。而してこの集には、まづ第一に春・夏・秋・冬の部立が見られるのである。爾來相ついで出た敕撰集は勿論、その他家々の私撰になる集に至るまで、四季の部立を設けないものは殆んどないやうになつた。だからこの四季によつて歌を分類するといふ事は、古今集の編者によつて全く確立されたわけで、これは我が文學史上、季の觀念に於ける一つの劃期的事業といふべきであつた。だが當時の歌人が自然に對する觀賞の態度はどうであつたか。これはかの萬葉歌人が極めてナイーヴな感情で歌つてゐるのに比して――尤も萬葉の歌も時代が下つたものには、大分理智的要素が多く見られはするが――恐ろしく理智的になつてゐる。さうしてそれを頗る技巧的な方法で表現しようとしてゐる。古今集中劈頭第一の歌が、かの

年の内に春は來にけり一年を去年とや言はむ今年とやいはむ

といふ元方の作である。隨分理屈責めに考へたもので、和辻哲郎氏がこれを曆の季だなどと評してゐるのも、誠に尤もな事と思はれる。そこには早く春が立つた事に對する喜びとか驚きとかの情は、少しもあらはれて居ない。まるで數學的に物を見てゐるやうな考へ方である。また例へば、

夏と秋とゆきかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ

といふ歌などにしても、全然數理的な興味から出發したゆき方である。季節の交替に對する藝術的感興などいふものはどこにも認められない。これは固より藝術の正道といふ事は出來ないであらう。だが單に季題的觀念といふ點だけについて考察して見ると、かうした暦數上の抽象的な季節のことまでも歌ふといふ事は、確かに季に對する歌人の注意が鋭くなつて來てゐるといふ事はねばなるまい。隨つてたとひその考へ方が理智的になり、表現の方法が技巧的になつてゐるにせよ、當時の歌人が花月を賞し、寒暄を詠ずる事が、萬葉時代よりもずつと多くなつてゐる事もまた爭はれない事實である。しかもその詠歌の對象となる自然の風物が、四季によつてほゞ一定して來たことも頗る注意すべき事である。例へば古今集に春の歌としてよまれたものの題材を數へ上げて見ると、立春・霞・鶯・梅・花・櫻・若菜・柳・歸雁・藤・山吹・百千鳥・呼子鳥・春の日・春の雪・春の山・春風等二十種にも足らぬ位である。しかもその中鶯と梅と花と櫻とが春の歌の過半數を占めてゐて、他の題材は僅かに一首か二首よまれてゐるに過ぎないのである。即ち春の景物季題として、最も愛好されるものが殆んどきまつてゐるやうな有樣

である。更に夏の歌について見ると、全體卅四首中廿八首までは郭公をよんだもので、その外には遲櫻・花橘・蓮・夏の月・常夏が各一首づゝと、それから前にあげた「夏と秋とゆきかふ空の」といふ例の暦の季的の歌が一首あるだけである。郭公は成程萬葉時代から夏の景物として最も喜ばれたものではあるが、まだこれほど極端ではなかつた。外に卯の花でも姫百合でもよまれてゐる。その他夏草・紅花・ひぐらし・眞葛・杜若等が夏の歌にかなりよまれてゐる。

かやうに古今集中に歌はれた四季の風物は、――例へば菊花などの如く、萬葉時代の歌に全く見えないもので、古今集になつてから盛んに歌はれたやうなものもあるが、それは菊が舶來のもので、まだ奈良朝の頃までは汎く觀賞せられなかつたといふやうな特殊の事情があつたからである。――大體に於て萬葉時代よりも、却てその取材的範圍が縮小されてゐる。これは見季題觀念の退歩の如く思はれるが、實はある自然の風物現象を、特に春季の景物とし、或は秋季に翫賞すべきものだとするやうな、即ち換言すればある自然の景物を特定の季題として取扱ふ傾向が、從來より強くなつて來たわけである。隨つてこれ等の景物に對する季題的な聯想感情も次第に一定して來た傾きが見られる。かうなると例へば梅とか鶯とかいふものが、もは

やそれだけ單獨に思ひ浮べられないで、和煦たる春色と必然的に結び付けられて考へられる。即ち連俳に所謂季題の本質は、こゝに十分認められるのである。しかしそれは勿論後世の季題の如く、自然人事の百般に亙つて特定的に考へるといふ程に發達したものではなかつた。例へば花といへば直ちに春の櫻を思はせ、月がすぐ秋のものだといふ風にまできまつてはゐなかつたのである。本居宣長も「玉かつま」の中に言つてゐる通り、古今集では月の歌は皆雜の部に入れられてあつて、秋の部には只五首入つてゐるだけである。しかもその五首は皆秋の月とことわつてあるか、又は雁などゝいふ秋の景物を配したものだけである。だから古今集の時代に至つて、文學上に於ける季題の觀念は、頗る大きな展開を見たのであるが、なほそれは自然の景物のしかも狹い部分に限られて居て、人事方面に於ける季題趣味などはまだ全く認められない。

古今集についで出た拾遺集・後拾遺集の二つも、その季題的方面については、古今集とあまり異なつた點は認められない。只季の景物としては流石に多少その取材範圍がひろめられて、例へば夏の歌にしても、郭公以外卯の花・撫子・五月雨・螢・蟬などがよまれてゐる。勿論古今集時代にもこれらが全くよまれなかつたわけでなく、――現に古今集中でも例へば戀の部には夏野・夏草・夏蟲・螢・蟬・撫子などよまれて居り、夏引の糸・蚊遣火など人事的のものさへ見えてゐる。しかしこれらは全く比喩的に取扱はれてゐて、主題としてよまれたものではない。隨つて所謂季題的のものとしては見られないのである。――偶々古今集に採られた夏の歌に散見しないだけの事であるかもしれない。だが少くとも古今集の如く、郭公だけで夏の景物を盡すといふ程極端ではなくなつてゐる。しかし景物を季題的に特定する傾向は、さまで發達を見なかつた。月などはやつぱりまだ雜の歌であつた。後拾遺集に只一首

今宵こそ世にある人はゆかしけれ何處もかくや月を見るらむ

といふ赤染衞門の歌が、秋季を定める他の詞なしに秋部に入つて居る。これは全く例外であるが、實はもと詞書か何かによつて秋の月をよんだ事實が明かであつたのであらう。他に秋の部に入つてゐる月の歌はすべて秋の夜の月と定かにことわつてゐるのである。ところが次の金葉集になると、月といふだけで秋の部に入れられた歌が、多く見えるやうになつてゐる。例へば

草枕この旅寢にぞ思ひしる月より外に友なかりけり

もろ共にいつとはなしに有明の月のみおくる山路をぞ行く

などの如き、從來ならば當然羇旅とか雜の部などに入りさうな歌が、大分數多く秋の歌として採られてゐるのである。今かやうに歌の中にも詞書の中にも、秋季を明示する他の詞がなく、ただ月といふ景物をよんでゐるだけで、秋の部に入れられてゐる歌を、金葉集中から數へ上ると、廿九首の多きに達してゐる。これは金葉集の撰者が、當時歌壇の新人であつた俊頼であつたから、三代集の先縱を追はず、直ちに當時の季題感に從つて分類したものであらう。次の詞花集は再び從來の例に復したのか、秋の月たることを明示しなければ、月だけでは皆雜の部に入れてゐるが、千載集以後になると、もう月だけで立派に秋の景物と認められるやうになつてゐる。千載集には月を主題としたものが廿八首あるが、その中の丁度半數十四首は、詞書にも歌の中にも全く秋といふことをことわつてゐないものである。これは單に最も顯著な月といふ景物に例をとつたゞけであるが、かういふ傾向は他の自然の風物にも通じてあらはれたであらう。即ち四季を通じて眺められるやうな景物でも、その景物が最も特色を發揮し、或は最も愛好される時期によつて、次第に特殊の季節的聯想が結び付けられる傾向を生じて來た。而してその傾向は前に述べた通り、金葉集時代から著しく認められるのである。かうして自然の風物に對する季題的な感じ方は、平安朝末期に至つて次第に深くなつて來た、のみならず例へば夏の歌の題材について見ると、菖蒲引く・鵜舟・照射・御祓・更衣・氷室・納涼などの如き、人事的方面にまでその範圍がひろめられて行つてゐる。即ち金葉集以後和歌に於ける季題趣味は、更に長足の進歩を見たわけであつた。

以上は主として敕撰集の和歌を通して考察したのであるが、更に當時の物語や日記などについて見ても、かうした傾向は十分認められるであらう。和歌を主とした伊勢物語の如きは姑く措き、竹取・落窪など源氏以前の小説は、事件の展開變化して行く興味が主であつて、自然の背景などは多く顧慮されてない。宇津保物語のやうな長編になると、流石に卷の名からしてすでに、梅の花笠・菊の宴・初秋など四季の景物に因んだものがある。そして梅の花笠の卷には春日詣の人々が、梅や鶯や藤の花や柳の萌えそめたのなど、四邊の風物を媒として盛んに歌を贈答してゐる。又初秋の卷には相撲の節會といふ季節的な行事を中心として、話が進められてゐる。しかしこれらは多く歌に關した部分であるとか、公事節會などいふ時期の定つたものゝ

背景描寫に限られてゐて、ある事件の情趣を深く味はゝせる爲めに、特に四季の風物を背景に取入れるといふ事はあまりない。これは勿論小說そのものが敍景詩ではないのであるから、所謂季題的趣味をその中に求めようとするのは無理であらう。しかし少くとも今言つたやうな、ある物語の情趣と調和すべき自然の背景を描くことは、小說作者が四季の風物に敏感であれば、當然試みるべき手段であらう。源氏物語になると、果してさうした人事と自然との錯綜した情景は、最も巧みに描き出されるやうになつて居る。先づ桐壺の卷のかの靫負の命婦が、更衣の母君を訪ねる一節の如きは、野分に荒れた庭の景色、葎にさし込む夕月の光、催し顏なる叢の虫の聲々、それ等の風物が更衣の死を悲む人々の情と、誠に離すことの出來ない調和を保つてゐる。五條わたりの家のさまも、夕顏の白い花の色によつて、すつと寫實的に生動する。桂の木の追風に祭の頃を思ひ出して、源氏が花散里を訪ねるといふ趣向も面白い。かうして物語の中に巧みに織込まれた四季の風物は、そこに自ら所謂季題的の趣味を十分に漂はせてゐる。更に巳の日の祓とか葵祭とか五節とかいふ季節的の行事は屢々描かれてゐて、しかもこれに伴ふ人事的な季感は、小說たる性質上和歌よりも一層濃厚にあらはれて居る。

日記類について見ても、ほゞ同樣の傾向が認められる。例へば土佐日記と和泉式部日記や紫式部日記と比較して見ても、前者は旅中の出來事のみを多く記し、後者は有明の月に恨み、しぐれの雨に泣く情をのべ、土御門の秋の景色を先づ描いてゐる。固よりこれは日記を書く人の態度にもよることであらうし、一は老年の官吏、一は戀に悶える若い女の筆だからといふ事もあらう。しかし大體に於て平安朝中期以後は、單に日常の生活を錄するにも、始終自然の風物から受ける感觸を忘れなかつた傾きが見える。結局平安朝の文學を通じて考察した時、所謂季題的の趣味とか季感とかいふべきものが、中期以後末期に至るに從つて、次第に深くなつて行つたといふ事を、確實に認める事が出來るのである。よつて次には眼を鎌倉時代に移して見よう。

鎌倉時代に入つて和歌の方で先づ第一にあぐべきは、いふまでもなく新古今集である。〻に至つて著しく認められる特色は、敍景の歌に純客觀的なうたひ方をしたものが多くなつた事である。これを古今集などに比較して見ると、そこにはもう感情のあらはな詠歎が殆んど見られない。古今集の歌人は

大かたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ

わが爲にくる秋にしもあらなくに虫の音きけばまづぞ悲しき

物ごとに秋ぞ悲しきもみぢつゝうつろひゆくを限りと思へば

かう言つて悲しい感じを悲しいとそのまゝ歌はずには居れなかつた。しかし新古今集の歌人は

み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕暮の空

きりぎゝす夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠ざかり行く

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

とたゞ空の色、虫の聲、さては浦の苫屋の夕景色のみを歌つて、しかもその中に深い寂寥味を感じさせる。それは作者の精神生活なり創作態度なりが、古今集時代よりずつと深められ洗煉されて來てゐることを物語つてゐるには相違ない。しかし四季の景物に對する聯想感情の固定といふ事が、かうした結果を齎した一つの原因であるといふ風に考へられない事もない。即ち古今集時代までは、たゞ虫が鳴く、秋風が吹くといふだけでは、その淋しい情なり、悲しい心もちなりが、すぐ讀者には勿論作者自身にも強くひゞかなかつた。勢ひ悲しいとか淋しいとか、それをあらはに表現せねばならぬ必要があつた。しかしそれ以來、いつとなく養はれて來た所謂季題感が、もはや虫の音、秋風のそよぎそのものからすぐ寂寥の感をうけ入れ得るほど密接に、それ等の題材と結び付いて來たのである。かう解釋することも出來る。そしてそれはあながち牽強な見方ではないので、寧ろ最も自然な考察であらう。かうして和歌に於ける所謂季題感は一層深くなつて來た。

和歌に於ける季節の風物が、詩興を齎す上にかく重要な地位を占めて來ると共に、更に俳諧そのものゝ直接な淵源といふべき連歌がこの頃から盛んになつて來た。一體連歌はその起源に古く溯ると、かの日本武尊と火燒翁との唱和などまで持つて行くのが普通であるが、かやうに古い時代の事は姑く措き、平安朝時代の有樣を見ると、この頃にはもうかなり盛んに行はれてゐたのである。特に金葉集の如きは、連歌の部目まで別に設けてある程であつた。しかしこの頃の連歌はすべて短連歌で、即ち一首の和歌を二人でよむといふのに過ぎなかつた。しかもそれは多く一時の餘興に弄ばれたので、例へばかの神官と和泉式部の唱和だといふ

千早振るかみをば足にまくものか、これをぞしもの社とはいふ

といつたやうな頓智問答式のものが多かつたのである。ところが後鳥羽天皇の頃から、次第に或は五十句、或は百句と長くつゞける所謂長連歌が發達して來たのである。尤も今日當時の長連歌の作品は全く殘つてゐないので、果してどんな風のものであつたかは分らないが、とに角當時定家なども老後には連歌を好み、百韵連歌が屢々興行された事は、明月記等をはじめ確證があつて疑ふ餘地はない。すでに五十韵百韻といふ新形式が生ずれば、隨つてそこには又何等かの新法則も存在して居たであらう。菟玖波集の詞書の中には「後鳥羽院御時源氏國名の百韵連歌奉りし中に」といふのなども見えるから、所謂賦物（かしもの）の如きも當時からかなり複雜なものが試みられてゐたわけである。だから一卷の卷頭たる發句の如きについても、必ず何等か多少定つた形式があつたらうと思はれる。然しかの後世連歌式目の根柢となつた應安新式以前の古式は全く傳つてゐないので、隨つて長連歌發生の當初から、後世の如く季の詞が發句に於ける重要な一要素となつてゐたかどうか分らない。恐らくはまだ鎌倉時代まではさうしたはつきりした約束はなかつたであらう。筑波問答にも季について特別の說はなく、八雲御抄にも發句は只言切るか春霞秋の風など體にすべしとだけ言はれてゐるにすぎない。應安の新式を見ても發句と季との特殊關係についてのきまりはない。しかし吾妻問答の中には、すでに次のやうな話が見えるのである。阿佛尼が東へ下つた時、長月晦日に或人が連歌をしようと思つて、尼に發句を乞うたら

今日は早秋の限りになりにけり

として遣はした。翌日又連歌の一座があつて、尼に發句を所望すると

今日は又冬の初になりにけり

として與へた。そして「歌は題を發句とし連歌は發句を題とせり。さればその時節を違へずあるべき事也」と言つたといふ。これによると、阿佛尼の當時から連歌の發句は、その季節をたがへないのを宜いとした事が明かである。尤もそれは阿佛尼の言葉通り、只時節を違へねばよいといふ位の輕い程度で、まだ季題を最も重要な一要素とまでは認めて居なかつたらうが、とにかく發句と季との關係は、簡單ながら鎌倉時代から認められてはゐたのである。實際筑波問答や菟玖波集にあげられた當時の發句を見ても、無季の句は一句もない。

連歌の發句と季とが、當初からかうした關係を持つやうになつたのは何故であらうか。それ

は十分深く考察すべき問題であるにちがひない。でその理由として、先づ私は連歌のはじめが卽興的の性質のものであつた事をあげたいと思ふ。和歌の會の餘興として、或は一時の言捨てとしてのみ行はれた連歌は、それが五十韵百韻と發達して、すでに和歌の附傭物たる境を離れ、若しくは一時の座興でなくなつてしまつても、なほ發句のみには當座の興を專らとする最初の名殘が殘つてゐた。しかも已に特殊の場合の卽興でなくなつてゐるのだから、そこには何時でも又何人にも興趣を感ぜさせるやうな題材を別に選ばねばならない。それには何よりもまづ折節にあつた句をよむ、卽ち阿佛尼が言つたやうに心得る事が、最上の策でなければならなかつた。

折節にあつた風流――それこそは實に我が中古の人々の最も理想とした詩境であつた。平安朝の物語や日記を見ると、いかに當時の人々が、所謂折過さずして花晨月夕の諷詠を恣まゝにしたか、山郭公の一聲にも、垣根に萌え出た春草にも、徒らに聞過ぎ見過されない情を託したか、それは明かに窺ひ知ることが出來るであらう。勿論かうした折ふさはしい吟咏は、自然の風物に對してのみなされたのではない。しかし彼等が折過さぬみやびとして喜んだのは、多くはかういふ場合であつたのを忘れてはならぬ。苟くも當時の所謂心ある程の人であれば、夜深く鳴き渡る時鳥の聲を聞いて、一首の興を動かさずには居れなかつたのである。折から面白き歌よまざらんは誠に口惜しき極みであつた。さうしてそれが實際秀歌であれば、折過さない興といふがために一層名高くなつて、忽ち騷壇の佳話として喧傳されたのであつた。かく自然の風物に對する特殊の感興が喜ばれたのは、とりもなほさずこれまで述べ來た通り、我が文學に長い間養はれて來た所謂季題趣味の發露に外ならない。和歌や物語の中に、次第に四季の風物に對する鑑賞の深さが認められて來た事は、やがて卽興としての吟咏に季題的趣味のものが最も多く喜ばれる事になつた所以でなければならぬ。隨つてもと〳〵卽興的性質のものであつた連歌が、その卽興がはじめ主として人事的の特殊の場合であつたのから、轉じて普遍的の興趣になつた時、まづ折過さぬ和歌として喜ばれた通りの季題的感興を捉へようとしたのは、當然のことであらう。しかも鎌倉時代になつて、和歌には純客觀的なものが多く見られ、四季の風物に對する特殊聯想は次第に固定して來た。この傾向は、平安朝の末から勃興して來た歌學書を通じても、また認められるのである。例へば上覺法師の「和歌色葉集」に「花は色も香もや

さしく、時鳥は驚き珍らしく、紅葉はこがれ色こく、鹿はすごく哀に」と言つて居る如き、すでに著しくマンネリズムの傾向を帶びた說さへあるのである。連歌の發句に、季題趣味を捉へることの有效さを認める念は、益々助長されたであらう。

連歌の發句と、季題との特殊關係については、なほ他の方面からも考察をすゝめられぬ事はない。否、さうした他の方面の理由も、確かに一部的には存してゐたにちがひない。しかし先づ當座の興として、折を違へぬといふ主たる原因が認められゝば、私のこゝに說かうとした目的は達せられて居る。要するに奈良朝以來、長く養はれ洗煉されて來た我が國民の自然に對する觀賞態度が、連歌の發句といふ特殊な場合に於て、特殊の效果を齎すべき一つの形式を生んだのである。かくして宗祇の「吾妻問答」には、もはや

發句の事、先は其の季の前後をたがへず、いかにも猥になく、しかも花鳥風月によそへて幽玄の體を心にかけ云々

と、明かに發句と季との離る可からざる關係を說くやうになつた。更にその後に出た「連歌至寶抄」等をはじめ、連歌作法の權威たる諸書に至つては、全く法則的に發句の無季を誡めて居るのである。而してこの季の問題は、獨り發句にのみ止まらなかつた。卷中の他の句に於ても例へば春・秋の句は三句から五句まで續けるとか、夏・冬の句はどうするとかいふやうな約束も夙くから存して居た。かくて季の制約に關する研究は、連歌作法書の重要な部分を占めるやうになつた。かうして室町時代連歌の最盛期に至つては、連歌に於ける季の問題は、すでに嚴然たる法式の下に置かれて、形式的の必須條件となつてしまつたのである。なほ鎌倉時代以降の文學として、定家・西行等以下の和歌や軍記・佛教文學、さては宴曲・謠曲等に至るまで、季の問題について更に廣汎な眼界を展望せねばならぬが、今は終りを急ぐ爲めに、すぐさま俳諧へと眼を轉じよう。

俳諧はいふまでもなく、連歌から生れた。卽ち連歌が當初の餘興的・遊戯的な態度から、漸く眞面目な文學と化して來た時、連歌師たちは、また別に新しい滑稽文學を要求した。そしてその爲めに、彼等は折々所謂俳諧の連歌を催したのである。この種の遊戯的作品は、長連歌の體制が整つて以來、かなり屢々試みられたのであらうが、もとより一時の餘興にすぎなかつたのであるから、當初の連歌が和歌の餘興であつた場合と同じく、多くは二句・三句の言捨てに

過ぎなかつた。たとひ多少長くつゞけたものでも、その興ずる主眼點は、二句の間の滑稽な附け味にあつたのであるから、勿論長篇大作に努力したり、法式の制肘に煩はされたりなどすることは、欲しなかつた。繁瑣な拘束を脱して、自由に遊ばうがための俳諧の連歌であつたのである。だからかの俳諧の集として最も古い「犬筑波集」の如きも、二句の附合を採錄してゐるだけで、一卷として纏つたものはないのである。しかしそのうちにあげてある發句を見ると、すべて四季の部に屬してゐる、例へば

にが〳〵しいつまで嵐ふきのたう
佛壇に本尊かけたか時鳥
七夕はよもさはあらじすはり星
しら山の神の本地や雪佛

の類で、戀部・雜部等には全く發句はないのである。更に守武千句の如き一卷を成したものになると、俳諧とはいひながらも、何等かの法則がなければならぬといふので、大體連歌の式目に從つて興行されて居るのである。だからもとより發句には一も雜の句はない。何といつても連歌から發生したものである以上、それは當然な事であつた。即ち守武自身も千句の終りに、「さて俳諧とてみだりにし、笑はせんとばかりはいかゞ。花實を備へ風流にして、しかも一句正しく、さてをかしくあらんやうに、世々の好士の教へなり」といひ、又「連歌に露かはるべからず」ともいつてゐるのである。

宗鑑・守武の時代に於てすら、すでにさうであつたのであるから、まして俳諧が連歌入門の階梯の如く見なされた貞德時代になつては、全く連歌とその形式を一にするやうになつた。貞德は連歌と俳諧との差異を、單に俳言の有無によつて分つた。俳言とは和歌に用ひられない俗言や漢語をさすのである。かくて貞門一派の人々によつて制定された俳諧作法書では、やはり連歌と同じく、季の問題が最も重要な一部分となつた。否、季に關する制約や研究やは、他の指合去嫌とは反對に、連歌の場合よりさらに繁瑣に且つ精密にさへなつて來た。試みに貞德の「御傘」を繙いて見ると、鮎は勿論夏季のものとして說明されてあるが、若鮎は春、さび鮎・落鮎は秋、鮎の子は春、干鮎・鮎の鮓等は雜であると、一層細かく規定されてある。扇にしても、只扇といへば夏だが、扇を置くといへば秋、無扇は雜などゝいふやうな說明は、至るとこ

ろに見られる。中にはかの牡丹が肖柏の句によつて、もと春季であつたのを夏季とするやうになつたといふ如き、人爲的な故らの制定などもあつたかも知れぬ。かゝる季の詞は、爾來益々新語を加へ、分類も複雑になつた。古くは季の定めがなかつた木葉猿・木葉天狗・蒲團・衾などゝいふ詞が、「續山井」ではすでに冬季と定められたやうな類である。爾來俳諧の作法書といふ程のものが、四季の詞の部に、如何に多くの紙數を費してゐるかを見れば、俳諧に於ける季の重要さが、どんなであつたか十分に窺ひ知る事が出來よう。

ともあれ、かうして發達して來た俳諧の季であつた。貞徳の時代には、單に連歌にならつたといふ程度の無批判的のものであつたかも知れない。しかしさしも放縱を極めた談林時代に至つてすらも、季の問題は決して輕視されなかつた。芭蕉に至つては、すでに俳諧そのものが、文學としての基礎を十分に確立した時であるが、季はやはり俳諧の最も重要な要素であつた。しかしそれは深く考察して見ると、決して形式的な空疎なものではなかつたのである。詮じつめると、それは我が國文學の傳統的精神が特殊の形式をとつたにすぎないものである。いはばその底には何百年以來、和歌連歌もしくはその他の文學を通じて流れて來た自然を觀賞する心の結晶であつた。隨つて俳諧に於ける季は、歴史的に考察して見た時、決して輕々に論議せらるべきものではないと思ふ。只、しかしかういふ事だけは云へよう。季あるが爲の俳句か、俳句あるが爲の季かといへば、勿論俳句あるが爲の季であると。最後にこの貧しい考察が、季を故らに無視しようとする論者の爲にも、季を特に重視しようとする論者のためにも、多少の參考となる事が出來れば幸ひである。

附　言、これは嘗て大阪朝日新聞社の俳句大會で講演した原稿を、ほゞそのまゝに記したものである。講演の際には、近頃佛蘭西で試みられて居るハイカイといふ短詩や、ローウエル氏の試作ホツク詩などについて、それがどこまで我が俳諧の本質を捉へ得てゐるか、特にいづれも季の問題を無視してゐる點に、非常なへだゝりがある事を最後に述べたのであるが、こゝには當面の問題でないので省くことにした。（昭和二年十一月二十日）

〔補記〕

本稿は所掲の題目の如き研究としては、なほ甚だ粗漫蕪雜たるを免れないが、問題の性質上特に訂補せねばならぬ必要は少ない。たゞ二二頁に「應安新式以前の古式は全く傳はつて

ゐないので」と記してあるが、その後山田孝雄博士によつて、「連理秘抄」が世に紹介された。本書は二條良基の作で貞和五年の奥書がある。即ち應安新式制定以前のものたるのみならず、元來今日傳はつてゐる應安新式は後世の增補が多いので、その原形を知るに苦しむのであるが、本書の發見によつて原形の面目をほゞ知る事が出來るに至つた。しかも本書の發句についての心得を說いた條の中には、明かに

發句に時節の景物そむきたるは返す〳〵口をしき事也。ことに覺悟すべし。景物のむねとあるがよきなり。

と說き、正月には餘寒・殘雪・梅・鶯、二月には梅・待花から次第に三月までは花のみを主として落花に及び、三月には郭公・卯花・新樹等と、順次十二月までそれ〴〵發句とすべき景物をあげてある。即ち室町初期にはすでに發句と當季の景物との關係は、十分認められて居た事が明かである。又最近發見された鎌倉末期の長連歌三卷（本書所載「現存最古の長連歌」參照）について見ても、發句にはすべて當季の景物をよんで居る。【追補記】應安新式はその後大和長谷寺に藏するものによつて、その原形が明かにされるに至つた。

俳諧論戰史

一

論爭は決して好ましい事ではないが、主義思想のためには止むを得ず他に對して論難攻擊を加へ、反駁辯明を試みなければならぬ場合も少くない。激しい論爭の結果は、往々感情的な興奮に驅られて、正しい判斷を失ふ虞れがあるが、しかもなほ姑息な妥協にまさる事萬々であらう。甲論乙駁の間に、不知不識學問藝術は向上の一過程を辿つて居ないと言へようか。少くともそれは人心を沈滯から救つてくれる。これを過去に徵して見ても、學問藝術の興隆期には、屢々激しい論戰を見る事があつた。例へば歌學の勃興に際して、「後拾遺集」を論難した「難後拾遺」が出て後、この種の辯難批評の書が相ついであらはれた。而して終には六條家と二條家との確執を見るまでに至つた。江戸時代に入つて、和歌の復古思想が興つて來ると、在滿の「國歌八論」を中心として喧々囂々の論議が行はれた。更に轉じて宗教哲學等の思想界を見て

も、新宗教新主義の起る毎に、この種の論爭は盛んに行はれて居る。しかし今これを文學の圏内に限つて、我が國文學史を通覽した時、過去の文壇に最も盛んな論戰を交へたものは、恐らく江戸時代の俳人たちであつたらう。

俳諧の論戰は江戸時代を通じて屢々見られる現象であるが、就中俳諧が貞德によつてその基礎が確立された後の門人間の爭ひ、及び談林勃興後新古兩派の勢力爭ひは、最も激しいものであつた。そのあるものは、當時の幼稚な印刷術を以て、一論難書が出づるや月を越えずしてその反駁書を出すといふ程、白熱的な接戰を交へたものもある。しかもその多くが極めて感情的な言論に終つて、正しい藝術的批判を缺いて居る事は、最も遺憾とすべき點で、これらの論難の間から當時の俳人たちの冷靜な藝術論を聞く事は極めて困難である。元來貞門談林の俳諧そのものが、藝術の第一義に立脚してゐないのだから、その論戰にも亦正しい藝術觀を伴つて居ない事は勿論だが、しかし貞門なら貞門、談林なら談林だけの藝術原理は存在してゐた。せめてその原理に據つた論戰であつたならば、所謂君子の爭として、少くとも當時にあつては意義深いものであつたらう。然るに貞門談林時代の論戰書の多くは、寧ろ車夫馬丁の爭であつた。

果ては人身攻擊に及び、罵詈讒謗を極めたものも少くない。さうした論戰がいかに盛んであつても、それは俳壇に何の寄與する所もないであらう。寧ろ俳諧を汚濁するものであるかもしれない。しかし當時貞門相互間、或ひは貞門談林の間に、激しい論戰が屢々行はれた事は事實である。事實はこれを默殺する事は出來ない。この事實のよつて生じた所以を考察し、又その事實から當時の俳壇の動きを見極める事は、文學史家の一の責務でなければならぬ。從來の一般の文學史若くは俳諧史家が、この論戰について全く觸れてゐないのではないが、それは纔か貞門談林間の爭の一部の消息を漏らしてゐるに過ぎない。まだ論戰のすべてに亙つて述べたものはないやうである。茲には先づかうした事實を事實として、やゝ系統的に紹介して見たいと思ふ。たゞ古俳書の多くは湮滅に歸して、論戰書として知られてゐるものも、その內容を今日知る事が出來ないものもある。よつて今姑く管見の範圍で、筆を進めて見よう。

二

俳諧論戰の最初の火蓋を切つた者は、松江重頼と安原貞室とであつた。元來この二人は共に

霸氣に富み且つ負け嫌ひであつたので、屢々他と衝突した。重頼は「犬子集」撰集の事から、野々口立圃とも不和になつたが、立圃は自ら別に「發句帳」を撰んで「犬子集」に對したりけで、積極的に批難は加へなかつた。隨つて重頼對立圃の論戰は見られなかつたが、重頼と貞室との間は互に默しては止まなかつた。「貞德永代記」によれば、この二人は數年不和であつたが、貞室が母の追善の百句に自註して出版すると、重頼はその傲慢を惡んで散々に非言の書を板行し、貞室も亦その返答を出して應じたといふ。貞室の「百韻自註」は寛永十九年二月下旬の跋があるから、當時刊行されたものと思はれる。するとこの論戰が蓋し俳諧論戰史の最初にあげらるべきものであつたらう。但し「百韻自註」は傳存してゐるが、その非言及び返答の二書は共に傳はるものを知らない。たゞ「氷室守」の中にこの論戰について記した所がある。それによれば百句の中六句だけに批言を加へたらしく、その批難は例へば

雪間より盗人がんだうあらはれて

の句に對して、雪の村消えした間から野鼠土龍ならいさ知らず、五尺六尺の盗人強盗が現はれるのは似合しくないとか、

大黑と夷はじぎをし暮して

を評して、大黑は天神夷は地神だから一所に會つて時宜するまでの事は無い筈だと言ふやうな類で、纔かに

ひつこもる横川の山は風あらみ
草枕あまり夜深う起出でて

を難じて、「引きこもる」、「夜深くて」といへばそのまゝ連歌だから俳諧が弱いと評してゐるのが、首肯される位のものである。「氷室守」の中には六句の批言について一々辯護してゐるが、――「氷室守」では百韻自註の作者を蚯蚓、批言者を蠅といふ匿名で記し、辯護も勿論第三者として述べてゐる。――それも北國なら一丈も八尺も雪が積むから盗人も現はれるだらうとか、犬筑波に「大黑と布袋は鳶につかまれて」といふ句があるから、差支がないとかいふやうな幼稚な論にすぎない。

附記、「百韻自註」の名は便宜阿誰軒の俳書目に從つたので、原本には「俳諧之註」とある。大本一册。正保二年二月重頼の「毛吹草」が出版された。この書は俳諧の作法を始め四季の詞、世話、

諸國の名物等句作に資すべき事を多く集め、四季類題別の發句附句等まで載せてあるので、當時重寶の書として最も汎く行はれた。その自序によれば寛永十五年正月にすでに成つたものらしいが、阿誰軒の俳書目錄に正保二年二月とあるから、出版までには大分手間取つたのであらう。――正保初版本は頗る稀覯でその他明暦元年十一月刊本、萬治二年七月刊本、無刊記本等多くの後刷本がある。それだけこの書が汎く行はれた事が分る。――かねて「百韻自註」の攻擊に報いようと思つて居た貞室は、好機逸すべからずとして直ちに「氷室守（ヒムロモリ）」を出してこれを打つたのであるが、先是他の理由で「毛吹草」に快からず思つてゐた池田正式が「古保里山（コホリヤマ）」を出して先づ重賴を難じた。その不快を釀した所以として傳へる所はかうである。始め正式と重賴とはよく相和し、「毛吹草」撰集に際しても、重賴は正式の

庭訓は春のはじめの試筆かな

といふ句を、卷頭にしようと約した。然るに實際卷頭に選んだのは春可の句

鶯も歌機嫌なり今日の春

であつたので、正式はこれを憤つたのであるといふ。これは「滑稽太平記」に傳へる所であるから、そのまゝ信じて宜いかどうか分らぬが、「郡山」の內容について見ると、ほゞ事實らしい。「郡山」は正保三年春良辰の刊行で、正式の住所が大和國郡山であるのに因んで名づけられた。その內容は「毛吹草」の中から十數句の發句をあげて、これを一々難じたもので、春可の卷頭の發句は勿論第一に槍玉にあげられてゐる。「いくらもある發句の中に、この歌機嫌を卷頭におかれたるに聊不審の侍る」といふ口吻に、すでに十分不滿の色が見られる。さうして機嫌の字義を詳しく說いた後、この句の表現形式が、言はうとする內容に卽してないといふ意味の評をして、

凡俳諧の上はしらず、一部の卷頭の歌の體は、君子の萬民の上に居て其盛德を施すが如く、心正詞直に隱れたる跡なからんとこそおゝ〳〵承及侍りつれ。但今の人の心世と共に俳諧の俳諧體になり、まことらしき事は少く、只名聞をのみ事として、或は梓にちりばめて市にひさぐ利に目がけ、或は濫りに他の句に附墨してその賄を得ん事を喜ぶよすがにもや侍らん。是まで不審はかへりてよしなき事にや。

と結んでゐる。總じて穩やかな論評で肯綮に中る點もないではないが、しかもその中に暗に重

賴の著述が名利の爲めたる事を諷し、相手をひどく見下げた態度をとつて居る。且つ卷末に貞德がこの「郡山」を一見して頗る同感たる事を言寄せた手紙まで添へて、この批難がひとり私見にとゞまらない事を誇示してゐる。一體重賴は「犬子集」の事件以來貞德とも反目して、自ら自分は貞德の弟子ではないと言つてゐる位だから、貞德が「郡山」に好意を寄せたのは尤もであつたらう。

「郡山」の批言を見て、貞室は心竊かに快哉を叫んだであらうが、彼はなほ自ら起つて敵に對しないでは氣がすまなかつた。「郡山」の出版と殆んど同時に筆を執つて「氷室守」を著はした。この書には奥に

正保三丙戌暦如月下旬中書之

とあるが、出版されたのはそれより多少後であつたらう。「氷室守」は「郡山」の批難が部分的なのに比して、全體的に一々片端から批言を加へて居る。卽ち先づ「毛吹草」の序文が格を知らない事から難じ出し、次に卷一の作法論については説明が抽象的であるとか、自家撞着があるとか言つて、その撞着した點を指摘し、特に重賴が先人の作と等類の句をしてはならぬと言ひながら、「毛吹草」中には等類の句が少からぬ事を笑つて居る。又惡い句の例としてあげた句が必ずしも惡くなく、場合にもよるべしと言ひ、善い句の例としてあげた題目の中には、撰者の私に始めて作り出したものがあるとて「よきとてもかゝる私ごとは用ふまじきに云々」と傳統的な思想を仄めかしてゐる。卷二の四季の詞については、宇治河先陣や木曾合戰をその實際あつた時節に配したのを難じてゐるが、それは成程と思はれる。なほ世話の選擇が野鄙に失して居るとて、「年寄り親と持佛堂は置所なし」の如きを入れた事に道德的の批難までを加へ、――これは重賴も甘心したものか後刷本には他の諺と代へ、なほその他にも二三改めたものがある。――果ては振假名の誤までも指摘してゐる。――この誤も後刷本には正してゐる。――次には「毛吹草」に收めた發句附句の批難であるが、「氷室守」全四卷中第二卷以下の三卷は、實にすべてこの批言のために費されてゐるのである。先づ卷頭春可の句に長々と攻擊を加へたのはいふまでもない。以下發句百五十句、附句廻文句十餘句について、頗る念入りな批評を試みて居る。その論は修辭の不穩當なものや滑稽味の稀薄な點などを指摘したものもあるけれども、等類の難や作者の内幕の素破抜きといふやうな事が多く、特に卷頭句の作者春可が身分の低い事

や、重賴が宗房・光有・永治などゝ多くの烏有先生を拵へて、自分の句を是等の人の作だとしてゐるとかいふやうな文學的批評とは殆んど相關しない事が、盛んに論難されてゐる。しかも著者は「强ひて撰者をそねみ作者をもどくにも非ず、ゆめ害心を出し給ふな」といひ、卷末にも「氷室守全部四帖者、爲童蒙初學、且亦待將來君子、予明愚昧也、杵宮照覽曾以害心不記、尤不可免外見者也」と識しては居るが、要するにその動機が感情的であるだけに、公正な論といふ事は勿論出來ない。たゞ論戰書として頗る厖大な著を出した事は、論戰史上この書が最初であつた事が注目すべきである。

「郡山」と「氷室守」に對して重賴は特に反駁的な書を出す事はしなかつた。これは貞室・正式の批難にも拘らず、「毛吹草」は盛んに行はれたので、無言の勝を制したがためであつたらうか。「滑稽太平記」によれば、重賴は正式が「郡山」を出した事を大いに怒り、果し狀をつけたが、正式は謝罪して事無きを得た。元來正式は郡山の武士であるのに、――寛文千二年「俳諧塵塚」によれば本名池田十郎右衞門正式和州郡山本田内記殿の家臣であつた。――町人たる重賴に果し狀をつけられて陳狀を書くとは卑怯だなどゝ評せられたといふ。これもどこまで信じてよい事か分らぬが、重賴が返答書を出さなかつた所を見ると、さうした事件があつたのかも知れない。尤も阿誰軒の俳書目によれば、寛文元年に一興の撰んだ「浮世長刀」十册があり、元祿五年の廣益書目には同書をあげて「氷室守返答」と註してある。この一興は或は重賴の門人であるかも知れぬが、「浮世長刀」の原本が傳はつてゐないので、その内容を知る事が出來ない。

附記

一、「郡山」と「氷室守」の原本には孰れも著者の名を明記してない。阿誰軒の俳書目には二書共正式の著の如く記してあるが、「貞德永代記」・「獏物語」等の諸書すべて「郡山」を正式、「氷室守」を正章（貞室）の作と傳へて居て外に異說はない。「氷室守」の中に正章の句を引いた場合は、常にこれを辯護して居り、特に正章の「百韻自註」の批難について一々辯駁して居るのなどは、本書が正章自身の著たる事を十分に證して居る。なほ按ふに「永代記」に貞室が百韻自註批言の返答を板行したといふのは、或はこの「氷室守」をさしてゐるのかも知れない。右の如く本書の中には百韻批言の全部に對する返答をも含んでゐるのである。なほ「郡山」と「氷室守」とは各々單獨に著はされたのでなく、師弟たる二人の間には勿論共同策戰があつたのだらう。

二、「氷室守」の中には往々「犬子集」に對する批難にまで言及んでゐる。これは「犬子集」も重賴の編であるからで、たゞその題號は貞德の命ずる所だから、それに憚つて多くを言はないと言つて

ゐる。

三、「郡山」は大本一册、「氷室守」は大本四册であるが、両者とも横本もある。それは後に再版したものであらう。

重頼の論敵となつたものに、なほ「歩荒神」の著者加藤貫風がある。阿誰軒の俳書目によれば、「歩荒神」は二卷で慶安三年九月九日空門子の撰とあり、「誹家大系圖」にも貫風は貞室と親しみ深く、重頼撰集の批言「歩行神」二卷を編したと見える。しかし「歩荒神」は今散逸してその傳はるものを聞かない。只この書の追加として同じく貫風の著した「歩荒神追加」が殘つて居る。その卷末には

慶安三年の冬霜いたくむすふねやのともしひかゝけつゝしるしおはりぬ　加藤半左右衛門雪堂居士撰

とあつて、「歩荒神」の成つた後間もなく撰ばれた事が分る。その内容は「毛吹草」の卷一の中に、悪い句の例としてあげられたものに對する反駁であるが、

およそ犬子集毛吹草兩集の中のあしき句をぬき出して難じ申さば、一代藏經よりも多く候はんか。

と先づ總括的に重頼の撰集を貶し、ついで「毛吹草」に難ぜられた句を一々あげて辯護して居る。例へば

羽生えて飛ばぬ鶯菜めし哉

を重頼が姿詞下劣な例として擧げたのに對し、

初陽の時分家々に用ひる野菜をばうぐひす菜といふやうに承れば、菜ばかり多くて米の少きいひのやぶさかなるを嘲哢して、はね生えて飛ばぬ鶯菜飯かなと言へる、とりなし句から俱に興ありてをかしく侍れば、誠に狂句の本體と覺えたり。

と辯護して、俳諧の本領は寧ろ下劣卑賤の世話を用ひる點にあるので、これによつて大名高家も民の下情に通じ、世を治め民を濟ふもとゝなるのであるといふやうな功利的文藝論などを述べてゐる。かうした道德的文藝思想は、當時の歌人俳人としては、敢へて珍しからぬ所である。

貫風は特に重頼が連歌の知識を振廻すのが癪にさはつたらしい。かくてその筆鋒は重頼の人身攻撃にまで及び、「生兵法者の重頼といふもの」といひ、

我と名をくたすかいかにぐわら〳〵と尻毛を吹いてたるゝ治右衞門（註、治右衞門は重頼の通稱、痔にかけたしやれ。）

と嘲り、果は重頼の一門に病難が多いのは歳旦の發句に不吉な句をしたからだといふやうな事まで言つてゐる。しかもやはり「ゆめ〳〵私の遺恨を以て人を嘲弄し奉るには非ず」と言つて重頼の門人達が師の惡しき教に迷ふのが氣毒だから、これを救ふ方便だと述べてゐる。「歩荒神」も亦恐らくこの程度の批言であつたのであらう。而してこゝにも亦貞室の尻押があつたらしい事は認められる。所詮重頼對貞室の確執が、これらの論戰の原因をなしてゐる事を思へば、その論戰が互に感情に走つて公正を失してゐるのは止むを得ない事であつた。

附記

一、「歩荒神追加」の中にはやはり犬子集に對する批難も見える。隨つて「歩荒神」も毛吹草だけの難書でないかもしれぬが、「獏物語」に「重頼が毛吹草に池田正式が郡山にのぼらせ、正章が氷室守をみつぎ、貫風が歩荒神をまつらせしより云々」とあるから、「毛吹草」を主として對象としたものと思はれる。

二、「歩荒神追加」は横本一冊、柱に「下」とあるけれども序文からあるのだから、或は本篇を上とし追加を下とし、それで二卷となるものか。原本神戸川西和露氏藏。なほ歩荒神はアルキクワウジンとよむのであらう。

なほ當時の論戰書として、「馬鹿集」があつた事が「獏物語」に見える。即ち同書に「連歌の宗匠紹巴翁の千句に非言し、俳諧にうつして紅梅千句の所々、貞德を始め門人の誰々、良德か崑山集にすこしき玉の瑕を求めて趙高如きの佞出て馬鹿集にゆびざし云々」とある。又「滑稽太平記」にも崑山集の難書として馬鹿集の出た事を記し、これは南都興福寺の衆徒因幡が子追名の作と傳へて居る。この「馬鹿集」は例の阿誰軒の書目には、

馬鹿集　六册作者不分明　明暦二年正月　秋田屋平左衞門　開板

と出てゐるが、今日は全く佚亡に歸してしまつたらしい。又同書目に見える明暦二年五月の是誰（播磨の人）撰「破言魔（ハリマ）」の如きも、題名から察すると論戰の書らしく思はれ、元祿五年の廣益書目に「播磨姫路三册、崑山の批言是誰」と見えてゐるのは即ちこの書の事であらう。しかしその原本が傳はらないので、全く内容を知る事が出來ない。又「滑稽太平記」によれば大佛餅

屋庄左衞門といふ人が、「玉海集」の難書を出さうとしたが、貞室の門人の慰撫によつて果さなかつたといふ。

〔補記〕

「馬鹿集」は横本五冊、別に追加が一冊添うて居る。第五巻の終に「承應二年彌生上浣日」とあるから、當時成つたものと思はれるが、刊行されたのは明暦二年正月であつた。題簽にすでに「崑山集非言」と傍題してある如く、慶安四年鷄冠井良德の撰んだ「崑山集」を批難したものである。その論ずる所は專ら編纂の杜撰な點を指摘するにあつて、同句が重出したり、等類の句が多いのを難じ、特に貞德に對して最も手ひどい攻擊を與へて居る。而して恰も貞德と撰者と二人が、作者からの賄賂によつて依怙贔屓をしたかの如く推し、又貞德自ら他句を剽窃して居ると詰難して、

さりながら長頭丸などせられしは古句にても苦しからざると見えたり。右にもかきし如く一字二字などちがひたる等類は數をしらず。一字もかはらでそのまゝいたされたる句多し。但し發句の盜みやうも傳授あるにや、跡をつきとめし弟子達のしられん事羨まし。

と揶揄して居る。勿論貞門時代の句案にあつては、等類同巣が多くなるのは自然の事ではあるが、本書は次のやうに一々具體的の證據をあげて難じてゐる。

暑き夜の星はあせぼかあまの原

此の句一字もちがはで鷹筑波に作者端長兵衞定主とあり。崑山集には長頭丸とかけり。いかに作者老亡せられたればとて、鷹筑波もくらず、長頭丸と書付る事あさましき撰者也。

春の部にも德元句をそのまゝ書かれたれば、盜まれし事珍しからねども、あまり度々なれば申すなり。

隨つて右の如きは必しも故意ではなかつたにせよ、「崑山集」の不備な點は確實に剔抉されて居るわけで、批難としても肯綮に中る事が多かつた。要するに「馬鹿集」の非言は、單なる漫罵的のものと異り、相當な根據をもつて、徒に厖大な撰集の弊を指摘して居るのである。しかしもとよりそれは全く公正な立場にあるのではなく、中に屢々「毛吹草」を辯護し、かつ「氷室守」に非言の餘沫を飛ばして居るのを見ても、重賴一派の人々の貞德一派に對す

る反感に基いて居る事は明である。その作者は追加たる「慇懃集」によれば、南都の長式といふ者の由である。而してこの追加は元來長式の見落しを拾ふ爲だといひながら、實は攻擊の鉾を轉じて貞室に向け、當時都から出た「獨言（ヒトリコト）」といふ書を後半に添へて居る。この書は正章の承應三年歳旦の三ツ物、亡母の廿五回忌追善の百韻自註、及び正章千句中の一二句を批難したものであるが、貞室の例の名高い鼻を盛んに愚弄して、

はななうて何の匂ひをかぎやどの
めんぼくなしの木をもつげかし

といふ狂歌や、

接ぎとめてめんぼくなしやはなひしげ
つぎとめば是ぞめいよのはなひしげ

などといふ句まで揭げて居る。之は貞室が長頭丸の跡をついだ事についての嘲弄である。「獨言」も恐らく「慇懃集」の作者の手になつたものと思はれるが、つまり「百韻自註」以來貞室と重賴との間に蟠つて居た反感の一のあらはれに外ならぬ。

附記、「馬鹿集」は京大國文學研究室に新たに收められた本によつたが、同本は卷一を缺くため、序の有無、春の部前半の非言等を知り得ないのは遺憾である。明暦二年丙辰初春吉辰、寺町通圓福寺町秋田屋平左衞門板行。なほ同本については雜誌「懸葵」昭和七年七・八月號に藤井紫影博士の詳しい紹介がある。

三

ついで俳壇に口角泡を飛ばしたのは、貞室の「正章千句」を中心とした論戰であつた。「正章千句」は貞室の獨吟千句に貞德が判を加へたもので、正保四年十一月に成り、翌慶安元年九月に出版された。當時は貞德の判に憚つたものか、何人もこれに批言を加へたものはなかつたのであるが、――〔補記〕「馬鹿集」の追加中に二三の批難が見える。――貞德歿後十年、「正章千句」の刊行後十五年、即ち寛文三年に至つて烈しい攻擊が加へられた。それは椋梨一雪の「俳諧茶杓竹」である。かく十數年後に至つて始めて難書を出すといふのは、その間に種々の事情もあつたかも知れぬが、要するに「正章千句」そのものよりも、作者正章に對する挑戰の意味が多く含まれてゐる事は、何人も氣が付くであらう。果して「茶杓竹」の内容を見ると、先づその

序文から貞室に對する猛烈な惡罵を浴びせかけて居るのである。一雪が批難の基礎としてゐる點は、正章千句の長點や判詞が貞德の加へたまゝのものではなく、貞室が勝手に僞作したものだといふので、その中の佳句には師貞德の作を剽竊したものさへあると言つて居る。例へば、「太平廣記を見られ候や奇特に候」とか、「高僧傳の古事か殊勝」などゝ評したのは、當時の點取を見ると貞德の執筆たる珍重の筆跡とは全く別で、正章自身の加筆であるとか、追加の卷の點はもと六十三點に長點五であつたのを、いつの間にか長點十七にしたものだとか、第一卷の

彌勒の出づる世ははるかなり
夕顏のちぎりはあまの事で候

の付句は、もと貞德獨吟中の句であるとか難じ、「一字も引かへずしておのれが千句の第一の卷に盗み入るゝ事、誠に恐しき事ならずや」と盗人呼ばはりまでしてゐる。そればかりではない、更に貞室が亡恩の所行を發き出して、

先師煩五月に及ぶ、其内に正章は七八度ならでは見廻ふ事なし。臨終のみぎりには十日ばかりも寄りつきだにせず。然るに獨吟の追善の詞書又玉海集の序跋等も大きに僞りを書けり。（中略）扨德老死去の後五月も立たぬに三ツ物をして世に鳴りまはる事も道を知らぬ故也。師の恩の深き事はさら也、五月師の道改めずとこそ侍るに、四十九日もたてずかく有る事、例へば俗に死ねば目くじらむといふやうの事也。此人我が師の死去あれかし、さあらば此發句（註、「繼ぎとめてけふぞめいぼくの花の春」といふ貞室の承應三年の歳旦句をさす）して世に廣むべき物をと常々に呪詛せられたる心ばへ、鏡にうつる如くに見え侍る。

とまでその非行を譏り、「玉海集」も貞德の遺子昌三に賄して濫りに撰んだのだなどゝ言つてゐる。もしこれがすべて事實であつたとすれば、貞室は人格的方面からだけでも、貞門に於ける地位がもつと低く見られねばならないわけである。しかし「正章千句」の出版されたのはまだ貞德生前の事であり、又一雪の證據とする當時の點取も實物を示してゐるわけではない。寧ろこれは一雪の中傷に近いのではないかと考へられる。さて次に「正章千句」の一々について批言を加へたのを見ると、前句と意味の上の連絡に缺點があるもの、三句に渡るもの、去嫌指合の難あるもの等、貞門俳諧の原則としては當然な批難も少くないが、その指合の指摘の如きは特に吹毛求疵の傾があり、又例へば

いつきの宮に春やへのこす

の句を評した後に、「かゝる放埒至極の事おそれもなく云出る事度重ならば、佛の顏も三度なぶれば腹立つといふ俗言も侍るぞ。佛神の御事心してめされよ」と言つたやうな、藝術的批判でなく一種の道德的批難も多く見える。――この種の神佛を貶し長上に禮を失するやうな句を批難する事は、この後の論戰にも多く見える事であるが、しかし實際は道德的美名の下に讒謗を擅にすべく利用されてゐる場合が多い。――また貞德が褒美の詞を與へたものについては、すべて貞室の僞作した判詞だと言つてゐる事はいふまでもない。なほ「茶杓竹」には追加として「副紗物（フクサモノ）」一卷が附いてゐる。これは「玉海集」、「紅梅千句」等の中にある貞室の句を誹つたもので、その序文によれば「茶杓竹」の撰者とは別人の著のやうであるが、勿論一雪が假託の言にすぎない。

これ程の侮辱と挑戰とに對して貞室が應じない筈はない。しかし彼は自ら陣頭に立つのは大人氣ないと思つたか、門人乾貞恕をしてこれに返答書を出させた。それは卽ち「蠅打」で、「茶杓竹」の出た寛文四年六月に出版された。その題名は一雪を蠅に喩へて、これを打潰すの意で命じた由を序文に言つてゐる。以つてその內容の程度も察する事が出來よう。貞恕は先づ世に行はるゝ獨吟千句も數種ある中に、特に貞室の作を一雪が誹謗したのは、全く一雪の私の遺恨によるものだとし、その理由として、一雪の一座した卷を貞室に點して貰つたのに、一雪の句は最も點が惡かつたから、それを怨んだのであるとし、元來一雪は二三の人に賴つて貞室に入門を乞うた位であるのに、貞室を誹るとは不屆であると、相變らず人身攻擊をやつて居る。而して「茶杓竹」の批言の全文をあげて、一々その辯駁を試み、博引旁搜頗る說破に努めて居る。但し指合去嫌の批難だけは事實動かす事の出來ないものもあるので、「御傘にさし合も句作によるべしと幾所にも有り」と言ひ、これを唯一の據所として「御傘」の指合に觸れた所を言逃れて居る。しかしどうしても言逃れられないものは、龍馬の躓だと輕くあしらつて居る有樣で、要するに長廣舌を以て糊塗するか、顧みて他を言ふやうな趣がある。しかし貞恕が師のために努力した點は十分認められ、又この書によつて一雪の攻擊がやはり私怨に基くものであつた事が想察されるのである。なほ「蠅打」にも別に追加があつて、「副紗物」に對すべく一雪の作品を難じてゐる。かくしてこの論戰は兩者互に火花を散したけれども、「蠅打」の後應

戰するものがなくそのまゝに終つた。

附記

一、「茶杓竹」・「蠅打」共に原本には全く署名はないが、「貞德永代記」に「正章千句とて貞德批點の千句を、椋梨一雪茶杓竹と云書を作て削之、貞室こらへず蠅打といふ書作り、大津乾重次を作者にして是を殺す」とある。又「獏物語」にも「正章が獨吟を一雪が茶杓竹に削り、犬井氏が蠅打を北村へはらひ」とある。又「蠅打」の中にもすでに、「然るに下京邊に榎(本ノマヽ)梨氏一雪といふ小新發意が茶杓竹と云書を作りて彼千句等を難ずる事あり」とある。但し「永代記」に從へば「蠅打」の實際の作者は貞室といふ事になるが、いづれにせよ師弟協力してやつたのではあらう。なほ「獏物語」に「蠅打を北村へはらひ」とあるのは、「蠅打」の中に季吟が貞室を背いた事を暗に難じて、かつて季吟が貞室にやつた起請文を掲げたりしてゐるからである。これによれば貞室と季吟とも亦反目して居たらしく、貞室の方では季吟などが多少一雪の尻押しをしてゐると解したのかも知れない。

二、「茶杓竹」は「副紗物」と共に横本四册。寛文三年仲秋、室町四條下山王町、袋屋庄右衞門板行。「蠅打」は追加共に横本五册、寛文四甲辰年六月、東洞院押小路下ル町、和泉屋八郎兵衞開板。

古典の註釋に逃避して俳壇から超越してゐたかのやうに思はれる季吟も、一度は論戰の渦中に投じた事があつた。それは彼が延寶三年八月湖春・正立の二人と共に興行した三吟の「花千句」に端を發するので、この書に對して肥後隈本の三樂といふ者が、延寶五年三月「肩入奉公」を出して難じた。「肩入奉公」は維舟・西武・梅盛・玖也・令德・意朔・是誰・胤及・任口・一雪・貞恕の都鄙十一人の點者に、「花千句」の批判を乞うた體裁にしたものであるが、實はすべて三樂のやつたものらしい。その批難は判詞に託したものであるから、例へば

荷つけ馬よけて通せば又車　　湖春
打越わろし

大津の道のせきせばの世や　　季吟
道のせばき前句と同意なり

（第二卷二ウ第九句と第十句）

の如き簡單なもので、すべて式目作法上の難を主として指摘したものであつた。隨つて批言としては正しい立場にあつたが、苟くも一派の宗匠として令名ある季吟が、特に式目作法に外れた事を名も無い田舍人に指摘されたとあつては面目が立たない。早速返答の書が出版された。

但しこれも季吟自ら矢面に立つ事はしなかつた。門人たる阿波の鳴門水雲が、師のために「大長刀」を出して三樂の筆鋒を迎へたのである。この書もかの「蠅打」の「茶杓竹」における如く、「肩入奉公」の全文を引用して、一々これに反駁を加へてゐる。例へば前記の「荷つけ馬」の句の評に對しては、

亦しりもせで輪廻の沙汰せられたり。しらずは季吟先生の風體に習ひ候へ。

と答へ、次の道狹きは同意との難には、

初心の批言なり。廣き所にても馬車はよけるものなり。然れば同意にあらず、面白きあへしらひ也。

と辯じて居る。又維舟以下の判者が、此の如き批判を加へる筈がない事を極力說いて、その證として延寶四年四月に死んだ玖也が點をするのはをかしいとか、一雪からは直接右の判をした覺えがないと言つて來たなどゝ敵の急所を衝いて居る。しかしこの論戰も「大長刀」の一振りに辟易したのか、又季吟の地位が重かつた爲めか、再びこれに應酬するものなくして終つた。

附記、「肩入奉公」は横本二册、刊記書肆名なく自序に「延寶五年三月祥日　肥後隈本住三樂」と識してある。「大長刀」も横本二册、延寶五丁巳年八月吉辰寺町通二條上ル町、寺田與平治板行。著者水雲については「誹家大系圖」に一寸記してあるが、當時は京都に住んでゐたのであらう。只一方が肥後國人と名告つてゐるから、一方も特に阿波住人として田舍者同士の論戰とさせたらしい。勿論季吟がこれに關係しなかつたとは思へない。なほ阿誰軒の書目に「肩入奉公」を一雪としたのは誤で、「イニ肥後隈本三樂トアリ」とあるのが正しい

五

年代順にいへば「花千句」中心の論戰以前、すでに貞門對談林の爭ひは始まつて居たのであつた。それは宗因の「蚊柱百韻」を難じて、南都のさる法師といふ匿名者が、延寶二年三月「澁團（シブウチハ）」を出したのに始まる。「蚊柱百韻」はその單行本が傳はつてないので、これを世に公けにしたのが何時だか知る事が出來ないが――「誹諧破邪顯正」には「延寶二年の比蚊柱の獨吟して板行し」とある。――少くとも延寶二年三月以前であつた事はもとよりである。「澁團」の著者は序文の始めに、

昔忘れぬ友一人二人とぶらひ來て、世のうきもをかしき事もいひ終りて、懷より西山宗因

蚊柱の百句の誹諧とり出でられしを、その作ゆかしく開き見るに云々

と言つて、その百韻にいぶかしい點が多い事を述べ、更に

誹諧といふも和歌の一體ならずや。歌は國を治め身を治むるの道なり。言葉こそ誹諧ならめ、心はそれにひとしく四季折々を思ひめぐらし（中略）、其の本意を失ひ言ひたきまゝに言散らし、あたら櫻にちりばめ道の邪魔となれる曲事

といふ見地から、蚊柱百韻の一句毎に批言を加へたのである。ではその蚊柱百韻はどれほど放埒な體であつたかといふに、今その表八句だけをあげて見ると、

蚊柱に大鋸屑さそふ夕べ哉
　かわき砂子の庭の涼風
酒ひとつ喉通る間に月出でて
　つぶりなづれば露ぞこぼるゝ
四つ五ついたいけ盛りの花薄
　まゝ食はうとや蟲の鳴くらん

野遊びにかけ廻りては又しては
　あの山櫻こゝのかしこの

の如きで、後年の談林調に比すると、決して異體といふ程のものではなかつた。しかも「滋園」の著者は、例へば「まゝ食はう」の句に對して、「まゝ食はうの酒呑まうのといふ虫終に知らず、世には珍しき虫の有る事や」と嘲り、次の野遊びの句を「扨も放埒なる一句也。又してはとは何事ぞ、かけ廻りては又しては前の虫がまゝ食はうといふか。苦々し」等と難じて居るのである。かくて百句に亘り一句も殘さず丹念にあらを探して居る。中には

先年の大燒亡の其風に　（批言略）
　夢はやぶれて殘る穴藏

燒亡に起されて見れば穴藏ばかり殘りたるといふ事か。いかなるものなればとて家の燒失事をも知らで寢て居む事覺束なし。もし寢て居ば其人ともに燒失すべきに、家はやけて穴藏より外に殘るものなきに、人の助かる事不思議也。かやうの無理いひの相手に成つて、筆を費さんも惜しけれども、言はで腹ふくらさんも又苦しければ、書附け侍る。一句も正

體なし。

の如き句意を故らに曲解して難じたやうなものさへある。ともあれ當時新風と言つてもなほこの程度であつたのに、早くも保守派は惡聲を放つたので、宗因が先づ第一に攻擊の目標となつたのも、彼が新風の統師として一般から認められてゐたからである。しかしこの最初の攻擊は、さすがにまだ餘裕のある態度で、宗因も別段これに對して深く取合ふ事をしなかつた。たゞ談林派中の論客岡西惟中が師の爲めに「澁團返答」を出して、これに答へたのみである。「澁團返答」は阿誰軒の書目によれば、延寶五年の刊行とあるが、今その書の傳はるものがないので、內容を知る事が出來ない。しかし「破邪顯正返答」の中に惟中自ら大阪深江屋から澁團の返答二卷を刊行した由を言つて居り、例の寓言說を根據として反駁したものらしく思はれる。たゞ延寶二年の「澁團」に對し、五年に至つて始めて返答をしてゐるのは些か拍子抜けで、さればこそ「誹諧破邪顯正」に「延寶二年の比蚊柱の獨吟して板行し、初心を迷はす故、非言しぶうちはにてうたれ、返答一言もあがらず」と言はれたのであるが、これは延寶二年「澁團」の刊行當時惟中がまだ岡山に在つたからで、大阪に出て後返答を試みたから遲くなつたわけであつた。

附記

一、「蚊柱百韻」は「破邪顯正」によれば延寶二年の刊行と思はれるが、單行本は傳はらない。但しその全部が延寶三乙卯年仲秋日寺田重德開板の「新續獨吟集」下卷三十九丁から四十三丁に亙つて出てゐる。これは單行本の板木をそのまゝ用ひたものであらうと思はれる。これにはやゝ長い前書があり、又宗因が當時の風體に倣らずして、獨り自己の好む所に從はうとする意をほのめかした長い文章が附いて居る。「澁團」にはこの前書と文章とは省いてある。

二、「澁團」は横本一册、序文に「于時延寶二年彌生下旬」とあり、卷末に「蚊柱をふすへたてたる大鋸屑の煙の後にはいかいのくず　去法師」とある。然るに阿誰軒書目・元祿書目には共に「南都去法師」とあるから、最初の版本には「南都」の文字が「去法師」の上にあつたのかも知れない。

三、「澁團返答」については「猿蓑」にも、「一時軒がいはく寓言をもとゝする故俳諧の俳諧たる事、該諧蒙求しぶうちわ返答にからやまとの古事來歷を引てあくまで見しらせ、世上のねぶりをさませしとかけり」とある。

〔補記〕

宗因は「澁團」の批難に對して、當時更に

蚊柱や削らるゝなら一とかんな

を發句とした獨吟百韻一卷を興行し、これに遠廻しな反駁を含めた長い前書を添へた。それは延寶二年の夏の頃であつたが、若殿原と爭ふも大人げなしといふので、そのまゝに捨て置いた。それを門人木原宗圓が延寶八年中秋「阿蘭陀丸二番船」を刊行するに當り、今は年月も經た事で人の心を破る事にもなるまいからと、その卷末に加へて世に公にした。この宗因の前書は單に反駁としてのみならず、彼の俳論としても注意すべきものであるから、左にその全文を掲げよう。

世話に曰、むかしまつかう燒顏火にこりず、蚊遣の煙ふすべかけて又々又々。抑俳諧の道虛を先として實を後とす、和歌の寓言連歌の狂言也。連歌を本として連歌を忘るべしと、古賢の庭訓なるよし。予道に遊ぶ事既年あり、聞道もろこしの何某五十にして四十九年の非を知と、いはんや七十に及て他の見るほどの自の非を知まじきや。非を好に理あるをしれば也。但世に賢愚貧福あり、律義不律義、上戸下戸、武家の町風、法師の腕だて、赤烏帽子、角頭巾、伊達の薄着、六方の意氣をの〳〵其器にしたがふ、其心にあらざればしらす。古風當風中昔、上手は上手下手は下手、いづれを是と辨ず、すいた事してあそぶにはしかじ。夢幻の戲言也。谷三つとんで火をまねく、皆是あだしの〻草の上の露。

延寶二年の夏の比よしなき筆をそむる所也。

かうして延寶初年早くも談林對貞門の論戰は開かれたのであるが、その最も白熱的な接戰を現出したのは、延寶七年九月菅野谷高政の出した「誹諧中庸姿」に端を發した烈しい論難攻擊であつた。この「中庸姿」は高政を始め如風・信德・仙庵等の連句を集めたもので、當時高政はその前年の夏宗因から「末茂れ守武流儀惣本寺」の句を贈られて得意の絕頂にあり、是も奇異な風體を示して却て俳諧の中庸を得た姿だと誇つたのである。これを見た貞門の論客中島隨流は、早速その年の十二月「誹諧破邪顯正」を出して、攻擊の第一矢を放つた。彼はこの書の冒頭にまづ談林の俳風を概括的に評して、

今程世にもてはやす誹諧は、宗因流とて興骨げなる事のみ云ちらして、新俗下劣の言葉を好み、道戲を第一として人ををかしがらするのみ也。

といひ、更に

當時宗因流をまなぶ弟子數多有る中に、殊更すぐれて相見えしは江戸は不知、大坂にて阿蘭陀西鶴、京にては惣本寺半傳連社高政兩大將として云々

と特に高政と西鶴の放埒を罵り、宗因を紅毛流の張本と呼び、これを撲滅せねばならぬと叫んでゐる。惣じてその論陣は外觀頗る堂々としてゐるが宗因並びにその一派を排斥する根據は、貞德・立圃は此の道の祖師なるが故に、この兩人の風を陳腐とし、古風の正道を離れて新奇の道具立てをするのは、外法邪道に陷つたものだといふのである。畢竟新風が俳諧の式法を重んぜず、連歌の古法に段々遠ざかる事を非としたので、主張としては一貫してゐるが、價値標準を傳統の權威にのみ求めて、藝術の本質的要素を顧みない固陋の言にすぎなかつた。とにかく隨流はかうして談林の俳風を概括的に批難した後、更に「中庸姿」中の高政の獨吟をあげて、その一句毎に批言を加へた。しかしこれもやはり指合去嫌の法式にもとつてゐるといふ揚足取りが主で、中には神佛を輕んじてゐるとか、無作法だとかいふやうな道德的批難に全力を盡してゐる所もある。しかもその口吻は「かやうの惡言をはきても忽ち舌を拔かれぬは」とか、「犬同前の外道なれば」といふ如き惡罵を極め、果ては

いまだ天命のつきぬ先に惣本寺を打破り、誹檀林を燒捨て、天道に降參せよ。

といひ、卷末に

右宗因流邪誹之惡言帝釋鐵札記、若當風外道共降參思、六根罪障懺悔追付返答書致、天道衆善奉行所可奉者也。

とまで書添へた。

この烈しい批難に對して何故か當の高政は默して居たが、これも談林隨一の論客岡西惟中が横から出てこの喧嘩を買つた。即ち彼は延寶八年二月「誹諧破邪顯正返答」を出して、隨流に應戰したのである。しかしこの返答は實は宗因に對する辯護のみであつて、高政については寧ろ隨流の批難を當然として認めてゐる。即ち惟中はこの書を以て一は直接新風に對する古風の攻擊を排し、一は間接に高政を抑へて自分を擧ぐべく、一石兩鳥の策に出たのである。而してその論ずる所、まづ梅翁を一宗の祖師に比してその人格の高潔を說き、末輩の爲に誤られた點を釋明し、宗因の俳諧もその立派な人格から發したもので、學問に基く寓言を本意とし、必し

も法式を亂すものではないと言つてゐる。比較的條理整然たる言である。しかしその中には自分の先に出した俳諧蒙求・澁團返答・近來風體抄・風鳶禪師語路句等の事を述べて、暗に自說の宣傳に努める所が多く、特に最後に自分の獨吟一卷を添へて、これこそ當流の精粹であるといはぬばかりの狀を示した。

隨流は又忽ちこれに應じた。その年翌月「誹諧猿蓑（サルトリモチ）破邪顯正再返答」と題して出版したものが、即ちそれである。この書は序分と下通の二部から成り、先づ序分では惟中だけでなく、すべて貞德の古風に反する異風の徒を排し、宗因は勿論惟中・西鶴を邪說の流とし、又京都の似船を無用の「火吹竹」を削ると罵り、宗旦の「當流籠拔」を難じて伊丹の狂亂體と稱した。しかもその論據は相變らずたゞ貞德が歌道儒學に通じた大人物であり、その一流の門人も亦すべて立派な人物であるから、それらの人々の始めた風體に反するのは外道邪法だといふので、要するに貞德の俳風のみを正しいとして、これに反するものをすべて惡いとする論法である。しかも貞德風の正しい理由を、藝術的根柢に置かずして、學問と道德とに求めてゐる。尤も隨流もさすがに口だけは「さりとて貞德流にかたよれと云ふにもあらず、立圃風のみがよしと云ふにもあらず、法は萬法流は萬流也」と言つてはゐるが、結局彼の論法を以てすれば、藝術の內容的展開も形式的變遷をも全く認めないことになる。況んやその正しいとするものゝ標準が、藝術的根柢に置かれてないとすれば、千言萬語を費しても砂上の樓閣に過ぎない。とにかく隨流はかうして序分に一般論を試みた後、下通に於て惟中が「返答」の卷末に添へた獨吟に對して、一句毎に烈しい批難を加へた。しかもその論難は藝術的立場から甚しく離れて居て、或は惟中の衒學癖を逆に利用して文字の誤や破格などを指摘し、或は全く感情的な人身攻擊に走り、殆んど滿紙惡罵の叫びを聞くやうである。例へば

婆婆八千度雪隱へ行く

かゝる傍若無人の大外道にいかほど恥をかゝするとも、犬を評するなれども他見のため也。よく聞け。（中略）高政既に邪をうたれ、ほえ〳〵梅翁が一分の云分をだに仕兼ねたる分際として、はや其しりへにかゝる邪心の惡俳を板行する事、恥を恥とも思はざる人面獸心ならずや。（下略）

といつたやうな調子で、殆んど泥仕合の如き觀があつた。しかもこの論戰は當時の俳壇に非常

なセンセーションを捲起し、「破邪顯正」の出版後僅か一年餘りの間に、源氏供養・あつかひ草・熊坂・賴政・行事板・二つ盃・破邪返答評判・綾卷等の書が相ついで出て、或は隨流に加擔し、或は惟中に聲援し、或は又第三者の地位に立つて論評したりした。今これらの書によつて、卍字巴と入亂れた論爭のさまを見よう。

「源氏供養」と「あつかひ草」とは「猿蓑」にその名をあげて、「一つも道理に當るべき物にあらず」と評されて居るから、談林派から出したものであらうが、共に原本が傳はらない。たゞ「源氏供養」は元祿五年の廣益書籍目錄に

一　俳諧源氏供養　くまさか答

とあるので、「熊坂」の返答書と思はれる。しかしその「熊坂」も又傳本がない。阿誰軒の俳書目に「一札　打破春澄作也　維舟作」とあり、又元祿の書目に「より政返答　維舟作」と見えるだけである。是等によれば維舟の著で、「俳諧賴政」の返答書と思はれるが、維舟の作たる事は疑ひないとしても、「賴政」の返答書といふのは誤りらしい。それは「賴政」の原本題簽に

俳諧賴政　破邪顯正熊坂兩書返答前書

と明記してあつて、「賴政」の方が却て「熊坂」に返答したものであるからである。「賴政」の內容を見ても、正にその題簽が示す通りのもので、「熊坂」は「賴政」より前に出版されたものである事は明かである。

〔補記〕

「熊坂」はなほその版本は知られないが、刊行の翌年これに加筆して寫した本が發見された。右寫本の卷末には「延寶八庚申年三月　日」と識し、跋文に「右俳諧熊坂のうたひ舊冬、都に板行ありて云々」とあるから、「熊坂」が延寶七年冬に出版された事は明かである。內容は謠曲熊坂にもぢつて、高政一派の連衆が、十六七の若い執筆に閉口させられるといふ筋を戲作したもので、なほ

攝津の西鶴備前の摺鉢弟子兄弟は、おもてうらなきばされの大將、扨又都のその內に多き雀のとび體は、三條の如泉、四條の似船、ちう〳〵囀る五句附の錢、火ともしの萬句に元清・春澄・餓鬼の恐るゝ鬼の强口、彼等に上はよも越さじ。扨北方には洞院の蛇の介常の り、新町の信德、あやしの下子の詞を好む。富の小路には總本寺の此の高政を師匠として、

島原詞川原詞、乞食でつちのたは言迄も口眞似をするしれ者等云々

と、西鶴・惟中を始め、所謂飛體の新風に傾いた人々を罵つて居る。作者は書目や「賴政」の中に言つてゐる所によつて、維舟である事は疑ひない。何にしても維舟は默つて居れないたちの人物ではあつた。

附記、「熊坂」の寫本は原刊本の前半に、新に宗因が高政を訪ねる趣向を加筆したもので、なほ終に右加筆した次第を述べた跋文と、宗因・高政等を嘲つた狂歌數首を添へて居る。この加筆者は何人であるか明でない。跋文には第三者たる立場をとつてはゐるが、もとより維舟側の人たる事は言ふまでもない。阿誰軒の俳書目や元祿の書目に、「熊坂」を春澄を破つた作とか、賴政返答だとかしてゐるのは、或はこの加筆本がやはり刊行されたものだからではあるまいか。――「賴政」の刊行は延寶八年二月である。――なほ寫本「熊坂」の全文は「懸葵」昭和六年八月號に藤井紫影博士によつて紹介されて居る。

「誹諧賴政」は作者の署名はないが、文中に「當流の勝五郎春澄と名乘つて」とあつて、同人の作たる事は疑ひない。全篇謠曲賴政の文にもぢつて作られ節附までしてある。これは「熊坂」が同樣の趣向であつた爲めに、これに應じたのであらう。その論ずる所は殆んど惡ふざけに近い漫罵に過ぎないが、維舟・隨流等の古俳一派が盛んに高政や當流の人々を排する原因として、

昔より此所に點著ども餘多ありしが、今流に打負け點料の卷どもを高政にまくり取られ、剩へ友靜・如風などは季吟・湖春が旦那殿とも仰ぎぬる門弟なりしが、今當誹に傾く事扇を拔き自害せんほどの偏執なれど云々。

と言つてゐるのは、蓋し眞相を穿つた言であつたかも知れない。

「行事板」も亦談林から隨流一派に應じたものであつた。しかもこれは「破邪顯正」に直接論抗したのでなく、只間接に梅翁を辯護してゐるだけで、その主とする所は寧ろ惟中の「破邪顯正返答」に添へた獨吟の批難にあつた。即ちその點では却つて隨流の「猿蓑」に等しく、恐らくこれらは高政かその門下の者が、惟中の「破邪顯正返答」に一方高政を難じてゐるので、それに應じたものであらう。しかしその難じ方は全く指合や文字の誤等の揚足取に終つて、論鋒頗る軟弱である。惟中はそれでも默つては居なかつた。時を移さずまたその返答書を出した。それは即ち「破邪顯正評判之返答百韻自註」二卷である。これはかの問題の獨吟百韻に惟中自ら註を

附し、特に「行事板」で批難された卅六句については一々これを反駁したのである。流石に談林隨一の學者でもあり論客でもあつただけに、論旨整然として肯綮に中る所が少くない。但し例によつて盛んにその間に自家廣告をやつてゐるのは、少からず人をして顰蹙せしめる。惟中が「猿蓑」に對して別に返答書を出さなかつたのも、すでにこの「百韻自註」で一方に答へて置いたからであらう。

附記

一、「行事板」は半紙本一册十四丁、酒竹文庫の舊藏本であるが、それには原題簽がなく、後人の筆で「行事板」と記されてゐるだけである。その他内題なども全くない。内容は右の如く惟中の獨吟百韻中卅六句に批言を加へたものである。

然るに阿誰軒の俳書目には

行事板　一册　破邪顯正あつかひ　延寶八年申二月

（邪誹生靈會七本松事共に邪書也）

（〔補記〕七本松の事は特牛の中に見えるが、傳本は知られない）

とあつて、内容が些かちがふやうである。加之舊酒竹文庫本は卷末に「延寶八庚申年三月　日」とあつて二月ではない。惟中の返答書にも「破邪顯正評判之返答」とあつて、「行事板返答」とない所を見ると、右の十四丁本は「破邪顯正評判」といふ書で、「行事板」といふのは後人が誤つて記したのではあるまいか。著者不明。「誹家大系圖」によれば「行事板」は一雪の著としてある。

二、惟中の「俳書破邪顯正評判之返答百韻自註」は半紙本二册。神戸川西和露氏藏。延寶庚申三月下旬書林愚常梓行。

「二つ盃」と「俳諧綾卷」とは、第三者の立場からこの論爭を評したものであつた。「二つ盃」は高政と隨流と兩方から、奉行所に差出した訴狀のやうな體裁にして、兩者の言分を述べさせ、更に「中庸姿」の高政の獨吟について批判を加へてゐる。「鳴絃之書」に惣本持新地建立の訴狀とあるものが卽ちこれである。論評書としてかうした特殊の趣向を設けるといふことは、既に當時の人々のこの論戰への關心が、いかに深かつたかといふ事を物語つてゐる。その著者は勿論匿名で明かでないが、高政の獨吟に對する批評は概して公平で、隨流・高政いづれにも偏して居ない。然るに「綾卷」に至つては、同じく第三者としての評ではあるが、その著者は少くとも新風にあまり好意を持つてゐない人らしく、總じて談林の放埒を罵つてゐる場合が多い。しかし

さらば掟を守るといふ作者の句共をきけ、皆古めかしくして一つも面白からず。又邪誹の外道のとてさみすれども、當風の作意皆新らしくて興あり。

と古風の固陋を嗤ひ、當流の清新味をみとめてゐる。ともあれかうして高政の「中庸姿」をも
ととした論戰は、敵味方入亂れて鎬を削つたのみならず、味方同士の戰ひ、第三者の高見の見
物等まで出て、俳壇空前の大混戰を現出した。なほ「誹家大系圖」によれば高政に「三人かた
わ」の著があり、この論戰に關係あるものらしいが、原本をなほ知る事が出來ない。

附記

一、「誹家大系圖」には「猿とりもち」を隨流の門人瀧川隨有の著としてある。成程同書には隨有の跋があるが、やはり主として筆を執つたのは隨流であつたと思はれる。又「誹家大系圖」では「二つ盃」の著者をも隨流とし、「或書ニ曰二ツ盃ハ金勝庵任陀ト云人ノ作トアリ、隨流下葉ノ人歟考ベシ」と附記し、更に「畸人傳ニ金勝庵慶安トアリ、歌人トミエタリ」と註してある。隨流の作とするのはもとより誤りで、或說の如く歌人などの批評であらう。

二、中庸姿・破邪顯正・同返答・二つ盃・猿とりもち・類政・綾卷は俳諧文庫・俳書大系等に飜刻されてある。「中庸姿」は半紙本・横本の二種があり、半紙本には高政の獨吟の擧句が「珍重々々珍重の」とあつて最後に春の字を脫してゐる。「破邪顯正」にこれを難じたので、横本及び後刷の半紙本にはこれを補つてゐる。なほ卷中の卷の順序も半紙本と横本とは全く同じだが、後刷半紙本は些か異つてゐる。又半紙本は無刊記であるが、横本には延寶七年九月日とある。

なほ「中庸姿」を中心としたものとは別に、延寶六年修竹堂の著はした「俳諧或問」に對して、「談林俳諧批判」を以て應じた論爭もあつた。「俳諧或問」の著者修竹堂は何人か明かでないが、その內容から察すると惟中一派の人らしく、特に惟中の作風を重んじて談林の俳諧を論じてゐる。或は惟中自身の作かも知れないのである。「批判」の方も作者不明であるが、これは頗る保守的な古俳に屬する人と覺しく、徒らに俳諧の字義濫觴を說き、字句の詮鑿に流れて、一種の衒學的な和歌趣味に立脚してゐる。さうしてすべて古典的貴族的趣味に反したものは、文學的價値がないとまで論じてゐる。例へば談林の句

夕露やふもとに四卷のつれ〳〵草

を評して、徒然草はすべて二卷で四卷に分けたものはないといふ事を長々と述べて、その無學を嘲つたり、同じく談林の句

雪に鶯是ぞふか野のきりぐす

が、「君は深野のきりぐす、聲はきけども姿は見えぬ」といふ小唄の心によつた事を難じて、「うかれめの當世はやらす小歌をば上つがたにしろしめされんや、歌道いまだ土泥におちず、

嗚呼勿體なし〳〵」と言つてゐる。かく俳言に對する見解なども極めて固陋で、到底時勢に副ふべき論ではなかつた。

かうして新古兩派が各々の自己の地歩を維持するために、烈しい論爭をつゞけた俳壇も、自然の大勢は理窟だけではどうする事も出來なかつた。その論戰の陣容はむしろ貞門派に堂々たるものがあつたけれども、事實上談林の新興勢力に遂に壓倒されてしまつた。かの「破邪顯正」の中にすでに、

我等初心の者なれば古風新誹のよしあし辨へがたし。但し當風がよきやらん宗因々々とて、京大坂江戸にわたり、今已に日本國に流布し、大方此風にかたつきぬ。それ故古風を仰ぐ誹諧士當風に吹きせめられて、片隅に目ばかり動くやうに見え侍る。されば此比何者かしたりけん、當世のすたれもの隱元の墨蹟貞德流の俳諧鎌倉團右衞門とかけり。

と言つたのは、隨流もまた自然の勢の抗し難きを、竊かに恐れて居たのである。

附記

一、「俳諧或問」は俳諧叢書中に飜刻されてある。「談林俳諧批判」は半紙本二册。刊記はないが、「或問」の出た延寶六年八月後間もなくの出版であらう。

二、「俳諧或問」によれば、江戸の俳諧談林九人の點者を排擊した「俳諧法花論」といふものがあつたといふ。又元祿の廣益書目に「談林誹諧三百韻一册」、「同返答二册」といふのも見える。以上いづれも未見でこゝに述べる事が出來ないのは遺憾である。

六

さしも激しかつた貞門對談林の論戰も、天和に入つては全く聲をしづめてしまつた。當時の俳壇はすでに談林の新風も行詰つて、俳諧に藝術的意義を與へようとする自覺から、新たな展開の道を辿らうともがいて居る時であつた。言水の「東日記」から千春の「武藏曲」・其角の「虛栗」へと、次第に蕉風への歩みは進んで行つた。俳人達はこの過渡期に際して、外部的な論爭に時を費す暇がなかつたとも見られる。阿誰軒の俳書目や元祿五年の書目によれば、この間に「虛栗」に對する批言書「貞德槌」が出版されてゐるが、この書はなほ未見で內容を知る事が出來ない。書目によつても「貞德槌」の刊年・撰者は共に不明である。只阿誰軒書目に、「江戸會」と作者の所に記して居るのを見ると、恐らく江戸談林の故老たちが、「虛栗」の奇

異な風體に對して發した批難であらうと思はれる。

〔補記〕

麥水の「新虛栗」の附言に「貞德樞といふ一冊子に、明石居士が虛栗集を難ぜしを見るに、意皆違ひ理皆背く。貞德門を以て蕉門を論ずるは、道理東西し木に依つて魚を求る也といへども、こは又あまりなる相違なれば世人も不見、答へむにも不及、只虛栗の見難き如斯とはみえたり」とあるのによれば、やはり題名の如く貞德風の立場から批難した書と思はれる。

元祿に入つては貞門・談林系の有力な俳人たちは、なほ多く殘つて居たけれども、俳壇の大勢もほゞ定まつて、もはやこれらの人々の間に對抗的論爭は見られなくなつた。又芭蕉を中心として新しく興つて來た蕉風の一團に對しても、その統帥者の人格によつたものか、或ひは全俳壇が實は多少とも蕉風的傾向を帶びて居た爲か、それとも蕉門の實際的勢力が弱かつた爲か、とにかく立つてこれと爭はうとする者もなかつた。かくて再び論戰は對他派の爭ひよりも、同派内の反目に原因する者が多くなつて來た。かうした爭ひは元祿三四年頃から又ぽつぽつ現れ出したが、先づその著しいものからあげると、元祿四年九月に刊行された「京羽二重」に端を發する一論戰であらう。この書は似船の門人雲風子林鴻の著で四卷から成り、一・二卷は當時京都に住んでゐた俳諧點者作者の住所俳號を列擧して、その人々の傑作と目せられる句を一つづゝあげたもので、卽ち一種の俳人名錄ともいふべきものである。三・四卷は貞門の略系統をはじめ、貞德から傳へたといふ俳諧の式目作法を述べたものであつた。然るに嘗てかの「中庸姿」に最初の矢を射た中島隨流は、今度は同じ貞門系の林鴻に向つて戈を執つた。それは翌元祿五年三月に刊行された「貞德永代記」である。

「貞德永代記」の序文によれば、隨流が林鴻に對して批難の言葉を送つたのは、元祿三年十月の事で、當時一書を林鴻に與へて反省を促したけれども、應ずる氣色がないから遂にこの書を刊行するに至つたといふ。さうして前に林鴻に與へた手紙を卷頭に揭げて、その顚末を明かにして居る。さて隨流が林鴻の著を非として居るのは、主としてその貞門の秘事口傳として濫りに示してならない事を、印本として坊間に流布せしめ、しかもその說く所が頗る杜撰だといふ點にある。それで書肆にこれを絕板せしめよと忠言したが聞入れぬから、止むを得ず自ら筆

を執つて貞門の正しい系流や故實古傳を示さうといふのであつた。しかし秘事口傳なるが故に濫りに示すのを非とするのは、もとより固陋な偏見で取るに足らぬ。又杜撰だとして攻擊した點も、決してさまで重要な事ではなく、誹を俳と書いたとか、林鴻の自敍が高ぶつて居るとかいふ位の事に過ぎない。寧ろ隨流が自ら貞門の故事古傳に深く通じて居る事を、これを機會に汎く誇示しようとするのが著作の動機の根本であつたらしくさへ見える。事實またこの「貞德永代記」は、「京羽二重」の難書としてよりも貞門俳諧の史料的文獻として、多くの價値が認められるのである。隨流はなほ例の喧嘩癖からといふのか、「京羽二重」に跋文を寄せた人々にも攻擊の矢を向け、更に各點者の傑作としてかゝげた句にまで一々評を加へて、しかも多くはこれを冷嘲した。齡古稀に達して居ながら、これだけ多くの人々を向ふへ廻して毒舌を振ふ事に、會心の笑みを洩らして居るらしい隨流は、とにもかくにも喧嘩好きな俳人として、俳諧論戰史上最も人氣役者ではあつた。

隨流のこの傍若無人な態度には、林鴻一派の人々は勿論默つて居る事は出來なかつた。だが先づこれに對して反駁の狼烟をあげたのは、林鴻やその門下ではなくて、「京羽二重」に跋を寄せた一人弄松閣只丸であつた。只丸は「永代記」で特に攻擊されたといふわけでもないが、その句に對する隨流の批評中には一身上の誹謗に亙る言葉があつたので、憤慨のあまりまづ筆を執つて起つたものらしい。かくて「永代記」刊行後數日を出でずして「誹諧足揃」一卷を撰んだ。彼はその自序の次に

永代記之作者隨流は古稀のとし老誹にて時に不合とて、當世の人下手なりとそしるは、此道を知らざる故なるべし。たとひ一文字竪横を不辨人なりとも、多年の功傳受口決連誹のわかち、かくろひたる事もなくあきらめ給はんものをと鬼こもる心地して、此道のたどたど數事をも問はまほしく慕ふ心もありしに、今度京羽二重の作者若輩の林鴻聊かの事書出したるを見て、我一代の至寶を人に知らせしや、是より外に大事の事なしと、夜の目も不合案じくらせしなどゝ書出されし胸のうち、あさましくもうたてくも又笑止にこそ侍れ。京羽二重一部四冊林鴻が知らざる漢文は人を賴み書かせて、自敍と外聞して自ら板下まで書くほどなる土根の生れつき、末々物にもなるべき器量なれば、たがひめあるをも大やうに見のがし侍る也。然るを老人の腹黑くこらへかね書き給ふ。そならば足下の家傳に違ひ

し事どもを、など分明には書き給はぬぞや。たがひめ見出す力なく、よしなき事に六十餘人の句毎にたどりすくなき詞書して、あしき事を梓に行はるゝ心はいかに。歌道はやはらぎたる心をもてこそ本意とはすべきに、かゝる悪言放埼の書を世に廣めしめ、それを見る人またその誤を見出し聞出し、うち返し〳〵互に修羅闘諍の苦しみとなりて、他(マヽ)劫を經るとも恨は盡きすべからず。物ごと報いある世の中なれば、よく〳〵心得て終りの近き身を恥ぢ給へ。強ひて撰者をそねみ作者をもどくにもあらず。京よ田舍よとひろまりし永代記悪言盲(マヽ)語の邪正を紀し、この道を深く興隆せんと思ふばかりなれば、文章艶なる詞もなく心に任せ書出すのみ。かまへて努(ユメ)害心をおこし給ふな。

かう長々と理由を述べて辯駁にとりかゝつて居る。さてその辯駁は「永代記」の本文を一々卷數丁數まで明記して引用し、次に「只丸判云」といふ體裁でその不當矛盾誤謬等を指摘して居るのである。しかしその多くは、例へば「永代記」に「貞室は定なき世の時雨に犯され舊冬よりいたはりつよければ明年の歳旦と云々」とあるのを難じて、

只丸判云、今日より過ぎし日をさして昨日といひ、春より過ぎし年の暮をさして舊冬といふ。(アラカウ)豫いふ詞に舊冬より明くる年といふ事いかに。

と言つた樣な文章や語句の揚足取りで、或は隨流の萬葉・源氏等についての智識の淺薄なのを嗤つて、自らその講釋をやつたり、或は萬葉の文字の用法、長歌短歌の區別等無用の事まで論じて頗る學を衒つて居る。只點者の代表作に對する悪評の辯駁中には、隨流の誤解を指摘して首肯せしむるに足る說も見られる。又隨流にとつて最も急所をつかれたと思はれるのは、彼が「京羽二重」に濫りに師傳を洩らした事を詰りながら、自分は「貞德西武師恩孝養のため、かつは正誹一道再興のため、貞德翁より西武へ傳誹せられし古實古傳をあら〳〵貫(拔)出し此書にあらはしぬ」と言つてゐる矛盾を、只丸から逆に詰られて居る點である。更に又只丸は「永代記」に俳言についての說があるので、故らに歌仙一卷の内三十三句連歌の句を入れて隨流の引墨を乞うたら——勿論それは初心者の名などで賴んだのであらう。——これに俳言なしといふ非言が一つもなかつたといふ評卷の全部を揭げて、これでも俳言の何たるかを解して居るのかと詰め寄つて居る。これも隨流にとつては確かに手痛い批難であつたらう。しかし師傳を洩らした矛盾に對する批難は「永代記」の實質的内容に對しては何の反駁ともならない。又ある

點者を論難しようとして、故らに許點上誤り易いやうな卷を提出して點を乞ふ事は、當時屢々行はれて居る常套手段であるが、畢竟これは敵に正しく當る道ではない。要するに「足揃」の駁論は、公平にこれを見て未だ「永代記」の著者を服させるに十分のものではなかつた。

「永代記」に對すべき當の敵手林鴻は、もとよりこの「足揃」の出版を見たくらゐで反駁を手控へなどはしなかつた。寧ろ「足揃」に不滿をさへ感じてゐたので、翌元祿六年八月に至り、自ら「誹諧永代記返答あらむつかし」を著はしてこれに當つた。その自序に言ふ所によれば、「永代記」が板行されるとすぐその非を悉く筆に記して一卷としたが、未知の俳士二人から同じく「永代記」の難文を寄せて加入を乞はれた。よつてこれになほ豆爾於波百ヶ條・四季の詞等初心のたよりになるべきことを加へて、その年七月書林某の許に「永代記返答織留」と書いた看板を掲げた。然るにさる桑門から「永代記」の如き取るにも足らぬ書に返答する必要もなく、又かゝる俳諧の罪人を許すこそ佛の道だと諫められたので、「織留」の刊行も中止した。しかし門弟達が頻りと返答すべき事を迫り、又嘗て「永代記」の難文を寄せた二人からも催促が來たので、「さらば返答ばかりを書かん、織留はかさねて出すべし、あらむつかしや」と言ふ言ふ筆を執つたのであるといふ。

「あらむつかし」は全三冊から成り、第一卷には「永代記」の序文と第一卷の前半に對する返答、第二卷には同じく第一卷の後半に對する返答と二俳士から寄せられた難文、第三卷には「京羽二重」の題號と自序の評判に對する返答と、林鴻の杜若の句の批難についての反駁とが載せられてある。まづ「永代記」の序文返答には、隨流が「永代記」を出した旨趣は、「京羽二重」の貞德系圖によつて自らかねて貞德の弟子だと門人に誇つた事が僞となつたので、その面目保全の爲めであると實情を發き、しかも隨流のかゝげた系圖こそ實は推量の揑造だと駁して居る。それから秘密口傳を板行する事は季吟の「埋木」などの先例もあつて差支がない事、隨流が戴恩記や御傘すらも見ないで誤つて居る事、西武弟子系圖の太[illegible]に誤つて居る事などから、十月の書狀に臘月と言つたりした文盲などまで逐一論駁を進めた。次に「永代記」第一卷の返答に入つては貞德に吟花堂の號がない事、その師承弟子の記述が誤つて居る事、妙蓮寺の會を清水寺とした誤、貞德集と稱する書の妄、寛永六年の會は式法の始めではなく、只西武が始めて貞德に申請けて會したものにすぎぬ事、式目十首の誤、報恩藏を報苑藏と書いて居る事

などに至るまで、一々戴恩記等を據り所として指摘反駁して居る。かくてこの書は「足揃」のやうな手ぬるい論法でなく、敵が貞德の弟子だと誇つて得意げに示した古傳に對し、すべてしつかりした根據によつて誤を難じたのであるから、論戰としては正に堂々と敵を壓服する概があつた。但しその内容からいへば、すでに「永代記」が文藝論としてよりも史的資料としての價値が多かつたゝけ、「あらむつかし」も亦主としてその事實の誤謬指摘、即ち史的資料の補正といふ點で「永代記」に對して居ると言つてよい。而してその點に於ては、とにかく「あらむつかし」は十分に「永代記」を破つて居るのである。

林鴻の永代記返答に同じく難文の加入を乞うたといふ二人の俳人は、一は則重一は正勝であつた。前者の難文は鰭魚（サンセウウヲ）の卷と題し、主として「京羽二重」にあげた隨流の句

隨流に紋を付るや春の水

に對する批難で、なほその他二三の點について反駁を試みてゐる。鰭魚とは隨流が「京羽二重」にあげた點者三十餘人を鳥獸に見立てた返報として、水に居て紋のついたものだからといふ嘲笑的の意で名けたのである。後者は「永代記」に西武の萬葉俳諧を掲げてわざと無點で出したのに對し、同じく萬葉書の俳諧を試みて隨流に點を乞うたら、隨流はこれを讀む事が出來ないで返して來たといふ顚末を、隨流の返した折の手紙を添へて示したものである。そして自ら讀むことも出來ないで無點の萬葉俳諧をかゝげる愚を嗤つた。この二者はどういふ人か分らないが、その内容から見て林鴻が假設した人物とは思はれない。又林鴻は自らこの二人は全く未知の人だと言つてゐるがその點はどうか分らぬ。とにかくこの二難文は、内容の如何よりも、かうした隨流反對者即ち林鴻贊成者が世には多いといふ事を、敵に示さうといふ念から特に加へたものであらう。さて林鴻は最後に「京羽二重」の題號と自序及び自句に對する批難の辯駁を試みたが、これまた十分に敵を壓するものであつた。かうしてこの論戰は遂に林鴻の凱歌に終り、流石の隨流も沈默して終つた。しかもこの論戰に當り、林鴻は自ら必勝を信じてか、「足揃」の如きを同腹と見られる事を厭ひ、却て「足揃」に對する批難まで言添へて居るのである。

こゝにこの論戰に關して興味ある一文獻がある。それは當時犬井貞恕がその門人たる岡山の木畑定直に送つた手紙の一節で、

隨流とて西武ノ末ノ弟子心かたましく候が本を被出候。其旨趣はりんこうとて若人、一紙

品定（註、「京羽二重」の別名と思はれる）と申本ヲ板ニすらせ、はいかいの大事ヲ書幷、我いけんをも交、古風今やうノ衆卅一人ノ發句ヲ入候ヲ、彼隨流廿九人ヲなしり、さん〳〵に書申候ニも、私ノ師貞室ヲよく書候ヲ、我等少そしり候へとも不恨候。季吟ハ江戸へ召（註、「召されれ」の誤であらう）時めき候故是ヲ惡不書、其外古風も今やうも散々ニしかり被申候へば、其返答ニしぐはん（註、只丸）と申者書ヲ出、隨流ヲ又さん〳〵しかり申候。誹の修羅ニ候。

とある。これはまだ「あらむつかし」の出ない以前の事と見える。俳の修羅場と歎じた貞恕も、實はかつて「蠅打」を出して「茶杓竹」と戰つた事もあるので、多少今昔の感があつたであらうと思ふ。ともあれこの論戰は卅餘人の點者の句にも關係して居たので、かなり世間の注目を惹いたのであつた。而して論者が互に貞德の門流たる智識を誇つて居るのは、論爭の燒點が現實的の所から次第に歷史的回顧にうつつて居り、隨つて當時俳諧師の勢力圏が殆んど定まつて居た狀を想はせるのである。

附記

一、京羽二重・永代記はさまで稀觀でないが、足揃とあらむつかしは傳本が少い。前者は半紙本一册四十八丁、題簽に「誹諧あしそろへ　永代記非言」とあり柱にも「足揃」とあるが、內題には　莠沙汰」とし、自跋にも「書成而號莠沙汰」とあるから、兩名を用ひたものらしい。後者は半紙本三、册、題簽に「誹諧永代記返答　あらむつかし」とある。此書は舊酒竹文庫に一本を藏する外他に傳本を知らぬ。

二、「あらむつかし」の鯖魚の卷の中に、「隨流といふ者人をたぶらかす事の上手也と聞侍る。まことに思へば昌三弟子とやらん書ける隨有といふ儒者もたぶらかされてさるとりもちなどいふわけもなき事を書きて世間に笑はれ侍る。此度も夢物語とかきたる物有、文瓜といふ人の作と見えたり云々」とあるから、「永代記」に同じた「夢物語」といふ書があるらしい。文瓜は「あらむつかし」によれば東山の僧とあるがその傳を詳にせぬ。又「夢物語」も未見である。因に言ふ、右によれば「猿鵠」はやはり隨有の著とした方が正しい。

三、貞恕の手紙は岡山木畑貞清君の藏。九月廿日の日附があるが、夫は元祿五年の事と推定される。

七

すべて批判と稱するには、もとよりある程度まで客觀性を持つて居なければならぬ。しかしより主觀性に富んで居る事は事實である。甲の善しとする所は必ずしも乙の善しとする所では

ない。乙の惡しとする所また必ずしも甲の惡しとする所ではない。一卷の俳諧を懷にして一の點者を訪へば長二十點を得、去つて他の門を叩けば長一句もないといふ場合も有り得る。そのいづれが是であるか、初心の作者に取つては甚だ迷はざるを得ない。やゝ進んだ作者はこの甚しい徑庭を見て批判に對する懷疑を生じ、更に又老獪の俳士は點者を愚弄するの念さへ起すに至るであらう。かうした動機から生れたものに、元祿の始め頃屢々行はれた歌仙點取と稱するものがあつた。それは同一歌仙の卷を初心者の名などで多くの點者に判を乞ひ、これをそのまま相並べて公表するのである。判の結果は千差萬別の狀を呈し、その中の某々點者の如きは、爲めに自己の無識粗漏等を暴露された形になるのさへあつた。而してかうしたやゝたちの惡い試みは、實は夙く寛文の頃からあつたので、同七年正月に出版された「誹諧小相撲」がそれである。この書は同一の百韻一卷を京の點者十人と田舍の點者十人とに判を乞ひ、その結果をそのまゝ板行したものである。まづ

四方山の花を集めて都哉

一立圃　點　　一重賴　點　　一西武　批言　　一貞室　批言

一令德　批言　　一梅室　點　　一季吟　點珍重　　一宗隆　批言

一元隣　點　　一任口　批言

といふ體裁で、各點者の點を一句毎に一覽表的にあげ、次に各點者別にその點と判詞とを揭げてある。その序文の中には「點數少きがよきとも又多くかけたるがあしきとも見えず、故は點多くかけたる人のかけ餘したる句に、少き判者の點多し」とか、「よきといふ人あれば誹(批)言の有るに點あり、古事に耳遠なる人は誹(批)言をうち、聞たる人は褒美を付る。數ふるにやう〳〵二三句ならでは無點の句はなし、長點を見れば三十一文字に餘れり」とか、點者を愚弄した意はほの見えるけれども、表立つて點者を批難した點はないし、かつまたこれに反駁を試みては却つて藪蛇に陷る虞れもあつたからか、誰もこれに應じて辯じたものはなかつた。然るに元祿初年に於けるかうした試みは積極的に點者への批難をさへ含むに至つた。その最初にあらはれたものは「白うるり」であらう。

「白うるり」は吐雲亭天龍の著で、元祿三年七月盡日の自序がある。著者が「卯の花にしろまぬ狹布のさらし哉」を發句とした獨吟歌仙一卷を、言水・我黑・團水・常牧・如泉の五人に

判を乞うて、その點と判詞とを並べかゝげたものであるが、「小相撲」よりも更に一歩を進めて、點者の批言あるものに對しては一々これを反駁して居るのである。例へば

竹筒(きこえ)に生けて歸る朝菊　(脇句)

○　黒曰ク發句夏此脇秋イカヾ

●　評ニ白ク夏也朝日ニ早萎ム夏菊也

言ト牧ト團ト夏ニキケリ泉ム(註、無點の略)ニシテ非(註、批言)ナシ如何

の如き體裁で、黒圈を附した評が卽ち著者の反駁である。かうなるとどつちが批判者の地位にあるのか分らない。天龍は自ら「さりとてむつかしき季をたくみ、きこえまどふ事をこしらへて點者に思ひたがはせ、嘲弄のもととするにはあらず」と辯解しては居るが、それは寧ろ語るに落ちてゐる趣がある。大した惡意でなくとも、少くともこれは點者に對する侮蔑であるにはちがひない。點者たちも面目上默つて居るわけには行くまい。果してこれに對すべく「黒うるり」が出た。團水の「鳴絃之書」に「物見車ニ特牛アリ、白ウルリニ黒ウルリアリ」と見え、又元祿五年の廣益書籍目錄に「一、黒うるり　白うるり評判」とあるのがそれで、その撰者は右の廣益書目にも、阿誰軒の俳書目にも大阪の轍士だとしてある。遺憾ながら「黒うるり」は傳本があるのを知らないので、その內容については全く知る事が出來ない。（別項補記の如く、原稿執筆中偶々寓目する事が出來たので、一〇八頁にはその內容を述べてあるのである。）又「白うるり」にあげられた點者以外の轍士が、傍から差出た事情も明かでない。

附記

一、「小相撲」は横本五册、寛文七丁未曆正月日洛陽東六條三河屋開板。撰者は序文にも署名がなく不詳であるが、その第一卷には桂葉と可全との兩吟百韻一卷があるので、この兩人の撰と思はれる。帝國圖書館藏（零本は他に藏するものもある）。

二、「白うるり」は半紙本一册。題名は自序の終りに「余（中略）いまだ初門のちまたにたゞよふ也。たゞ〳〵此一歌仙を綴て添削を請。テンサク又各別にして其善惡は我も又しらず、故に白うるりなり」とあるによる。早大圖書館藏。

三、「步荒神」は舊酒竹文庫目錄に「步荒神　完一　慶安庚寅」と見えるが、今は佚亡に歸したらしい。しかしなほ嘗てある展覽會の目錄に同書の上卷が山口松香氏の藏、下卷が永田有翠氏の藏として出て居たさうであるから—川西和露氏の示敎—現にどこかに藏されたものがあるだらうと思ふ。

歌仙點取の公表に因由した論戰として、最も知られて居るのは「物見車」對「石車」・「特牛」

の爭ひであらう。「物見車」は加賀田可休の著と言はれて居るが、その序文は元祿三年八月に、柳淵氏歩雲子といふ名で書かれて居る。この歩雲子と可休とは同一人であらうと思はれるが、とにかくその序文に言ふところによれば、嘗て「槿（あさがほ）に黄あり白きあり」といふ七五の句だけあつて、上五文字を缺いた發句を見出したので、かの杜工部が詩の「林花著雨臙脂濕」といふ句の濕字が蝕んで居たのを、東坡・山谷・少游・佛印等が潤・老・嫩・落と補つた故事にならひ、似船・常牧・我黑・晩山・如泉・言水・方山等に上五文字を置いて貰つた。然るにいづれもその心言葉が大きに異つて去就に迷つてゐる折から、或る人が六々の卷を綴つて都鄙の高名な宗匠に點を乞ひ、且つ自ら句意を註したものを持つて居たので、それを見ると批圈に雲泥のちがひがある。それで益々いぶかしく、遂にこの一卷を寫し取つて惣評の註を頭書に加へ、かの或る人をそゝのかして出版せしめたといふのである。

その内容は先づ「三日月のあかきは科ぞ紙鳶」といふ發句以下、歌仙の各句についてその句意を自ら註したものをかゝげ、次に各點者の評點判詞を

三日月のあかきは科ぞ紙鳶

今少云仰（註、言ひおほせ）がたき歟

梅盛判

〻花のもどりの道も菜の花

（下略）

十九點

（奥書略）

三日月のあかきは科ぞ紙鳶

三日月に紙鳶のむすびおもしろく存候さりながらいまだすがたあるべきやうに愚意思はれ申候

長四朱

〻花のもどりの道も菜の花

（下略）

毛錐印二十九句

蘆月庵　似船判

元祿三年五月十日

の如き體裁で一々列擧して居る。而してその點者は京都の梅盛・似船・如泉・言水・常牧　有山・我黑・晩山、江戸の立志・調和・其角・一晶・擧白、伊勢の又玄・團友、大津の尙白、大阪の西鵬(西鶴)・來山・一時軒・萬海・六翁・才麿・西吟、名古屋の荷兮・横船等廿五名に及び、なほ江戸の芭蕉は今粟津の邊に住んで、世の俳諧を批判しないから、又浪花の轍士、壬生の和及は作者の知故だからといふ理由で點を乞うて居ない。隨つて當時のまづ名高い點者はすべて網羅して居ると言へよう。さてかうして名高い宗匠連の點した卷をずらりと公表する事さへ、實は物議を釀すべきであるのに、「物見車」の撰者はこの評點に更に批評を加へたのである。例へば梅盛に對しては

御添削之上奥書之趣令披見候。先以貴叟雖爲古流之師名、當世誹諧之姿不合時故か、句意被聞分候處聊相違在之候段尤存候。併昔も今も正しきは正しく候。又邪なるは致邪候由及承候。然は誤は時替とも人見免申間舗候。第三之點四句目裏の家櫻兩句誹なしを斷無之候事、きそひかりの點、名殘之花言葉とかめ不被致候事、老人暑氣に被草臥候故と御察候。

と、一々批判するまでもないといふ程の悔蔑的態度を見せ、又似船以下の人々には一々頭書に批言を加へ、中には點者に同意をあらはして居る所なども有りはするが、それも要するに點者より更に一段高い批判的態度を以て臨んで居るのである。頭書の批言は、例へば前掲の似船が發句に脇書して點をかけてないのに對し、

發句無點、脇書さして難なきよし也。連誹共に難なき句には點を見ゆるしかくる法也。是一卷の頭なる故也。其覺悟なき人か又失念か。

といひ、言水が第三に長點をかけたのを

第三長點如何、發句にかよふ氣味あり。科に恨のことのがれがたきか。

と難じたりした類で、特に作者は自ら一卷中に難の多い句を加へて、これに批言を加へなかつたり、或は却て點をかけたりした點者に對しては、甚しく揚足をとつてゐる。それは梅盛への批言中にも見えるが、例へば第三の「杖にきる竹の恨は春にして」の恨の字ある難、四句目の「住居を褒むる人のおとなひ」や初裏の十一句目「此眠りいつか忘れむ家櫻」に俳言なき難、「憎む程黑の方勝つ競駈(きそひかり)」の句を馬としたり棊としたりする事などの陷穽を設けて、故意に點者の無識や不注意を捉へようとして居る。

かうした寧ろ隱險な歌仙點取の公表に對して、窃かに憤慨の聲を洩らした點者は少くなかつたらうが、やはり藪蛇に終る事を恐れたものか、誰もこれに應ずるものはなかつた。さうして却つてその點者以外から駁論が試みられた。それは北條團水の「特牛（コトヒツジ）」である。關係者以外の團水がどうしてこの喧嘩を買つて出たかについて、彼は「特牛」のはじめに

予これに答ふる所以は、淵底しらざる者の申しけるは、此度かの惡書に團水を京中判者の内に加へざるは、かねて物見車の作者と密談にて、惡書出て後速かに返答させ、諸人のめざまし草にもせんとたくみて、判斷に省略きたるなりと、所々にて取沙汰ありと告げ知らする者あり。予つくづく思ふに、もしやかの惡人と一味したるやうに人々に思はれ、世にも聞傳へられん事をいたみ、かつは佛神の冥罰の程恐しく、無實の科をいざさらば申開かんとて今書付るが、根本此書の來意といふもの也。

と述べては居るが、實は「物見車」の序文の中に、廿五人と點者を限つた所以は、或は國を隔て緣を求め得なかつたからで、其他の群小點者に至つては木杷（さらへ）の木の葉のやうなものだから、點を求めなかつたと言ふのに憤慨したものらしい。それは「特牛」の中に「惡書の外の宗匠は

314289

さらへの木の葉などゝ惡口したるあき盲目め」と罵倒したり、俳諧修行の爲めに添削を請ふなら、なほ俳老の信德・重德・和及あり、江戸に素堂・嵐雪ありなどと言つて、洩れた點者の名を多く揭げて居るのでも分る。なほ又その師西鶴の爲めに辯じたい點もあつたらしいが、それは西鶴から別に所存がある――「石車」を出す意があつたからである。――と言つて來たので、その點については多く言を費さなかつた。

團水は先づかの「槿に黃あり白きあり」に五文字を置かせた件について、言水・我黑の言に徵して、彼等はそんな事實がないといふ事を述べ、「其主の知らざる事を書付けたるは謀判の罪にひとしき僞ものゝ大惡人なり」と、道德的の批難を浴せ、歌仙點取の批言に對しては、特に「物見車」著者が批難の對象としてあげた十一ヶ條――前にあげた第三恨の字の難や第四句に俳言無きを見過したり、競狩の句意を種々に解したりしたのをさす――について辯駁を試みたのである。例へば三日月の發句に言水が長點をかけたのに對し、「物見車」の著者は「月の科」といふ言葉は發句としては面白くない。「恨」などゝいふ首尾はあつてもよいといふ意の批評をして、言水が句の吟味に疎かな事を難じて居るが、團水は長々とこれを反駁して、科と

いふ首尾が悪い道理、恨というて首尾よき文證を出せと迫つて居る。しかしかうして發句に長點をかけても差支ないと論ずれば、勢ひこれに長點をかけなかつた點者を批難する事にもなるので、團水は惣じて點者が小機の者に對する方便として、攝受弘通のために長點の餌をねぶらせたり、又折伏彈呵のために無點のひねり餅を食はせたりする事がある。即ち各點者の態度の相違によつて、同一句に長點をかけたり無點となつたりするのだと、聊か苦しい言ひ遁れをして居る。しかしとに角十一ヶ條については、一通り條理の立つた駁論を試み、なほ「物見車」の內情を知つて居るものから送つて來たといふ手紙をかゝげて、暗に「物見車」の撰者を威嚇して居る。而してその手紙によれば、頭書したのは實は點者の中に有るといふのだから、この歌仙點取の公表には、反間苦肉的な種々の複雜した事情が伏在して居たものと思はれる。

團水が「特牛」の稿を終つたのは元祿三年十月十四日の夜であつたが、翌元祿四年八月、難波の松魂軒は「石車」を出して更に「物見車」をうつた。松魂軒とは即ち西鶴の假の名である。彼はその序に先づ「物見車」の歌仙點取が、その身の樂しみにした事ではなくて、先達の非をあらはす俳魔の所行だと喝破した。それから朝顏の發句に五文字をつけさせた事につき、

朝顏には黃色はないといふ事を、牽牛・木槿・扶桑の圖を揭げて論じ、ついで

今度物見車の作者同じく頭書せし兩人徒骨折られし褒美に、何がな進上申たしと點者衆所所にて內談あそばしけれども、いまだ花柘榴火の車鏡磨鐵車も出ざれば、爰に千人持の石車を俳諧誠の道に引かけ、是に和歌三神も乘移り給ひ、物見車を跡へも先へもやらず、落花微塵に打碎きぬ。

と題號の由來を記し、且つ進上物の目錄をあげて西鶴らしい趣向をこらして居る。その論駁の體裁は、「物見車」の歌仙の一句每に、點者の評あるものは一々それを記してこれを比較論評し、更に頭書について反駁を加へてゐる。即ちこの書は「特牛」よりも更に精細に、「物見車」の全部に亙つて痛擊を試みたのである。今その論駁の一例として、

此眠りいつか忘れん家櫻

に俳言なしとの批言をしなかつたといふ「物見車」の批言、並びに頭書に對して、その各點者に對する不公平な態度を難じ、特に西鶴自身の評に加へられた

家櫻無點　脇にありしは菜の花なりとや。花の戻りの道も、又菜の花といふ事をえきかざ

るにや。よしなき脇書あらむよりは、此櫻俳言よわしと書たし。

といふ言葉に對する論難をあげると、

△頭書の者に云、此櫻俳言なしと書きたしとは、汝誰に見習ひて俳言なしとはなまぬるし。一時軒俳言なしとの脇書同心也。俳言なき句を俳言よわしとはいかに。

△此頭書せし者外に目一人あるよと思ひしに、評書にて俳諧の作者が頭書も、おのれが心にまかす所あらはれたり。子細は自然と魂より出る所の見えすき、脇句同じ菜の花とかさねて正花に聞かせ、此脇句が木花草花の二花に分る事やと評判すべき種に、態と拵へたる句を西鵬に見出されて、是非なく點の以後裏表に分別しかへたるを見違し也。其證據を聞けよ。（中略）

△汝ども俳諧の事にては中々合點ゆくまじ。耳近き事にて云ひ聞すべし。昔大佛のほとりに晝は寢て夜を晝にして、京の圖はづれなる男あり。根元牢人なる町屋住居してありながら、無用の金鍔立髪目立て、蛇の鮨の擡右衞門と異名をつけ、辻喧嘩かるた遊び、萬の買掛りすます事嫌ひ人請に立ち、ある時烏羽田に出て道鴨を盗み取せしが、此事あらはれて外の

僉議なしに、只一つ烏盗人の科にして所を追拂はれける也。是に同じ。たとへば人の女房を去るにも、さま〴〵の惡事は言はずに、とかく相性の惡ければ是非なしと親里へ送りす、ますに、此俳諧の脇書もかはる事なし。正花いたさぬ非言一つにて、外の事はあらましに見捨て給へるとしれたり。正花の改めは脇の句の所にして、こまかに書付け見せければ、又爰にて書くに及ばぬ也。

といふやうな浮世草子もどきの筆致で、縱横に敵の論を言ひまくつて居る。而してその說破する所、主として西鶴自身の評點に關する辯護にあつたことは言ふ迄もなく、且つ「物見車」の作者が廿五人の點者中のある者と結託して居る事を、暗々裏に深く詰つて居る。その論は往々牽强に過ぎ、「物見車」の說に却つて理があると思はれるものもないではない。しかし何にせよ彼の當る所なき盛んな筆力である。その一となでには誠に「物見車」を打碎いてしまふ程の勢ひがあつた。

「石車」の序文によれば、「特牛」に引きつゞいて「竹の根鞭」といふ返答が出る筈であつたらしく、その書が出たら又「新鍬」といふ題號の書物で、これを攻擊する豫定であつたと思は

れる。勿論「竹の根鞭」は「物見車」側の人によつて、「新鍬」は恐らく西鶴自身によつて、筆を執らるべきであつたらうが、可休一派の沈默によつて、この二書は遂に世にあらはれずして終つたらしい。ともあれこの論戰は、浮世草子に轉じて以來、あまり俳壇との交渉を持たなかつた西鶴をして、再び俳人としての興奮をかなり強く覺えさせた事件として、特に面白く感ぜられるのである。

附記

一、「物見車」は半紙本五册　刊記はないが、「特牛」に「比は元祿三年庚午九月下旬より俳諧物見車といふ書一部五卷洛中に披露して」とあるから、當時の出板たる事は明かで、二條通寺町西上入本屋半兵衞開板。著者は元祿十五年刊「花見車」に

加賀田河内　可休

北むき

あけくれ鏡に向ひて我ひとり自慢するのみ歟、國々の君たちの害になる事を仕出かしたるむくいに、交る者なし。唐へゆかれたがまし。

○物見車　こんな手形はいらぬとて親方はうけとらず。

とあり、阿誰軒の俳書目にも「物見車　四册　可休作」とある。又「鳴絃之書」には「先年ノ物見車ノ作者ハ加賀田可休トイフ者也（中略）。此可休モ鳴呼ノ者ニテ誹諧隨分ノ作者ナリシガ、已レガ利口ニ迷ヒテ自讃毀他ノ書ヲ作セショリ、交リヲ絶タレシ也。然レドモ其器人ニ超エタレバ、此人ニシテ此病ヲ訪フ者モアリトカヤ」とある。「京羽二重」によれば五條御幸町東へ入に住んで居た俳諧師だとある。その外に傳記について徵すべきものはない。

二、「特牛」は半紙本一册。題簽には

俳諧　物見車　返答　特牛　圖水　全

とある。寺町通二條上ル町いつゝや庄兵衞板。藤井紫影博士藏以外に完本のあるのを知らぬ。竹冷文庫にも一本あるが落丁本である。（藤井本はのち著者に贈られて今著者の藏。）

三、「石車」は半紙本四册。元祿四辛未歲中秋、京都上村平左衞門、江府萬屋清兵衞、大阪壽善堂の版。繪入でその繪は西鶴の筆だと言はれてゐる。帝國圖書館藏。

「歌仙點取を評したものには、なほ前にあげた「白うるり」についで「黑うるり」があつた。この書は原本には著者の名は明記してないが、阿誰軒の俳書目錄にも元祿五年の廣益書籍目錄にも、共に轍士の作となつて居る。卷末に「元祿三午秋」とあるから、「白うるり」開板後引つづいて出版されたものと思はれる。その內容は必しも「白うるり」の評を反駁したものでなく、寧ろ「白うるり」よりももつと公平な立場で、點者の評點と「白うるり」撰者の評とを批判し

て居るといふ形である。隨つて特に論戰といふ程のものではないが、とにかくかうした點取公表は、一時の流行を來したものと見えて、「白うるり」・「黑うるり」と殆んど時を同じくして、又別に「かつら河」といふ同種の書が出た。この書は元祿三年九月、重賴門の神田正春が撰んだもので、撰者の作になる歌仙の首尾各六句に加へられた言水　常牧・如泉・我點・團水　方山・只丸・好春・似船・千春・和及・春澄十二人の點と判詞とを掲げてある。その序にはやはり

今の世の點者衆へ遣し見るに、こなたにて勝たる句かしこにては負け、かれこれ合しては點なき句もなし。これこそ初心のよき稽古也、とてもの事に此道の功者と人も許し置く衆中へ遣し見んと、田舍より來るよしにて遣し候に、云々

と言つて、明かに點者の見識を試みてみようとする意圖が、ほのめかされて居る。但しこれは點者の評點については、何等の批評をも加へて居ないので、論爭の種とはならなかつた。

〔補記〕

「黑うるり」は原稿執筆中、偶々金澤市の縣立圖書館で開催された古俳書展覽會に出陳されて居るのを見、その大要を知る事が出來たが、當時なほ展覽中であつた爲、具體的にその內容を示す事が出來なかつた。今さきにあげた脇句に對する評をあげて、その一斑を示さう。

竹筒に生けて歸る朝菊　如泉ム　我黑ヒ　團水し　常牧し　言水し

〔發句夏此脇秋いかゞ

○作者（註、「白うるり」の作者をさす）曰、夏也朝日にはやく萎ム夏菊也。言ト牧ト團ト夏に聞り。泉ムニシテ非ナシ如何。

○評曰（註、以下「黑うるり」著者の評である）、此脇仕かけもの也。しれたる夏草の石竹百合をさし置て、朝菊と出せしは點者の愚眼を見るべきため也。其證據には作者は季をしればこそ朝菊は夏のものと評に書申分あるまじ。此奧書にむつかしき季をたくみて聞まとふ事をこしらへるにはあらずといふそれには相違也。我黑朝菊を秋に聞て評判せられ口惜かるべし。朝菊は高麗菊ともいへり、夏の花也。如泉點なく脇書もせず捨られしは不埒なり。團水常牧言水三人は片點づゝかけてこれも脇書なし。此脇けしき計に仕たて何の意味なし。此朝きく鹽入ぬ膾の見に置るごとし。

發句賤しき里女の布をさらせる心に付よらば、只何となく折捨菊さも有べし。筒に生て歸るまでは有まじ。但東の果までも茶の湯者はありぬべし、布瀑す人は人、脇から花筒提て見る人は人か。此ふたつの所判者脇書にあるべき義なり。とかふ筆にものいはせて埒のあくやうにしたまへ。せつか

く點とりてもこんな事なれば、わけは京へのぼしても何の詮なし。（註、「わけは京に上つて」といふ諺に言掛けたのである。）

此の種のものでなほ述ぶべきは、寶永三年に出た歌仙點取の一書である。この書は題簽剝落して、その題名を詳にする事が出來ないが、點取公表の手段として最も惡竦を極めたものであつた。これは仙木・友水・萬山・重友といふ者どもが歌仙一卷をつゞり、「白うるり」の點者に點を乞ひ、その中常牧と和及とはもう故人になつて居るからといふので、新たに鞭石・晩山の二人を加へ、更に此度京都で貞德嫡傳四世貞億と名告る未練の宗匠が居るから、これに試みに點させて見ようと一卷を遣し、その評點を刊行して批難を加へたものである。その序文に言ふ所によれば、七人の點を披露して見ると、卅六句の内卅五句非言、付墨は一句だけであつたために、貞億の點を見ると指合は僅か二三で、點十長二までである。それは全く四季の詞をさへ知らぬためであつて、一句三錢の點料を取るなどは鳩のかい賣僧だと罵つて居る。而してその評點についての批難はどうかといふに、まづ發句と脇とに對する批難を原文のまゝに示すと、

〈青首も鴛も涼しや月の霜
〈錢の奴（ヤッコ）の綱貫の音

● 夏ノ發句ニ冬ノ脇ヲ附ル法アリヤ。脇句ニ點ヲカケシ事イカニ。察スルニ鴛霜ナド、有故ニ冬ノ發句ト思ヒシヨナ。御傘鴛鴨等ノ冬ノ物モ涼シキト云詞ヲ添レバ夏也ト有ヲ知ヌカ。此霜ハ夏ソ月ノサエタルヲ云フ。月照ニ平沙（セヘヲ）夏夜霜ト云ニ同ジ。仍テ新式ニ夏ノ詞入テハ不可ニ降物ートノ文御傘ニモ出サレタリ。是デモ貞德嫡傳四世ト肩書スルヤ。耻シラズトハ誰コトソ。

以下句毎に點あるものについて、右のやうに難じてゐる。しかも實は孟宗竹の子、富士の初雪、秋過ぎて等季の所屬を誤り易いやうな句を特に出して、その揚足取をやつたり、天穿の故事、菩提子、花ぬりのうつぼ等故事の解し難い句を作つて、點者の無學を嗤つたりしてゐるものが多い。要するにこの歌仙一卷は、點者を苦しませるため故意に作つたもので、その點では最も惡竦を極めて居ると言へよう。序文に七人の點者に遣したなどゝ言つて居るのも恐くは假託で、實は貞億だけに點をさせて、かうした難書を出したものと思はれる。これに對して貞億が反駁を試みたか否かは分らない。

ともあれかうした點者いちめが、元祿初年から寶永頃に至るまで、屢々行はれて居た事は事實で、こゝに述べた以外なほこの種の書は多く刊行された事だらうと思ふ。又刊行までしなくとも、點者の評點に作者自ら批言を附して、これを人々に示したりした類は更に數多い事であつたらう。嘗て渡邊霞亭氏が紹介した西鶴の評點に、作者山太郎――勿論これは假名であらう。――が自ら朱で批難を加へて居る如きは、即ちその一例である。要するに點取の公表は、最初は單に一種の惡戯氣分から行はれたのかもしれないが、漸く惡用される樣になり、果ては點者が窃かにこれに加はつて、反間苦肉の策を弄しつゝ互に排擠の具に供するに至つたのである。

附記

一、「黑うるり」は半紙本一册、殿田良作氏藏。出版書肆名なし。

二、「桂川」は半紙本一册　角田竹涼氏藏。今同氏紹介による。

三、寶永三年の歌仙點取は半紙本一册。刊記は「暮秋下旬」とあるのみだが、序に「寶永三のとし菊月のすゑ」と識してある。大坂高麗橋筋鳩之町　和泉屋九郎左衞門板。川西和露氏藏。

四、西鶴評點に山太郎が批言を加へたものは、かつて大阪朝日新聞所載「一日一文」欄に紹介された。例へば第三「高照らす角屋の軒端月釣りて」を、西鶴が「月落ちて」と直して、「珍重々々御一句第三體に存候」と評して居るのに對して、山太郎は「この句月落ると直し申候、落ると致しては一句殊の外惡しく候。月落るとは月の更行くに傾く事を申候。月を釣りといふは李白が詩に獨上二西樓一月如鈎と作り申候。それを取り申候。西鶴文盲故と存候」と駁してゐる。

八

元祿三年六月、爪木晩山が撰んだ「千世の古道」に對し、元祿五年の春に至り、「山太郎」といふ書を出して、これを論難したものがあつた。遺憾ながら右の二書は共になほ寓目する事が出來ないが、「山太郎」に返答した「獏物語」によつて、ほゞその內容は知ることが出來る。即ち「千世の古道」は晩山が、一嘯・秋水・正興・政要・芦舟・粲道・遙廻・玄利　茂山・東河・石柱等の門人と共に

名月は見に行く里もなかりけり　晩山

を發句とした本式百韻一卷と、一翠・晩山の漢和一卷とを收めて出したものと思はれる。「山太郎」はこれを殆んど一句毎に難じ、且つ二十ケ條の目錄をあげて晩山を誹謗したもので、そ

の著者は明かでないが、「獏物語」によれば夢助――勿論これは假名であるが――と稱し、且つ隨流の門人であると言つて居る。――「永代記返答あらむつかし」に、隨流の門で洛東鷲峯の僧文瓜が「夢物語」といふ批言の書を著はした事が見える。「夢物語」も「山太郎」も共に未見の書であるから、單に推定にとゞまるが、同じく隨流の門人だとすると、兩者の間には何かの關係があつたのではあるまいか。――とにかく晩山一派の人々に、反感を持つて居た人の所行にはちがひない。この「山太郎」に對して返答したのが「獏物語」であつた。

「獏物語」は晩山の門人吉川石柱の名で――俳家大系圖には石柱を晩山の祕號かと疑つて居るが、石柱は現に本式百韻の中にも加はつてゐる門人で、晩山と同一人ではない。勿論晩山が弟子の名で、自らの論をやつてゐるには違ひなからうが、――元祿五年三月に出版された。惡夢を食ふの意で題號は名づけられたのである。その冒頭に崑山集對馬鹿集の論戰以下多少の史的敍述を試みてゐるのは、論戰史研究に資する所が多い。ついで「山太郎」にあげた二十ヶ條の論難に對して反駁を加へた。その態度は頗る高飛車で、且つ極端な惡口雜言を浴びせかけて居る。例へば至る所貞德の傳書といふ如きものを振り翳して、或は三つ物の來歷・撰號の古實を說き、或は俳諧の字義・賦物の法を述べ、特に本式百韻の法については最も詳細に記して、貞德自筆の一通まで示した。これは「山太郎」返答として最も重要な點であつたからであらう。隨つて本書は論戰書たると共に、又一種の故實作法書たる性質をも持つて居るのである。かうして二十ヶ條の反駁を終へた後、更に百韻と漢和に對する批言の返答を試み、こゝにも亦典侍の名義を考證したり、笙や星の講釋をやつたりして、大いに敵を威嚇した。加之「あの侫人め、おのれをやがて三枚におろして鱧たゝくやうに料理すべし」とか、甚しきは「人を誹謗の大惡人下にはおかれず、粟田山の木のまたにつりさげたし」とまで罵つてゐるのである。その興奮ぶりはそゞろにかの「破邪顯正」時代の俤を見る事が出來る。但しその反駁はほゞ敵の急所を衝き、筆鋒鋭く迫つて居る。例へば

恨書櫛笥の蓋の淺らくて　山

夢助がいふ、虫に（註、前句「迷ひ侘つゝ虫の音を撰（ヨル）」）櫛を付たりと。夢助が智の程淺過て恨かく非言こそはおかしけれ。今は道具によらず、只心を以付る也。此句心付也。しらずはだまつて居よ。

小石疉櫨の木のはら　利

夢助が誣言に、小石つまくるとは珠數の事か、又小石を塔と重ねる事か、えこぜぬ句也と云しは、扨扨文盲不埒の夢助やな。疇（ツマツク）といふ字をしらぬか。かなつけてもよめぬは淺間し。但し目が見へぬはつまづきたるか。

の如きで、概して「山太郎」の撰者は、いさゝかその批言が當を得ず、かつ愼重を缺いて居たやうである。隨つて「獏物語」の著者にひとり名をなさしめた概がある。

「千世の古道」を發端としたこの論戰は、その範圍は晩山對所謂夢助にとゞまり、俳壇の一般に關する所は少かつたやうであるが、例の論客として隨流にも匹敵すべき轍士は、これにもまた「世のため」と題する評判書を出した。それは阿誰軒俳書目に記されて居る事だが、遺憾ながらこれも原本の傳存するものを知らない。

附記

一、傳本を知らないものは阿誰軒の俳書目だけ左に拔抄しておく。

千世の古道　一札　元祿三年六月五日　晩山作

山太郎　一冊　元祿五年春　千世古道ノ訛言邪書也

世のため　一冊　元祿五年春山太郎評判　轍士作

なほ「獏物語」によれば「山太郎」の外題には「誹諧山太郎京大坂點者評判千世の古道評判」と書いてあり、元祿三年七月から思ひ立つて人々を語らひ作つたと言つてゐるが、實は元祿五年正月十四日に出來たのだと言つてゐる。又夢助は當時建仁寺門前鶴林の邊に住んだ法師であるといふ。

二、「獏物語」は半紙本一冊。題簽には

俳諧獏物語　山太郎返答　石柱作

とある。跋文に「元祿五壬申歳季春上旬、晩山門第吉川石柱述」と識す。井筒屋庄兵衞板。

九

およそ俳書として趣向を凝らしたものも數多いが、その最も奇拔な一つは元祿十五年に出た「花見車」であらう。この書は當時の名有る俳人を、すべて太夫に見立て、これを縱横に品隲したものである。例へば

太夫　其角

松尾屋の内にて（註、芭蕉門下中で）第一の太夫也。琴（註、漢文漢和の事）三味線（註、和歌の事）小歌（註、佛學）でもとりしめて習はんした事はなけれども、生れついて器用な所があつて小袖の模樣髪つきまでも、作り出せる程の事にいやなはなし。（下略）

の如き體裁で、都鄙に亙り百數十名の宗匠を遊女扱ひにしたので、その見立ては頗る氣がきいて居る。しかし太夫の位にすわらされたり、好評を受けたものこそは、その遊女扱ひにも決して腹は立てはしなかつたらうが、天神ならまだしも、北向・局女郎などに擬せられ、或は太夫・天神にしても惡評を受けた者などは、恐らく窃かに額に青筋を立てゝ居たことだらう。しかも「花見車」の著者はもとより匿名でこれを公にしたのである。慣慨した點者もその慣慨のやり場所をどこへ持つて行つて宜いか分らぬ者も、蓋し少くはなかつたらう。それだけ又いら〳〵したにもちがひない。勿論少し裏面の事情に通ずる者は著者の見當がつかぬでもなかつたが、遊女の見立てに正面から名告りを上げてかゝるのも大人氣ないと思つたか、すべての點者が表面ではこれを默殺した形であつた。だが只一人その中に野暮な反駁を試みた者があつた。それは北條團水である。

團水が「花見車」に向けた矢は「鳴絃之書」であつた。その出版年代は明記してないが、「花見車」の出た後多くの時日を經ては居なかつたらうと思ふ。「鳴絃」とは野狐に等しい「花見車」の著者の狂暴を加持するの意である。而して彼はその「花見車」の作者が轍士であるといふ事を發いた。恐らく「鳴絃之書」の出された動機も、團水が「花見車」で天神にしか見立てられなかつたといふ不滿よりも、轍士に對する個人的感情にあつたのであらう。果せるかな「鳴絃之書」の中には、團水が轍士を諸方に紹介して世話してやつた內輪の事情までを縷說して、その不遜の態度を暗になじつて居るのである。――言ひ後れたが「花見車」では轍士はもとより太夫で、しかも最も評判がよいのである。――しかし勿論團水も表面はそんな事で、轍士を攻擊して居るのではない。「花見車」の誤や不當な事十一ヶ條を列擧して、「已上十一ヶ條難問返答サアギツトモ云テ見ヨ」と見えを切つては居るのだが、その言ふ所は書院を所院と書いたとか、合類節用集より外の學問はないとか、序文に元祿十五年の春壬生の大念佛があつたといつて居るが、今年の春壬生の念佛はなかつたとかいふやうな事が、その一ヶ條にあげられて居るので、以てその大概が知られよう。結局これは「花見車」そのものに對するよりも、轍士その

人に對する批難であつたからである。元來園水は西鶴の弟子ではあるが、その浮世草子を見ても、妙に生眞面目で洒脫味に乏しい。「鳴絃之書」の如きも畢竟野暮な反駁といふ外はあるまい。とにかく「花見車」の如きは、いつの世にも大向ふの喝采を博すべき性質のものである。それを正面から非禮呼はりして、轍士の人格を難じたのでは、實は相撲にならないのであつた。かくしてこの論戰は「鳴絃之書」の存在すらも、あまり世に知られない程度で終つた。

附記

一、「花見車」は半紙本四册、元祿十五年三月、井筒屋庄兵衞板。

二、「鳴絃之書」は半紙本一册、題簽には「花見車評判　鳴絃之書　園水　全」とある。刊記はないが元祿十五年中たる事は內容で明かである。著者は園水の推測の通り轍士にちがひない。米仲の「觚隨筆」(寶曆九年刊)にも轍士の作だといひ、其角の手紙をその參考にあげて居る。

一〇

元祿頃の論戰としては、なほ阿誰軒の俳書目錄や元祿五年の廣益書籍目錄によれば、前にあげた「虛栗」の批言「貞德槌」の外、鬼貫の――「花見車」によれば宗旦の撰――「西瓜三ッ」に對して、京都の佐竹直親がその返事「誹諧水纖」を出して居り、又元祿五年の歲旦帖を選んで批言したといふ「木鐸」と題する書もある。しかし以上の諸書はいづれも未見であるために、その內容經緯について述べる事が出來ない。定宗撰の「新行事板」(元祿四年)も、その題名から察する時は、論戰に關するものであらうと思はれるが、同じく傳本を知らない。

蕉門にあつては流石は他門との拮抗や、同門間の忌はしい勢力爭ひは、比較的少かつた。特に芭蕉在世の間は、殆んどさうした種類の俳書を見る事は出來なかつた。芭蕉の歿後許六・支考の二人が、しきりと言說を樹つるに及んで、漸く論爭の端を發いたが、しかも許六と去來との應酬の如き、「旅寢論」(一名「湖東問答」。許六・李由共撰の「篇突」に對する難陳である)にせよ「靑根が峯」中の問答にせよ、いづれもなほ君子の爭ひである。實は正しい意味に於て、これらをこそ眞の論戰と言ふべきであらうが、これまで所謂論戰として述べて來たものは、すべて正面からの衝突であつた。去來對許六乃至去來對其角の難陳辯駁などは、その意味に於いてはまだ論戰とまでには至つて居ない。許六對野坡の「雅文消息」の如きも、互ひに意見の相

違を述べ合つて居るといふに止つて居る。許六にやゝ高壓的な言葉は見られるが、總じて穩やかな態度である。然るに支考に至つては、その人物が名利の念に富み衒氣に滿ちてゐたゞけに、論戰の態度も頗る下品であつた。彼が第一に衝突したのは名古屋の露川とであつた。それは享保六年に露川が北越地方を行脚して、旅中支考とも會し、翌七年「北國曲（ブリ）」といふ大部の撰集を撰んだ事に原因してゐるので、即ち支考は露川が北越地方に於ける自分の勢力圏を侵した事を憤慨したのである。よつて彼は享保八年八月十二日「口狀」一札を草して露川に送つた。世に所謂「露川責」である。

此度三越の先々にて折本の名目傳とて、故翁の俳諧を證句に引れ候。三四ヶ所にて見申候へば中の切挨拶の切の外は一句も蕉門の用にあらで、却而俳諧の害なるよし云々

といふやうな事に筆を起し、要するに露川が蕉門の直旨を知らずして、濫りに自己の作り事で芭蕉を賣り歩くのは不屈だから、前非を悔いて支考自身に入門せよといふ意で、手嚴しく責め立てたのである。露川はこれに對して翌九年二月「合楔（アヒクサビ）」を草して答へた。これは森長といふ匿名で書かれてゐるが、露川自身の返答たる事はいふまでもない。支考の難詰に對して一々辯駁をしたので、なほ支考がかゝる口狀を送るに至つたのは、露川の北越行脚によつて、支考の門人達が動搖したのによるのだと實情を發いて、暗に衆望が支考を去つて露川に歸しつゝある事をほのめかした。辯駁としては十分に條理を盡したものであるが、支考は「露川責」だけですでに溜飲をさげ、若しくは露川威嚇の功を奏したと認めたものか、「合楔」に對しては再び答へる所なくして終つた。

支考と激しい論戰を交へた今一人は越人であつた。越人はその俳諧の技倆はともかくも、名古屋に於ける蕉門の故老である。元祿末年から正德初年にかけては、俳壇的活動が少かつたが、享保頃からまた盛んに俳書を撰び、門人を擁して、眞に蕉門故老たるの勢力を示して來た。隨つてこゝに支考や露川との衝突も、また免れがたい事であつたらう。而してその火蓋はまづ越人の方から切られた。「俳諧不猫蛇」がそれである。この書は支考の「俳諧十論」を主として難破したもので、その執筆した年代は明かでない。正德四五年の頃と言はれるけれども、その中に支考と露川との確執を記し、かつ本書の返答「削りかけの返事」に「享保申のとし正月」とあるのは、享保戊申十三年の事と思はれるから、恐らくその前年享保十二年の翁遠忌正當日に

擱筆したものであらう。その内容は「十論」の各條を逐うて、一々これを論難して居るのであるが、彼の撰集「鵲尾冠」や「庭竈」等に徵しても判る通り、かの儒佛二道の蘊蓄をかなり衒學的にふりまはす癖を發揮して、堂々たる論陣を張つて居る。しかし姿情論の考へ方が全く反對であると指摘したり、法式論の僞妄を論破したりした外は、その論點がいづれも敵の核心に深く觸れてゐない憾みが多い。寧ろ支考が名利の爲に種々の術策を弄した、所謂裏面の素破抜きに多くの興味が感ぜられ、當の相手たる支考もまたそこに大分の痛手があつた事と思はれる。すなはち支考が芭蕉に入門當時の事情から、芭蕉殁後東山に碑を建てたり、追善をやつたりした賣名手段、續猿蓑・廿五ヶ條などが悉く支考の僞作である事などを詳しく述べて居るのである。特に支考が越人を芭蕉勘當の門人だと言ひふらした事については、越人を煙たく思つたからだと辯明して居る。蓋し越人がこの書を草するに至つた動機も、多くは勘當門人說の流布に憤慨した事にあつたのだらう。しかし終りに露川にも攻擊の戈を向けて、芭蕉にない事を言ふのは支考と同樣だといつて詰つて居るのは、名古屋に於ける自家の地位擁護たる意味を多分に含んでゐた事は言ふまでもない。

支考はこれに對して享保の申の年――前述の如く戊申十三年と思はれる――正月、「倒かけの返事」を尾城下蕉門御連中樣宛で送つた。これは越人が正面から大上段に振り翳した太刀を、輕く扇であしらつて逃げたやうな態度で、頗る人を食つた返答であつた。「十論十段の眞僞は道德の二篇より、虛實の事、姿情の事、まして變化の決論にいたりて、あるは見違へ間違へ、或は文義不呑込にて、一字も返答取所なし」といふ調子で、十論の攻擊はてんで相手にせず、內輪の素破抜きに對してのみ辯駁をした。卽ち芭蕉に對面した年月から、續猿蓑の僞撰でない事等の類を述べ、なほ越人が路通の事をあしざまに言つた爲に、芭蕉の不興を買うた事實を、逆に素破抜いて居る。越人はこれに對し享保十四年七月、更に「猪の早太」を以て應じた。支考が「倒かけの返事」に專ら越人の指摘した事實を打消したので、この「猪の早太」も亦十論攻擊の如き抽象論に亙らず、支考の打消した事實の反駁に努めた。而して支考・越人の言ふ所、もとよりいづれも自家に都合よく事實を解釋し附會して居るのであるが、その欺瞞は支考により多く、その眞實は越人により多いと認められる。しかも支考の老獪は、越人の力一杯の論鋒を巧に外して、傲然と空嘯いて居るさまがあつた。だが支考もこの頃から病がちになり、越人

も亦享保の末に殁したらしいので、二人の論爭も「猪の早太」を最後にして終つた。蕉門にあつてはとまれ最も著しい論戰ではあつたが、畢竟それも基く所は繩張爭ひにあつた。決して正々堂々たる主義主張の戰ひとは言へない。だからこそ流石に彼等もこれらの論戰書を公刊するまでに至らずして、「露川賣」以下の諸書がすべて寫本として傳はつて居るのであらう。

一

享保以後俳壇に於ける論戰は暫くあとを絶つた形がある。これは享保末年から所謂天明俳壇の新時代に至る迄の間は、かの延寶末年から天和貞享に至るまでの時代と同じく、墮落し行詰つた俳壇が、更に新しい何ものかを生まうとする內部的の惱みに動いて居たからでもあつたらう。しかしその間にもとより勢力爭ひや、感情上の小ぜりあひがないのではなかつた。しかしその多くは論戰書などゝして殘される事なく、潛行的に終つたやうである。只一つ延享三年に出された「延享二十歌仙」をもとゝした、雪門對江戸座の長い間の論爭が、寶曆以後の俳壇を賑はゝせた。それは蓼太が「延享二十歌仙」を批議した「俳諧雪おろし」に端を發し、江戸座の雁宕が「蓼すり古義」を以てこれを迎へ、爾來蓼太側から「遲八刻」、雁宕側から「俳諧一字般若」の應酬があり、更に第三者の立場からこれを評した「誹諧三十棒」や「若葉合」——假題——等が出た。その賑かなさまは恰も「中庸姿」・「破邪顯正」時代のやうな趣きがあつた。なほちひさい論爭としては千梅の「箋縮輪」（寶曆三年刊）に補正を加へた石橋の「誹諧糸切齒」（寶曆十二年）に對して、千梅の門人達が「燒大根」（寶曆十三年）を出して應じたものがあつたり、康工の「金花傳」を評した百明の「讀金花傳鄙言」があつたり、又田翁が「當勸帖」・「傍杖志」等といふものもあつたといふ。さらに下つて所謂天保時代に入つては、かの天來と梅室との論爭に端を發した名高い七草戰があつた。即ち天保十二年正月、春秋園主人天來が梅室との難問を「誹諧七草」と題して出してから、忽ち俳壇に大きなセンセーションをまき起し、その年から翌天保十三年までにかけて「霽々志」・「俳諧春の田」・「俳諧磯の波」・「葉分の風」・「梅林茶談」等の書が相ついで出で、喧々囂々の論を鬪はせた一件である。しかしこれらの事については、すべて他日天明時代以後の俳諧論戰史として、更に稿を新たにして述べる事とし、今は姑く元祿時代までの論戰に筆をとゞめておきたいと思ふ。

（昭和四年十一月）

〔補記〕

蕉風以後の論爭としては、なほ其角の洒落俳諧の一體を難じた「黃楊枕」に對して、浮生の「滑稽惑原俳論」が出たり、又享保末年菊岡沾凉と貴志沾洲とが「綾錦」を中心として「親鶯」と「烏山彦」とに論戰を交へたりした事があつた。降つて寶曆以後に至つては、蓼太對雁宕の論戰以外に、建部涼袋の片歌說に對する論難攻擊が一時俳壇を賑はせた。その最初に出たのは無住坊の「華月一夜論」(明和二年十月刊)であらう。これに對して綾足は、「とはし草」(明和七年九月刊)の卷末に極めて傲慢な態度で答へた。かくて「こだま草」(明和八年夏刊)・「いばほ草」(明和八年九月刊)・「類玄翁」(明和九年二月刊)等が入亂れて論を戰はした。なほこれらの論戰については、改造社版「俳句講座」の爲に執筆した「天明以後の論爭と俳論」の中にやゝ詳しく述べる事にした。又同講座所載の拙稿「貞門・談林の論爭と俳論」をも參照されたい。

〔追補記〕

隨流の「破邪顯正」に對して「誹諧破邪顯正返答之評判」――これを繼に「行事板」としたのは誤であつた(七三頁)。附記に疑つておいた通り、「行事板」の題名は後人の誤記にすぎない。題簽の完備した本によつて前記の題名が正しい事が明かにされた。「行事板」といふのは恐らく別書であらう。――が延寶八年三月に出た。著者は明かでない。これは實質的には談林風の辯護であるよりは、却つて惟中の獨吟に對する批難であつた。それに應じて惟中は直ちに同年三月下旬「百韻自註」の反駁を出した。右の事はすでに七三・七四頁に述べた所であるが、その後なほ惟中の「百韻自註」に對して更に返答した一書がある事を知つた。それは「誹備前海月破邪顯正返答之評判」と長々しく題したもので、「延寶八庚申歲中夏日　難波津散人書」と奥書がある。(半紙本一册、「大坂伏見呉服町　書林深江屋太郎兵衞板行」とある。)難波津散人とは勿論「破邪顯正返答之評判」の著者と同一人で、「百韻自註」が出ると僅かに一ケ月の後、又もこれに應じたわけである。「備前海月」の題號は惟中が備前の出であるのに因んだので、駁論といつてもその主眼は惟中に對する人身攻擊にあつた。「大坂には人もなく、其方一人のやうに匐(ハシリ)、殊に人のまよひなる事を言ひろげらる

ゝにより」とか、「汝書籍の題號など尻頭となく多く覺へ、又礫文字のはしゞれを集て、己智ありとたかぶり、學文ありとのゝしり」などと言つて居るのでも、惟中の衒學ぶりに對する反感の烈しさが窺はれる。だから惟中が道修町邊で伊勢物語の講義をしたのに、清濁の誤が多くて日頃の荒言にも似なかつたといふやうな話まで暴露して居る。肝腎の惟中獨吟に對する批難や辯駁は、結局水掛論か泥試合と見る外はないのである。しかし當時惟中の自家宣傳的な行動が、同門の間に快からず思はれ、談林對貞門の論爭から同門の反目を孤生した事實として面白い。

晩山の「千世の古道」に對して「山太郎」といふ論難の書が出、更に後者に返答した「獏物語」があつた事は一一三頁以下に述べた。その中「千世の古道」はなほ寓目するに至らないが、「山太郎」はその原本に接する事が出來た。原題簽を缺くが內題には「京大坂俳諧山獺評判　附古實古傳」とあつて、「問ス語」と題した自序がある。ある古金店で偶〻「千世之古道本式百韻晩山撰」と外題のある本を見、本式とは祕藏の重寶かなと思つて買つて歸つた。讀んで見るとあまりに誤が甚しいので筆を執つたといふので、「于時元祿四辛未龍集初冬某日　曉ノ夢助直誌」と識してある。そして七種立題の事・撰號に古實ある事・堂號庵號を附に子細ある事等以下二十ケ條に亘つて說いて居るが、中には「千世の古道」に對する批言といふよりは、單に自家の口傳法式に通ずる事を吹聽したと見られる點が多く、最も眼目たる本式に關する說にしても、本式は連歌に限るもので俳諧にはない事だといふ如き固陋な見をとつて居る。又晩山の百韻の各句に對する評もむしろ毛を吹いて疵を求めるやうなあら探しである。著者はしきりに自分は田舍者だと言つて居るが、「第七、宗匠といふ事」の條の中に「只今都に貞德翁の流れを汲みしは、西武か門第に松月庵隨流とやらんは、西武存生のうちより誹の批點の許免を得て、（中略）今誹の點者にては隨流・貞恕ノ外手筋たる點者は聞及はず」と隨流を頗る推重して居る。だから「獏物語」の著者が言つてゐる通り、夢助とは恐らく隨流門下の誰かの匿名であらう。かつて「破邪顯正」であの華やかな論戰の火蓋をきつた隨流の一門に、かうした弟子があるのも偶然ではない。それにしても「山獺」の著作動機には、何かやはり自家宣傳の不純なものが感ぜられ、それだけ「獏物語」の應酬も當然に首肯される。なほ「山獺」には「千世の古道」の

序文も錄されて居り、「于時元祿みつのとし庚午中夏下旬　吟花堂自序」とあるので、本式百韻は卽ち元祿三年五月に興行されたものである。

蕉風以後の論爭については拙著『俳諧史論考』（昭和十一年刊）中の「續俳諧論戰史」で別に詳しく說いた。

維舟と立圃との確執

維舟と立圃は共に貞門の高足である。彼に「毛吹草」の撰があれば、此に「花火草」の著がある。一が「犬子集」を編めば、他は「發句帳」を輯めた。その他維舟には懷子・小夜中山・時世粧・武藏野・名取川・大井川・藤枝集等尨大な撰集があり、立圃にも小町躍・花月千句・追善九百韻・明鏡・空礫等を始め、三十種に近い述作がある。誠に貞門の羽翼として伯仲の勢をなしてゐたのである。しかも兩雄雙び立たず、二人は遂に確執を生じて師貞德の不興を蒙るに至つたと傳へられてゐる。その確執を生じた原因について「滑稽太平記」卷二には、次のやうな事が記されてある。

不和となる根元は寛永八年に貞德長點を以て重賴犬子集を編みたり。仍て親重も發句を重賴へ携へけり。

螢火は川の瀨中の炎かな

維舟と立圃との確執

といふ句、貞徳長點なれば入句あるべきといふ。重頼が云く、貞徳以前の句に、

螢火は野中の虫の炎かな

といふに等類、ことに翁の句なれば遠慮なりとて入集せず。親重以の外に立腹し、翁程の名師が長點をせらるゝは、等類遁るゝ所有るにこそ、是非入集と再三言ひけれども、重頼許容せず。假令翁の長點たりとも、自句も數多にて失念もあるべし。我正しく等類と見ながら、其方を依怙して入句すべきにあらずと無人望に答ふ。親重なほ捨て難くて翁にかくと告げければ、翁重頼を近付けて、尤も其方のいへる所然かなれども、我句に親重の句は勝る作意あり、又少し心も違ふ所あれば、さして等類とは云ひ難き也。勿論等類たりとも執心深ければ我句損にしても不苦、まげて入集あるべし、餘りに厳しと笑ひ給へば、重頼重ねていふ、とかく親重とそれがし此の上は不和になるべし、さもあらば同門に肩をならべ顔を振合はせんも見苦しかるべし、向後親重を御許へよせさせ給ふな、さなくば某御出入申すまじきにて候と申しけり。其時翁氣色を損じ、さても其方五常をしらず、かゝる無道人と露聊か辨へずして日頃師弟の親みをなす所、我が不覺に今更なれり。親重をよせまじきと言ふ事仔細あれば得ならず、親重と其方出會いやならば向後出入無用なりとて散々立腹なりければ、重頼面目なく歸宅し、彌親重と不和の色を立て、兩雄の爭ひにたへず、和歌の道に背きてあさましき心中なりと、世の人爪はじきして疎んじければ、外の出合もなく、我門弟を一派に立て、俳諧郭に取籠りて撰集の謀取々なりとぞ聞えける。又親重も重頼と龍虎の齒がみをなして、古筆勘兵衞一村と談じ合ひ、貞徳長點を書集め、俳諧發句帳と名付け、四冊に全部し開板なり。然りと雖も親重は翁へ出入り昔に替る事なし。重頼は翁へ不通にして撰集犬子草を狗子集と改め　五冊に成就し板行に及び兩集前後を爭へり。

この「滑稽太平記」の記す所は、いかにも眞相を詳しく傳へてゐるらしいので、普通此說がそのまゝに信ぜられてゐる。だが一體此書は、――普通享保頃の作とされて居るが、實はやはり寛文頃の人の作と見られる。――史料的價値においてはあまり重きを置く事の出來ぬ性質のものである。やはり名の如く俳諧の太平記に過ぎない、例へばかの「俳諧水滸傳」や「蕉門頭陀物語」の如き類のものである。隨つて此書の記事が全然虛構でないとしても、これをその儘に信ずることはもとより出來ない。維舟と立圃　の確執一件なども、俳諧史上とりたてゝ論ずべき程の事ではないかも知れないが、少くとも貞門の重要人物に關する事件として、更に精確な考察が試みられなければなるまい。予はさういふ意味で、今少し事件の眞相を明かにして見たいと思ふ。

重頼の撰んだ「犬子集」は、その序文によれば、守武千句・犬筑波集以後の發句・附句の、其樣宜しきを自ら書集めて或る古老の波見に入れ、用捨の詞を加へて一集と成したものだとい

ふ。或る古老とは勿論貞德をさしてゐる。そして寛永八年二月業を始め、同十年睦月半ばに功を終へたのであつた。收むる句數、發句は一千五百三十、附句は千句に餘り、作者の數も二百人に近い一大句集である。而してその汎く世に行はれた事は、現存の「犬子集」に數種の異版があるのによつても窺はれる。予の寓目した範圍では美濃紙本一種、横本三種、合計四種の異版がある。で前記の「螢火は」の句は果してこの犬子集中に入集して居ないであらうか、これを美濃紙本と寛永二十一年刊本とによつて檢すると、――他の二種は今直接原本でしらべる事が出來ないから姑くおく。――その卷三に

螢火は川の瀨中の灸かな　孝晴

とちやんと出てゐるのである。しかもそれは右の通り立圃の句ではなくて、伊勢山田の孝晴の句なのである。「太平記」の記事に根本的の誤謬がある事は、この一事によつてもずでに明かであらう。しかし維舟と立圃との間に、犬子集の撰集がもとで何か不和を生じた事は事實であつた。それは史料として相當信憑するに足るべき「貞德永代記」の中に

貞德最初の句帳をば鷹筑波と云。是宗鑑の犬筑波に對したる心也。山本西武に命じて撰ゝ之。次の書を犬子集と云。親重に命じて撰ゝ之。是犬筑波の子方也。此集に付て親重と重賴と集をあらそひて違論に及ぶ。貞德へ訴へければ、兩方の樣子を聞給ふに、重賴我慢の非有ければ、貞德弟子分を不通せられけり。親重は相不ゝ替出入せられしを、重賴深くねたみ憤れば、兩人共に弟子分不通被申けり。依ゝ之兩人相互に威勢を爭ひ自立の點者となれり。是故に犬子集は兩人の編集也。云々

とあるのによつて知られる。「太平記」の記事も實は恐らくこの「永代記」の說に多く基いたものであらう。ではその二人の爭ひの原因は何であつたか。永代記だけではなほはつきりしない所があるが、貞室の撰んだ「玉海集追加」の卷末に、貞室自ら次のやうな事を記してゐる。

我師松永氏貞德あやしう道に堪へたりしかば、流れをむすぶもの多く侍りし中に、親重・重賴といふ者わきて此門に遊び、天文年中より以來の發句附句を拾ひて一集となし給へと、師に訴へしかども、集と名づけむことをはゞかりて、しばしうけひき給はざりしを、二子頻りに懇望せしかば默止がたうや思はれけむ、犬筑波の子方になぞらへて、犬子草といふ題號をもとめ、二弟にあたへ給ふ。よつて重賴筆をとり、親重心をひとつにして勢州山田の句帳をはじめ都鄙の句を集るに至りて、二子が中そばそばしう成行き、剩へ師門にも疎かりし。されど彼草案は重賴が所持せしかば、賴止ずして一千五百の句を集め、草を集と題して板行せしに、先輩たる親重が句を七十五句、おのれが作を百五十餘句書入れぬ。親重之を憤りげむ、四季に四卷の句帳を作り、犬子集の千五百句をも加へ、彼是二千六百

餘の句つづき、犬子には前後混亂あれど、賴が句はもとのまゝ百五十餘書つけ、重が句は倍して三百句しるし顯し、一村といふものに淸書させて開板す。しかありしより二子道をいどみて、重ははなひ草を作り、賴は毛吹草を撰み、おなじく追加を編めり。

これは貞室が寛文七年九月下旬に書いたもので、まだ立圃も維舟も在世當時のことである。且つこゝに述べてある通り、立圃は寛永十年十一月に逸早く「俳諧發句帳」四卷を刊行して「犬子集」に對應し、實際重賴の句は百五十、自句はその倍三百句を採錄してゐるのである。隨つてこれこそ此事件の眞相を語るものとして、最も信ずべき資料だといふべきであらう。しかもこゝにもなほ、はつきりとした不和の直接原因については記してない。しかし文面の上から、維舟が功を專らにしようとした爲め、兩者の疎隔を來したのである事は十分に窺ひ知る事が出來る。一體維舟は一面たしかに獨特の才をもつてゐたと共に、他面には自ら他を凌ぐ風があつた。前記の「玉海集」の撰者貞室なども實は長い間不和であつた。維舟の「毛吹草」に對して、貞室が「氷室守」を出して大いに難じたのは人の知る所である。又維舟は嘗て貞室の鼻が少し低かつたので、

朝顏の日まけをしてや鼻ひしやげ

として、皮肉にも貞室の方へ點取にやると、貞室もこちらへず

送り火や其身をこがす大文字

として重賴の方へ點取りにやつたなどゝいふ事が「貞德永代記」に見える。大文字といふのは維舟の屋號である。こんな風で維舟は恐らく同門の間にも多く喜ばれなかつたらうと思ふ。隨つて貞室のものした「玉海集追加」の跋文はもとより、「永代記」の記事にしてもとかく維舟に同情がない所以であらう。

さて右の貞室の記した所によつて、維舟と立圃との不和については、ほゞその眞相を知る事が出來たが、なほこの事に關して「俳諧獏物語」に注意すべき記事が見える。「獏物語」は晩山の門弟吉川石柱の撰で、京大阪の點者を評判した「俳諧山太郎」に對する返答書である。元祿五年三月上旬の開板にかゝる。そのうち三ツ物の由來を說いた條に、

立圃始めは貞德の第三をし、その後點をゆるされ、又我が家の三ツ物もいたされけるとぞ。立圃三ツ物を懷中し貞德へ來られしに、重賴・貞室がさかしらにて、佐保姫の發句よりして不和になり、貞德

とは別義あらねども、重頼・立圃いづれも〳〵おのづから遠くぞなりけるとなん。

といふ事が見える。即ちこゝには「犬子集」の編纂とは全く別な原因があげられてゐて、しかもそこには貞室も確執を起させた人物の一人となつてゐる。而してその佐保姫の發句といふのは、どんな句か分らないが、一體歳旦の三ッ物といふものは、慶安年間に貞徳が創めてから盛んに行はれるやうになつたといふ事だから、この佐保姫の發句一件は自ら『犬子集』編纂後更に不和を深からしめた一事件と見なければならぬ。

とまれ立圃と維舟とが「犬子集」編纂以來互に相反目するに至つたことは、以上の文獻に徴して明かにされた。しかしそれは今も文士や俳人の間にありがちな、一時の感情的な爭ひにすぎなかつた。やがて師貞徳も歿する。彼等の俳壇における立場もそれ〴〵にしつかりして來る。さうなると心から憎み合つた同志ではない、いつとなく昔の不和も忘れられて、彼等の心は又親しく歩み寄つてゐた。流石に一度疎隔した關係上、共に手を執つて語るまでには至らなかつたが、世間的の體裁さへ思はなければ、彼等はきつと快く談笑する事が出來ただらう。寛文九年九月立圃が歿すると、維舟はその追善集なる「立圃追悼集」(寛文十年七月刊)の巻頭、立圃の遺子のすぐあとに追悼の一文――この追悼文は維舟の「時世粧」(寛文十二年刊)にも出てゐて、なほ「時世粧」にはそのあとに追善獨吟百韻がある。――を手向けてゐる。その最後に、

たがひに道をすゝむるは、是春の花秋の月の伴ひ淺からざりしを、さいつころより野中の清水のぬるくなりたり。されどもとのこゝろをわすれずしてかくなん。

　　鼻ひ草やみな人そしらす記念草

――「時世粧」には之を發句として脇に

　　ちなみし友は昔部の月

と付けてゐる。――と述べてゐるのである。もとの心を忘れずといふ言葉に、維舟が舊交を懷ふ情の切なのを看ることが出來るであらう。

附記、立圃が「犬子集」に拮抗すべく編した「俳諧發句帳」は、鏤刻本もなく、傳本も稀なので、こゝにその春部の巻頭と、秋部の巻頭とを少し抄出して見よう。いかにそれが「犬子集」と競爭的のものであつたかゞ分る。「犬子集」の出版は寛永十年正月――前記四種の異本中美濃紙本が初版のものと思はれるが、出版書肆の名のみあつて刊年は記してない。しかし序文に十年睦月の半ば功を終るといふの

は、即ち上梓を意味してゐるものと見てよい。――であるのに、當時出版に相當手間のかゝるをり、いち早くその年十一月に立圃が「發句帳」を出版した事は、そこに猛烈な競爭的意志があつた事が認められるのである。而してその内容を見ると、恰かも「犬子集」を新たにやり直したかの觀があるので、その編纂の動機も十分に認はれるのである。

俳諧發句帳卷之上

春

元日

去年今年ふんはちかるやけふの春　貞德
年よると顔若水の影もかな　德元
×ありたつたひとりたつたる今年哉　春可
×春立やにほん目出度門の松
×去年は雨日本晴やけふの春
×大上戸東にありやにしさかな
×しめ縄や春をもくゝるいぬの年
姫はしめせんとや門に松ふくり
×先たつや梅かゝをかくはなの春　親重
うて子共けふあら玉の春の庭　長吉
×くる春は何をになふそ三ケ日　幸和
×むかひ見る餅はしろみのかゝみ哉　重頼
×けふの春笠きて立か天か下　吉厚
かすの子を取あけいはふむ月哉　以重
×天筆やかすみをそめて和合樂　良春
立こくらするか霞とけふの春　望一
×物んまうとれからくるそけふの春　愚道
×草も木もめてたさう也けふの春
×けふ咲は年つよなれや花の兄
×禮儀とてかさりわらにもはかま哉

（下略）

俳諧發句帳卷之下

秋

雜舟と立圃との確執

初秋

涼しさの口や秋たつ風袋　良春
うき雲や秋たつ風の力筋　親重
きゝの葉は秋たつ風の吹矢哉　同
×よたるかりし手足も立や今朝の秋　貞徳
×鼻あきも立とはしるや風の音　同
西ふくは達磨の息か秋の風　同
×風の神の袋の口やあきの空　重次
にしふくは似せ山伏か秋のかせ　幸和
すゝ風や今朝立秋の露はらひ　光重
雑談の口も秋立あした哉　宗富
×さひしさのおさなそたちか今朝の秋

七夕

×七夕の琴や雲井て乞巧奠

×星に物かす七月のしちやかな　貞徳
×七夕のなかうとなれや霄の月　同
×織女は手おりにするやゆくの布　同
七夕のまおとこなれや夜はひ星　同
七夕はけにつまゝれの契り哉　同
×きぬ〳〵はうき七夕の手織哉　長吉
×數有は孫彦星のひかりかな　望一
×牽牛のちきり時分やうしの時　重頼

×印は「犬子集」にすでに出てゐる句である。即ち春二十句中再出のもの十四、秋二十句中再出のもの十一句の多きに及んでゐる。初秋の題などは「犬子集」には四句しかないので、しかもその四句はすべてこゝに收められ、更にその上に增補してゐる形である。以てその全豹を推知することが出來よう。

（昭和四年九月）

西山宗因の連歌

我が近世文學史上に於ける宗因の地位については、今さら言ふまでもない。而してその地位は、彼が談林の新俳風を提唱した事によつて贏ち得たのは勿論であるが、當時貞門の古風に慊らずして、新しい轉向運動を起した人々は、決して彼一人に止まらない。特に比較的貞門閥の拘束を受けない大阪の若い俳人達の間には、宗因以上に尖端的な傾向を帶びた者が少くなかつた。にも拘はらず宗因のみが、ひとり新風鼓吹の先達と目されたのは、彼が俳壇的に最も先輩であつたのによる事が大きいだらう。しかしさうした先達としての一般的推稱を得たのは、全く彼が民間連歌師としての長い間の背景を持つて居たからである。貞德以來俳諧師たちは、俳諧は和歌連歌に至る楷梯的のものであり、隨つて和歌連歌より下級のものだといふ從屬的觀念の支持から、長い間免れる事が出來なかつた。勿論その從屬的觀念は、日毎に對立的觀念へ變りつゝあつたとはいへ、なほ寛文延寶の頃までは、連歌への事大的思想を捨て去る事は出來なかつた。宗因が連歌師として十分の素養を持つて居た事が、彼の俳壇的地位を重からしめ、延いて新風鼓吹の先達として權威づける有力な理由であつた事は拒む事が出來ない。況んや彼が伏見から大阪に移り住んで、天滿宮の月次連歌の宗匠となつて以來、その子宗春に業を讓るまでは連歌師として世に立つてゐたのであり、且つ晩年俳壇の重鎭と仰がれるやうになつてからも、全く連歌を捨てたのではなかつた。然るに從來宗因が連歌師としての半面は、殆んど檢討される事がなかつたやうである。それで今些か知り得た資料だけで、連歌師宗因のプロフイルを描いて見たいと思ふ。

宗因の句集として最も古い「俳諧發句むかしロ」(安永六年刊)によれば、彼はその主君風庵侯と共に釋將寺の豪信法印について和歌連歌を學んだといふ。釋將寺は作州津山にあつて「三籟集」には寂證寺に作つて居る。彼がこの寺と何等かの關係があつた事は、承應二年癸巳秋に成つた津山紀行によつても知られるのであるが、豪信法印との交渉については「むかしロ」の記事以外これを知るべき資料が全くない。しかし彼が又夙くから里村昌琢の教へを乞うて居た事は明かで、昌琢關係の現存資料はさまで乏しくないのである。松江維舟の「時世粧」によれ

ば「二八の比より連歌の道に心ざし」とあるから、元和末年の頃からすでに作品を殘したわけであるが、勿論その時代の作は全く知られない。從來知られてゐる彼の連歌として最も古いものは、寛永八年三月即ち彼が二十七歳の時、風庵侯と興行して昌琢の判を乞うた兩吟千句である。これは夙く大野洒竹氏の俳諧略史（俳諧文庫第二篇所載）に紹介され、また流布の寫本も割合に多いので、よく人の知る所である。然るに實はこれよりも更に古い作品が傳はつてゐる。それは寛永五年七月二十九日昌琢以下十一人の人々と興行した百韻一卷で、宗因が二十四歳の時の作である。當時彼はまだ豐一の本名を用ひてゐた。これは從來あまり世に知られて居ないやうであるから、その初折だけを左にかゝげよう。

寛永五七月廿九日

松の聲荻のはすりの軒は哉　昌琢
窓も箔（マヽ）もぬるゝ夕露　兼也
秋は雨の晴行跡と霧降て　昌俱
虫の音えらふ野への歸るさ　玄陳
月になる道の草村いろ〳〵に　慶純
涼しさあかぬ片岡の末　今相
幾度か袖に音する山風　久世
たゝよふ船はあら磯のかけ　存賀
衝なく波の遠近暮渡り　政重
そよく芦邊や霜のをくらん　豐一
冬かくる遲稻一村守捨て　昌佐
人氣も見えぬ笘ふきの道　正利
世に遠く入來て籠る山の奥　也
聞初るよりかなし鹿の音　琢
今宵しもかりねの枕身にしみて　陳
名殘露けき古郷のゆめ　俱
もろ共にめてぬは淋し床の月　相
念記（マヽ）あやなくならす爪琴　純
おもひをし昔なからも忍ばれて　賀
絶はてにたる契はかなき　世
蝶鳥もちれはさり行花の陰　一

西山宗因の連歌

以下百句中昌琢十三・兼也七・昌俔十一・玄陳十・慶純十・今相八・久世八・存賀七・政重八・豐一八・昌佐七・正利一の句別になつて居る。昌琢・昌純の兄弟が勿論座中の宗匠であり、里村北家の玄陳がこれについで居る事は當然ではあるが、かうした人々の座に連つて、年少ながら八の句前をもつて居た事は注意されねばならない。而してこれらの顔ぶれから見て、この百韻は勿論京都で興行されたものと認めねばならない。隨つて宗因は主家沒落以前既に一度京に上つて親しく昌琢の教へを受けてゐるのであつた。――この豐一を宗因と別人ではないかといふ考も容されるが、右の百韻を收めた原本は昌琢・宗因・風庵等に關係した作を最も多く集めてあり、且つ宗因以外の豐一ではないかと疑ふべき點も他にないので、これを即ち西山豐一であると推斷して多く誤る所はないと信ずる。――後に引用する昌琢二十五回忌追悼獨吟の詞書によれば、二十歳に足らぬ頃から三十餘歳まで師事したといふのであるから、たとひその最初は文通であつたとしても、かうして親炙する機會を、實際夙くから持つてゐたのである。宗因はかうしてすでに弱冠の頃から、里村宗家の許に至つてその鉗槌を受け、肥筑の邊陬に連歌道の正系を保持してゐたのであつた。恐らくこの後八代にあつても、風庵君等との詠吟は、屢々京都に送られて宗家の判を乞うた事であつたらう。而してかの寛永八年の千句の如きも、その中の特に長篇として世に知られ、久しく傳寫されるに至つたものであらう。寛永九年主家退轉後、彼が上京して再び里村氏の家を訪ねた事は、維舟の「時世粧」によつても知られるが、その後寛永十三年昌琢が歿するに至るまで、宗因に關する連歌の作品は全く見られない。昌琢歿後その子の昌程には直接師事しなかつたやうであるが、先師の子として敬意を拂つてゐたことは、「溫故日錄」（延寶四年）の序に「爰に宗因法師云。しかあらば只昌程の說を可守、其家なれば不可過之云々。是先師昌琢をたつとみ殊勝のをしへ也」とあるのによつても明かである。しかし昌琢歿後、宗因が最も親しく接してゐたのは、里村北家の玄的であつた。寛永八年の千句についで古い宗因の連歌は、寛永十五年西本願寺で興行された百韻である。今その一巡の顔ぶれだけをあげると、

寛永十五九月於西本願寺興行

何人

紅葉せぬ木々の下照軒はかな　玄的
月を待えしこすのとの庭　楓
夕霧に涼しき池の水晴て　正方
さゝ波よする秋風のをと　玄俊
ほのかなる陰の芦原なひき合　利水
田つらはるかにけふる朝霜　紹春
一村や山涯かけてつゝくらん　仲安
行袖見ゆる岡のへのみち　宗因
松のはやかく跡よりも落けらし　定長
常にあらしのすさふ眞砂地　満世
みつかきは人をも稀に物さひて　言當
朽殘りしはいつのしろ繩　昌通
ふしたちて早苗みたるゝ陰深み　執筆

の十二人である。右によつて知られる通り、正方も亦當時京都にあつて、玄的等と風交を重ねてゐたので、年代を明記してないが、右につゞいて原本にあげた百韻もやはり當時の興行と思

はれ、これには昌俱・仲安・玄的・正方・紹春・重玄　乘知・宗因・昌悅・滿世の十人が一座してゐる。又宗因の獨吟として名高い北野法樂千句も、寛永十五年の興行であるが、その發句

花に世の春知りそむる若木哉

は、一本によれば正方の作とある。とにかくこの頃の舊主從は、京都にあつて屢々玄的などの連歌の席に連り、宗因の連歌修行上かなり精進した時代であつたと思はれる。かくて寛永十七年二月、どういふ用事であつたか分らぬが、玄的・正方・宗因の三人は相携へて吾妻の方に赴き、途中伊勢尾張の間で、三吟百韻を催したりした。今宗因自筆の巻によつてその第三句までを示さう。

寛永十七の年二月十餘日のほとに(一本にや)ひとりふたりかひつられて東に(一本吾妻のかたに)行けるに伊勢おはりのあはひの海つらを漕はなれぬるおりふしの日すきひを百句(一本百ぬん)になし侍ぬ

賦初何連歌(一本ナシ)

みるめおふる所からかも春の海　玄的
鴈もわかれぬ浦の明ほの　宗因
月影も霞める波に舟うけて　正方

西山宗因の連歌

是より先寛永十六年冬讃岐に遊んで白峯に詣でたが、その海山の面影を思ひ浮べて百韻一卷を獨吟したのも、この寛永十七年の春であつた。その詞書と第三までを示せば、

寛永十六年冬の比おひ讃州に下りし次而に松山白峯寺にまうていともかしこき御影をおがみ奉る次のとし春見し海山の面影思ひ出らるゝ心さしを本として色なき言の葉を書つらねて浦の藻屑になすら〳〵蘆の塵に加る事しかり

獨吟　西山宗因

見はや見し其磯の松山櫻
さそな海邊の明ほの〻春
別るらん名殘を月に鴈鳴て

で、この發句は「三籟集」にも「讃州松山へ送し百韻に」といふ前書で出てゐる。又幕府の御連歌連衆山田通孝が天保十四年四月書寫した「宗因附句」と題する一書は、通孝のはし書に

此書名　讃岐下り水くらけと有て都より讃州迄の紀行狂文狂歌也。末に　君寵覽の後愚句のつたなきを集て、猶此跋に書加ふへきと重て下し給き。再三辭し侍れとなと有て、四季發句をはしめ此付句とも有。戯作者柳亭種彦とり出して瀬川昌澄に作者を尋ぬ。昌澄、昌成師に見せければ、これは西山宗因集なり、此書かの人自筆草稿なるへしといはれきとそ。よりて一覽し侍りける。發句は西山三籟集とてかの家三代の集有。此書に入たるも多くはかの集にあれは、こゝに付句はかりをうつし置ぬ。付句の末に　本來はいさしら波の水くらけほねなくみなくあちなかりけりやな　といへるたはふれ歌有。書名これにて名付たるなるへし。

とあるのによれば、前記の讃岐旅行の後編したものであり、又原跋に「君寵覽の後云々」とあつたといふのは、恐らく正方侯の所望によつた事と思はれる。しかし惜しい哉、その紀行は全く逸されて、只紀行の後に書加へた附句だけが寫し傳へられたのである。而してこの附句集は

燈も閑けき海に釣たれて　宗因
よるも硯にむかふ簾のもと

以下合計三百三十句を錄してあり、とにかく彼の附句における手腕を窺ふべき好資料といはねばならない。

正保五年長月の比、宗因は津の國中島のわたりなる、天滿の邊に移り住んだ。その事はかの「告天滿宮文」に詳しく記して居る所である。それ迄の數年間の作と推定されるものは、「三籟集」に發句が若干見えるが、その他に年代の明かな連歌はなほ知られない。たゞ

おしむとてとまらはいつを秋の暮　宗因
露も木の葉をかりそめの宿　宗也

以下兩吟の百韻一卷が、終に

伏見　宗因五十句　岩手　宗也五十句

と肩書してあるのによつて、浪華移居以前の作たる事が知られるのと、今一つ

加藤右典厩正方本國寺の前に石の橋をかけて諸の人々に緣をむすばれし供養の日さゝけ物につかふまつりし

橋柱立し誓や代々の秋　宗因

を發句とした獨吟百韻が、風庵歿前の作として明かなだけである。前者の宗也とは何人であるか判らないが、恐らくやはり風庵と因みある者であらう。又本國寺は風庵歿後その遺骸を葬つた所であるから、生前から歸依してゐて、かうした善根を修したものと思はれる。

風庵侯は慶安元年九月二十三日に歿した。翌二年の一周忌正當日には、次のやうな詞書の發句で、追悼の獨吟千句が宗因によつて手向けられた。

妙風庵主いにし年の秋の末つかたうせ給ひし今はのとちめに、一句一首の言の葉を殘しをかれぬ。ことはりの齡なれと、我身にとりては頼む木陰の枯果る心地そし侍る。志學の比ほひよりことに情をかけてめくみ給ひし心さしの程、中〳〵云はおろかなり。されは其思ひをむくふるたよりにもならはなれとて（一本されは世俗のつたなきことの葉をひるかへして、ねかはくはその恩のむくふるはしにもなれ、かつは罪をかろむるたよりにもならはなれとて）かの二くさの文字を句の頭にすへて、やうやうつゝり行まゝに百千の數におよへるを、一めくりの法のことわさに捧て佛に備ふる物ならし

慶安二年九月二十三日

第一

終にゆく月日はけふや去年の秋　宗因

かの二くさの文字といふのは、風庵の辭世「つきもあはれこよひを秋の名殘哉」、「梓弓八つの苦しみ受けし世も引離れては本末もなし」の一句一首をさすので、始め四十九句の頭につき以下の四十九文字を据ゑて追善の意を籠めたのである。この千句は傳寫の本も珍しくないが、又「宗因連歌千句」（内題には「西山宗因當流連歌千句」とある）と題した延寶七年の刊本もある。蓋し宗因の連歌の作品中、最も代表的なものゝ一であらう。志學の年頃から愛された君恩を思うて、

こゝに彫心鏤骨の長篇となつたのである。この追悼千句と同時に、風庵の家臣青木宗忠が殉死したのを悼んで、

青木氏兵三郎宗忠はあるか中にむつましきものに思ふ給ひしかはかなしびに堪かねてしての山路にも隨ひ奉らんとにやみつから刄の上にふして同し莓の下に埋もれぬ名とともにのこれる俤忘かたくて百の手向草に露の志を置てひとつ臺にもとねかふのみ

　　殘る名にかへて消けり萩が露

を發句とした獨吟百韻をも手向けた。

承應二年七月作州津山に旅行した。そして同地で

　　國民の姿になびく秋田哉

を發句として、連歌の興行などがあつた事は、津山紀行に見えて居り、又「三籟集」にも作州での秋季の吟が四五句出て居る。翌三年は風庵君の七回忌に當るので、

　　七かへり卷ほす袖や露の秋（三籟集）

の吟があつた。ついで明暦二年九月には向粲庵が成り、かの告天滿宮文を作つて文運を神に祈つた。それはもとより連歌師宗因としての立場からの祈願であつたが、この頃から彼は又俳諧師一幽として、漸く俳壇的の活動を見るやうになつた。その俳諧の發句は、すでに津山紀行中にも散見するのであるが、明暦二年刊の俳書「夢見草」には發句五附句二が入集し、萬治・寛文の際に至つては、もはや彼の本領は俳諧に存すると言はねばならなくなつてしまつた。事實寛文以後の宗因は、その俳諧生活に於てのみ考察されゝば足りるので、彼の連歌は全く俳人としての素養を示す背景の役割を演するにすぎなかつた。隨つて宗因の連歌に關する研究も、實は寛文以後の事については、深く穿鑿する必要もないのであるが、宗因が眞に所謂談林の新風を鼓吹し出したのは、寛文末年延寶初年の交で、それまではやはり貞門の古風に終始して居り、眞面目な場合はいつも俳諧に代へるに連歌を以てしてゐる。即ち彼の創作的興味は多く俳諧に傾いてゐる事は勿論だが、少くとも自己の本領が連歌師であるといふ事を、窃かに誇として居たにちがひない。それは貞門の俳人たちに通有な觀念であるべき筈だつたからである。だから萬治・寛文頃の彼の連歌に對しても、なほ一顧の必要は存する。

風庵追悼の千句以後、宗因の連歌として傳はつてゐるものには、萬治三年昌琢二十五回忌の

追善として興行した

萬治三年二月五日故宗匠昌琢法眼身まかり給し月日にあたり來し方をかそふれは二十年あまり五回の夕霞もきのふの夢とことならすして夢にたにもみすしかはあれと詞の林にあそひ心の泉にのそむともからは其風をしたひ蘆をつく事もよととも絶へからすなん予門人のつから(マヽ)にて甘たらぬ程より三十あまりまてなつさひつかうまつり御めくみはた筑波山の陰よりもふかく和歌の浦の砂よりもしけし今又難波入江の藻屑にしつみては老をやしなふたすけともてあそふに付ても其御こゝろさし忘るへきにあらすかしいにしへ窓をならへ灯をあらそひし人々みな黄なる泉に名のみ殘す世の末にしも離面とゝまりて此年に逢侍るしるしはかりにややむ事を得すして百の手向草をつみて影の前にさゝけ奉る物ならし

年月や去も來るも夢の春

以下の獨吟百韻がある。この年は又風庵の十三回忌にも當つてゐるので、

消にきにみし世の影やけさの月（三籟集）

の發句があるが、連歌は傳はつてゐない。なほ同じく昌琢追善の獨吟百韻で、

思はすと今しも人を春の夢

を發句とした一卷が存するが、これは年代が明かでない。――「三籟集」にもこの發句は出てゐるが、何回忌の吟か判らない。――ついで萬治四年正月十一日、子息宗春と共に興行した伊勢大神宮法樂の兩吟百韻がある。

賦初何連歌

日の御影いたるかきりや神の春　宗因
四方ものとかに明る天の戸　宗春
白雲もひとつに峯の花さきて　同
駒にむかひの山はるか也　宗因
川つらに月はのこれる朝朗　同
霧ふかゝらし岸の呉竹　宗春
船下す袖ひやゝかに雨はれて　同
けふりもうすし遠方の里一　因

がその表八句である。寛文二年三月には東路の旅を思ひ立つて遠く岩城の城下に至り、松島をも一見して歸つたが、旅中娘の訃報を得て悲みのあまり、獨吟百韻一卷を遙かに手向けた。そ

の連歌は當時の紀行の終に載せる所である。――この松島紀行は自筆草本をはじめ二三の傳寫本があり、又寛政元年刊の宗因追善集「葛の葉の」の中にも收められてある。――東の旅から歸つた彼は、寛文四年秋に又筑紫の空にさすらつて、豐前小倉の城下にとゞまり、小笠原忠真公のために七十御賀千句の獨吟を奉つた。

年毎の若菜そためし千代の春

がその發句で、この句は「三籟集」にも錄されてある。それは寛文五年正月のことである。宗因はその後寛文十年にも小倉に至り、廣壽山の法雲禪師に參して剃髪し、

いざ櫻我もそなたの夕嵐

の吟があり、なほ九州に遊んだをりの發句は、「三籟集」中に多く見えるが、連歌の作は傳はつてゐるのを知らない。

寛文末年から延寶初年にかけては、彼の俳諧方面の活動が烈しかつただけ、連歌の作は殆んど見られない。只延寶二年七月十一日、明石人丸社法樂に奉つた獨吟百韻が知られるだけである。但しこの一卷は些か彼が得意の作であつたのか、自筆の傳本が二三存し、傳寫本も少くない。大野酒竹氏の俳諧略史にもすでに紹介されてゐる通りであるが、その幽韻に富んでゐる點に於て芭蕉の俳句と相接する思ひがする。宗因が若しこの幽韻を俳諧化する事に努力したならば、俳諧の藝術的建設は芭蕉をまたずして成功したかも知れないのであるが、何にせよまだ時代が早すぎてゐた。さて延寶に入つては右の一卷以後、全く連歌の作を見ないのであるが、傳へる所によれば、晩年には談林末流のあまりにも放縱な風調を歎じて「なんにもはや楊梅の核昔口」の一句に俳諧の口を閉ぢて、再び連歌に還つたと言はれてゐる。これはその儘に信ぜられない點もあるが、少くとも歿する二三年前から俳諧の作が減じてゐる事は事實であり、又その頃門人に送つた手紙の中にも、俳風の亂脈を嘆じてゐた事が窺はれる。而して延寶二年以後絶えて見なかつた連歌の作が、延寶七年には二卷も發見されるのである。その一はこの年五月十五日、定之・道方・玄室・江由・加傳・玄智・如休・道本・俊正・正繁・吉之・安貞等と催した百吟で、次にその第三までを示さう。

賦何人連歌

五月雨も旅居にまくる日數哉

西山宗因の連歌

山ほとゝきす音つるゝ宿　定之
うつし植し軒の橘花さきて　道方

今一つは同年七月二十五日から峯（一字名であるから貴人であらうが、今何人であるかしらべてない）常副・守供・氏重・經冬・氏延・守相・氏守・守厚・元哉・俊正等と催した千句で、その第一の發句は峯、第十の發句は宗因の吟である。これによつても、さきの百韻と共に宗因が一座の宗匠であつた事が窺はれる。この頃から歿するに至るまで、なほかうした連歌の作はあつたらうと思ふが、今遺憾ながらこの外に傳はる作品を知らない。

宗因の藝術はかうして連歌に始り連歌に終つて居るといつてもよい。而してその壯年時代の連歌は、彼が俳諧師として重きをなす爲の素養であり背景であつた。その點に於て彼の文學的經歷上重要な關係をもつてゐるが、晩年時代の連歌は、彼が談林の新風にもなほ藝術としての眞意義を見出し得ない不滿から、再び眞面目な創作慾の逃避所として、これを求めたのではあるいまか。さう考へると宗因の晩年の胸中には、やはり芭蕉と同じ惱みが渦卷いてゐたのではないか。當時もしも彼がなほ十歳二十歳若い年齢であつたとしたら、芭蕉と同じ仕事を彼がし得なかつたと誰が斷言出來よう。いづれにせよ宗因の晩年におけるかうした動きは、彼個人としての問題のみならず、大きな時代相の一つのあらはれとしても看過する事は出來ない。要するに宗因が、時代の推移に最も敏感であつた事は、否めない事實であつたのだ。

（昭和六年十一月三日）

〔補記〕

宗因の連歌に關する資料として、その後知り得たものをこゝに補記しておかう。まづあぐべきは寛永十六年四月近衞公の許で催された手句である。興行の連衆は公並びに法橋玄的・澁野井中納言季吉以下合計十三人で、その一人に宗因も加はつて居るのである。今その第一卷の一順だけを左に掲げよう。

寛永十六年卯月十一日於近衞櫻御所

第一　何木

十かへりの春にもあかし百の梅　梧

する永日のくもりなき庭　玄的
鶴さはに住池水は長閑にて　季吉
岸根にむすふ氷とくらし　教廣
行舟の跡もかすめる風の音　玄俊
雨の名こりの光しつけき　昌通
月出るかた山陰の露ふかみ　紹尚
くるれは野邊にしるき鹿の音　紹春
いつしかに色めき渡る眞萩原　了純
そよき立たる薄むら〳〵　了心
あらし置賤が田面の末廣み　兼寛
ほとりも澤の波や越らし　宗因
ねし床をはなるゝ鶯の聲はして　昌悅

この卷中宗因の附句は七句で、他の卷も八句若しくは七句づゝの句前を持つて居る。しかし彼が發句をした卷は一もないので、まだ一座中では後輩として取扱はれて居たのであらう。だが當時三十五歳の彼として、それは當然の事であつた。

次に舊主正方等と一座した百韻一卷がある。これは年代が明かでないが、正方生前の事であるから、恐らくやはり寛永末年頃の興行であらう。今表八句のみをあげておく。

苗代の水よりあまるみとり哉　利宗
柳にのこる春雨のつゆ　正方
燕飛入日かくれの風絶て　玄的
かへるさかすむ里はるか也　宗因
山本のかたへいつしか鋤わたし　重成
岩間〳〵に生る草むら　直政
夕川の流ほのかに月みへて　政春
舟さしとむるきりの遠方　執筆

卷中の句數は利宗十五・正方十六・玄的十九・宗因十四・重成十一・直政十三・政春十二・執筆二で、勿論玄的の捌きを受けたのであらうが、この一座では宗因は恰かも中堅の地位にある。

なほ浪華移居前の作と思はれるものに、

西山宗因の連歌

見る月を見るや心の友鏡　英方
ね覺や同し四方の秋風　宗因

に始まる兩吟――原寫本には第三以下句主の名を記してないので、或は英方の發句を乞うて脇以下を宗因が獨吟したものかも知れない。別本を得て定むべきである。――百韻がある。英方は本文一八二頁にあげた宗也の事で、その傳については、雜誌「木太刀」昭和七年三月號所載大西一外氏の「俳諧無駄言」中に詳しく述べられてある。これによれば宗也は讃岐國主生駒高俊の家士で、岩手治左衞門尉英方といひ、入道して宗也と稱した。寛永十七年主家が退轉して出羽に遷された時、浪々の身となつて相模小田原に棲み、寛文頃歿したらしいといふ事である。彼はかねて歌道を嗜み、又連歌を里村昌琢に學んだ。その外狂歌・俳諧をもよくして、後撰夷曲集や西鶴の俳諧師手鑑等にもその作が見える。右英方・宗因兩吟――或は宗因獨吟か――を載せた同じ寫本中には、なほ昌琢が歿した時の追悼獨吟を始め、宗也の作を二三載せて居るが、その中には寛永六年讃岐から昌俔の許に送つた百韻もある。案ふに宗也と宗因とは、同門の關係から親交があつたので、かの寛永十六年の冬宗因が讃岐に遊んだのも宗也に招かれたのかも知れない。

大阪天滿宮所藏の文書によれば、慶安五年壬辰二月廿五日菅家神退七百五十年萬句の興行があり、各卷その第三までを傳へて居る。第一は關白左大臣近衞尚嗣公の發句、第二は天滿宮神主兵部少輔三春の發句で、その脇を宗因が附けて居る。今右二卷だけを左に掲げる。

第一　梅御何　尚嗣公
神代にも木々のはしめの梅花、　三春
往來絶せぬ瑞籬の春　玄陳
朝な〳〵眞砂地白き雪消て

第二　鶯山何
鶯も言の葉そへよ神の春　三春
注連ひく門のあら玉の年　宗因
汲水も今朝若ゆてふ影見へて　吉種

因に云ふ、大野洒竹氏の俳諧年表（俳諧文庫第二篇所載）明暦二年の條に、「菅公七百五十年祭忌、西山宗因萬句を大阪天滿社に於て興行す。二月廿五日」とあるのは、右の萬句興行を誤

つたのであらう。菅公の七百五十年祭忌は正しく慶安五年で、明暦二年ではない。

なほこの外延寶二年正月に久任・宗春と三吟で、宗因七十賀の連歌が興行された事が「十載薦」の記事によつて知られる（「西山宗因」一七九頁參照）。その他本稿にあげた資料については、雜誌「同人」昭和四年五月號所載拙稿「天滿廟文庫の宗因連歌」にやゝ詳しい解說を試みたものがある。

〔追補記〕

宗因の連歌に關する資料はその後なほ多く發見され、すでに拙著『俳諧史論考』（昭和十一年刊）の中にも、「西山宗因の連歌補考」の一項を設けた程であるが、それでも他に洩れた資料が少からず存する。結局それらの資料を總括して、新たに稿を起す外はないのであるが、今は單に一の研究報告として舊稿のまゝを茲に存しておく。

西山宗因

「先德多かる中にも宗鑑あり、宗因あり、白炭の忠知あり。上に宗因なくんば我々の俳諧は今以て貞德老人の涎をねぶるべし。宗因は此道の中興なり。」と芭蕉は言つた。「歷代滑稽傳」の所謂古風の俳諧をたゝき破つて、天地の間に獨歩した西山宗因こそは、實に芭蕉の言葉通り俳諧革新の先達であつた。俳諧そのものゝ基礎は勿論貞德によつて築かれたのではあつたが、それはなほ連歌の傳統的保守的な臭味から十分に脫したものではなかつた。その滑稽といふのは寧ろ鈍重な言葉の洒落にすぎなかつた。新しい民衆文學として、眞に淸新潑剌たる面目を帶び來つたのは、宗因出でゝ後の事だつたのである。彼こそは實にわが近世新興文學の魁をなしたものといはなければならぬ。俳諧文學における芭蕉の名はもとより不朽であらう。しかし蕉風俳諧の完成のために、まづ傳統破壞の先驅的事業に努力した宗因の功を沒してはならない。今日芭蕉がもてはやされるのに比して、宗因の名が動もすれば忘れられやうとするのは遺憾と言

はねばならぬ。

宗因は肥後の人、西山氏、名豐一（トヨカズ）、通稱次郎作といふ。肥後八代の城代加藤正方の家士であつたが、寛永九年主家退轉の悲運に會つたので、暇を賜はつて浪々の身となり、始め山城の伏見に住んだ。然るに舊主正方は、風庵と號して連歌を嗜んだので、豐一も共に作州津山釋將寺（一に釋證寺）の豪信法印に從つて和歌連歌を學んだ。又遙かに里村昌琢にも教を乞うたものと見えて、寛永八年風庵君と兩吟の千句に懐惠庵の點を乞うたものが傳はつてゐる。（「補記」「宗因の連歌」參照）所謂寛永千句である。そんな關係から浪々後は連歌を以て身を立てようと思ひ、里村家を訪ねて深く筑波の道に分け入つた。當時恰かも松江重頼は、「犬子集」の爭ひから師の貞德をはなれて、同じ懐惠庵の門にあつたので、宗因とも親しく相交はるに至つた。一體維舟は貞門から出て別に一流を立て、最も異色に富む作風を成した人である。その晩年の作などは一口に古風とはいふものゝ、殆んど談林の句と擇ぶ所のないものも多い。案ふに宗因がかうして當時重頼と相識つた事は、偶々彼の爲に連歌から俳諧に轉ずべき機緣を作つてくれたといふばかりではなく、又その特異の作風からうけ得た感化も少くなかつたらう。重頼は宗因より二歳の年少ではあるが、俳諧に於てはもとより先輩である。連歌以外にこの自由な俳諧の天地があることを知らせて、以て彼の心を誘つたのは必ずや重頼であつたらうと思ふ。爾來兩人の交りは次第に篤く、宗因が愈々俳諧を專門とするやうになつてからは益々親しさを加へた。その事は維舟の「時世粧」等によつても知られ、又鬼貫の「ひとり言」の中にも彼がまだ二十歳に足りない頃、維舟宗因一座の會に出た事などが記されてある。鬼貫が二十歳の時は卽ち維舟の歿した延寶八年である。だから彼等は寛永以來殆んど終身親しい交游をつゞけてゐたのであつた。維舟は前記「時世粧」の中にかう記してゐる。

彼人もとは肥の後八代の生れなりしが、二八の比より連歌の道に心ざし、遙にのぼりて京人となり、里村氏の家を尋ねて學寮あればすなはち入より、わたり近き予も折ふし毎に連歌のちなみ淺からざりし。又萬治の比より俳諧の會合斜ならず招まねかれて、京大坂へも打つれいとゞむつまじかりき。うちつけのむかしを思出るに、いそぢの春の曙秋の夕ぐれを、あるは一封の書狀にたはぶれ、あるはたいめして下の心を靜にさゝやきけるに云々。

これは寛文十年に書いたものであるから、「いそぢの春の曙秋の夕ぐれ」をその儘に解すると、